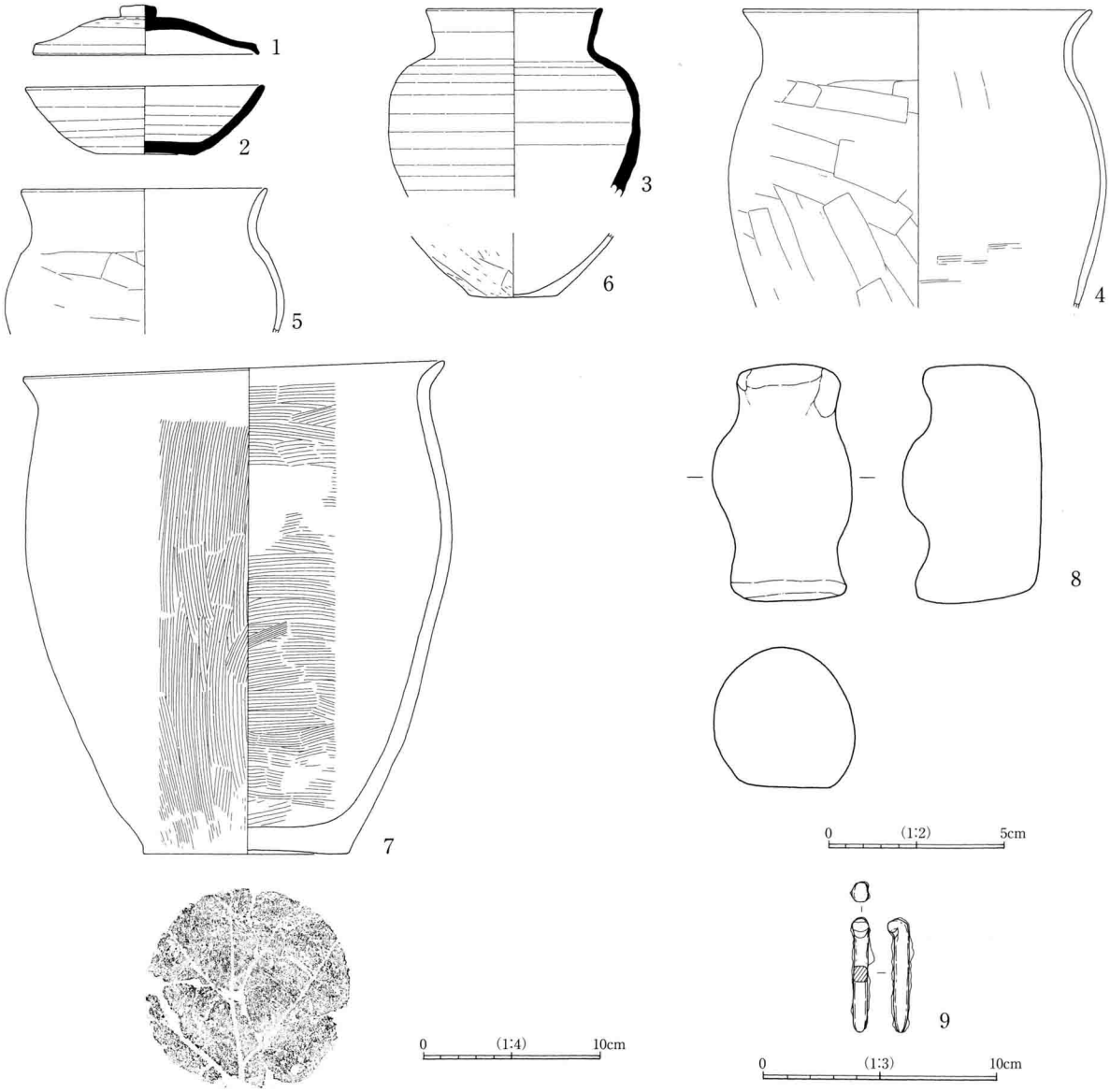


図75　SB108出土遺物実測図（S＝1～7；1/4　8；1/2　9；1/3）

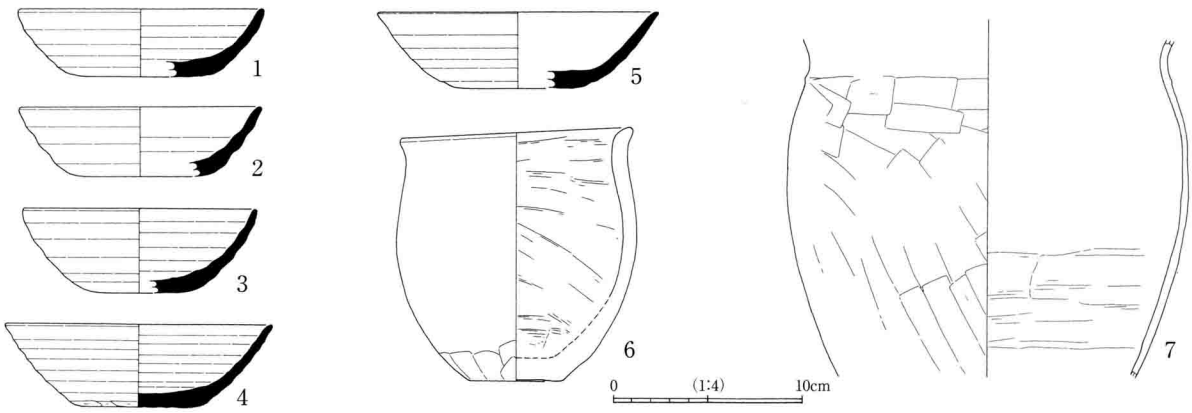


図76　SB103出土遺物実測図（S＝1/4）

14cm代（4・5）があり、いずれも底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。4のみ外面下端に静止ヘラケズリ調整が認められる。土師器甕は大小それぞれ1点ずつ出土している。6は小型甕で、外面調整は摩耗により

不明である。内面はナデ調整で、底部付近は内外面ともに静止ケズリが施される。7は外面ケズリ調整の甕で、胴部上位は横方向、中位以下は斜め方向にケズリが施され、内面はナデ調整である。なお、土師器甕と須恵器杯2はカマド付近より出土している。

以上の様相より、奈良時代前半期に該当すると考えられる。

SB110・SB105・SB133（PL－7・8、PL－X－5）

SB110　SB108の南側で検出された竪穴住居である。SB132・SB133を掘り込み、SB108が上層に重複する。ただし、重複するSB108下で壁面が確認され、ほぼ全体を把握することができた。

3.65×4.33mを測る、長方形プランを呈する。床面はカマド・柱穴を結ぶ内側には床が貼られ、外側は硬化面として把握できた。柱穴は4箇所確認され、4主柱構造である。南東側の2箇所は円形であったが、北西側の2箇所は長方形を呈し、形態が異なる。カマドは北西壁中央部で検出された。火床はおよそ径40cmの範囲で検出され、中央部を中心に黄白色に熱変していた。また、火床前面には炭の散布が確認された。袖は左右ともに部分的ながら確認された。左袖は壁面から火床まで焼けた内壁が検出された。さらに、高さも煙道天井部付近まで確認され、ほぼ垂直に立ち上がる壁面は残存していたと考えられる。外側の粘質土はほとんど残存せず、焼土粒や炭の散布が認められたことより、意図的な除去が確実視される。右袖は左袖に比して残存状況は悪い。内壁は壁面付近のみで、高さも煙道底面高と左袖の2/3以下である。外側の粘質土も存在せずに焼土粒の散布が認められ、左袖と同様の状況と想定される。煙道は奥壁でカマド内部と段をなして接続している。接続部より0.5mにわたって天井が残存し、断面形態は下部が丸く、上部が合掌形に近い扁平な水滴形を呈する。煙道は壁外に真っすぐに緩傾斜を有して、2.1m延びる。また、徐々に幅を増し、奥壁に至って垂直に立ち上がる。なお、奥壁付近では石材の出土がみられ、煙出しには石材によ

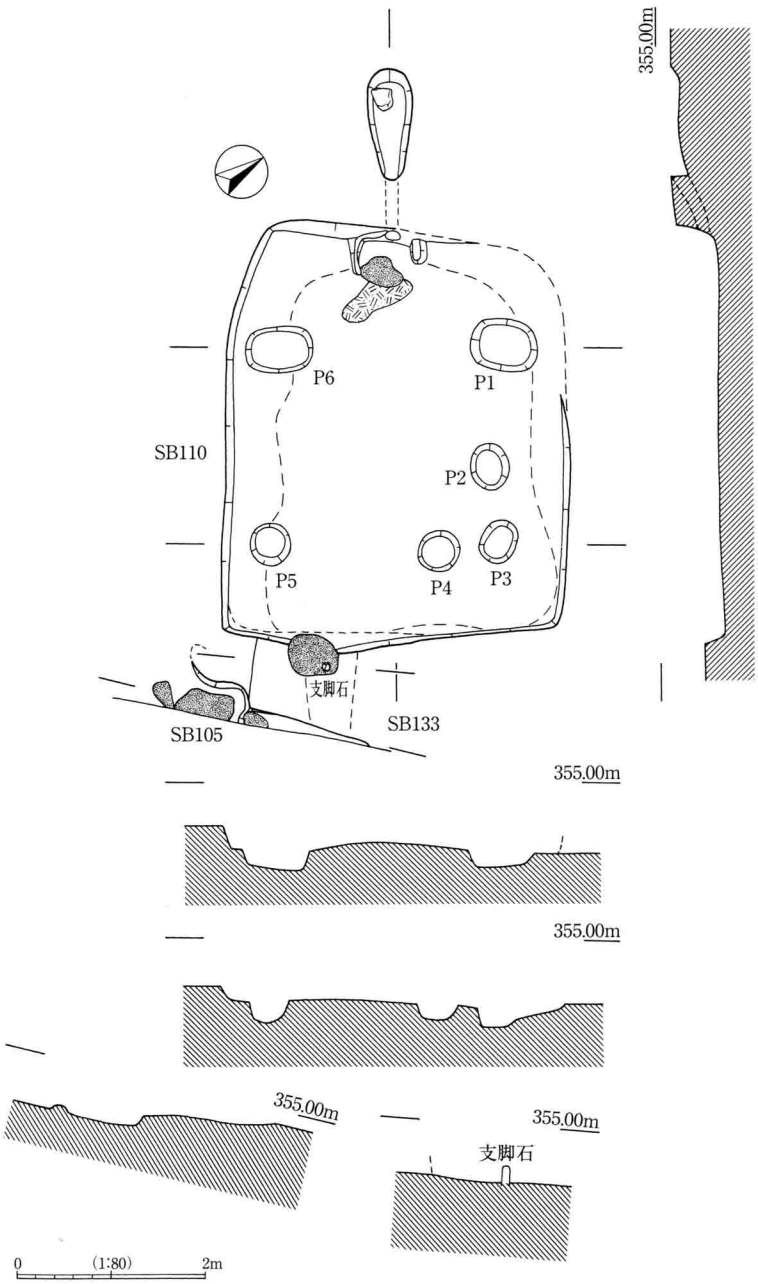


図77　SB110・SB105・SB133実測図（S＝1/80）

り雨水対策の構造物が伴った可能性が考えられる。

遺物はカマド内を中心に土師器・須恵器が出土している。土師器は杯１点が図化できた。口径13.9cm、器高3.8cmを測り、内面黒色処理である。底部は回転ヘラケズリ調整が施されている。カマド内より出土している。須恵器は蓋・杯・短頸壷・長頸壷がある。杯は５点、図化・掲載した。口径は12.7～13.1cmを測り、４のみが14.1cmと大きい。器高は６が3.2cm、２が3.5cm、３～５が4.0cmである。いずれも底部は糸切りである。４・５は覆土中、６は北側隅部床面上より出土している。３はカマド内とＰ１脇、２はカマド内とＰ６出土片がそれぞれ接合している。短頸壷は覆土中より１点出土している。口縁部は短く外傾し、端部に明瞭な面をもつ。長頸壷は口頸部片で東側隅部床面直上より出土している。鉄製品は他住居に比べ多量に出土している。10は鉄製苧引金である。Ｌ字形を呈し、屈曲部付近の表裏面には木質が付着している。また、裏面では先端部にかけて木質が残り、屈曲側に木製柄が取り付けられていたことが確実である。なお、苧引金は通例、鋏状を呈するが、もう一方の屈曲部は観察されない。12は全長17.8cmを測る棒状品である。断面方形を呈し、幅0.9cm、厚さ0.7cmを測る。両先端部は錆化により不明であるが、形状からは破損はないと考えられる。また、同様な棒状品の破片とみられる小片がカマド内より出土している。11も棒状の不明品であるが、扁平な断面形態を呈し、欠損部側で緩やかな湾曲がみられる。先端部は錆化により欠損の有無はわからないが、破損痕跡がみられないことから完結していると仮定すると、ピンセット状を呈する可能性が考えられる。

このほか、不明小片が１点出土している。鉄滓は690gほど出土している。６cm四方の亀の子状鉄滓から微細小片まで各種認められる。覆土中下層を中心に住居全体から出土し、特に集中的に出土する傾向はみられなかった。また、確認された施設に鍛冶関連と考えられる遺構はないが、カマド内から鉄器片が出土したことや鉄滓や鉄製品の出土量は他住居跡に比して多いことなどから、小鍛冶を行っていた可能性は十分考えられる。

写真13　SB110出土鉄滓

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

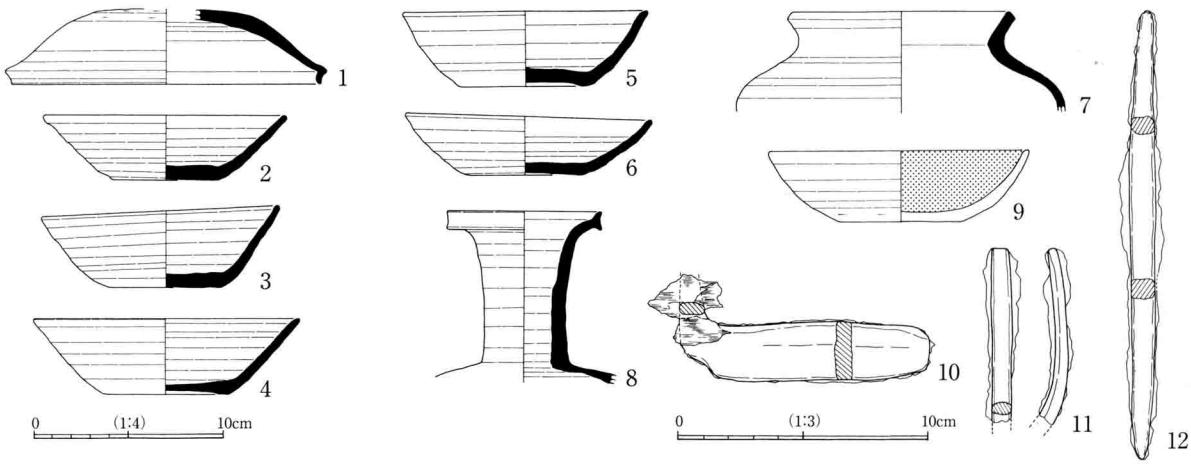


図78　SB110出土遺物実測図（Ｓ＝1～9；1/4　10～12；1/3）

SB105　SB110の南側、調査区壁際にて検出された竪穴住居である。SB133床面上層に重複してカマドが検出された。火床・左袖・煙道が確認されたが、ちょうど調査区壁に掛っているためおよそ半分が調査区外となる。火床は長軸0.6mを測る範囲で焼土が検出され、中央部が黄白色に熱変するなど、良好な状態で残存していた。

左袖はカマド奥壁から続くわずかな痕跡が残存していたにすぎず、内壁底部が確認されたに止まる。煙道は奥壁でカマド内部と段をなして壁外へと続く。奥壁は焼土壁というほど焼けてはいなかったが、煙道接続部底面には焼土が確認され、よく焼けていた。煙道は緩やかな傾斜を有して、壁外に1.35m延びる。ただし、直立する煙出しは明確には把握できず、調査区外である可能性が考えられる。

カマド以外は判然としなかった。図77の「(SB105)」と記載した範囲において、全面的ではないが暗褐色粘質土の存在を確認したことから、グリッド調査様に掘り下げと精査を繰り返し実施した。その結果、南西壁は調査区壁付近で一部を確認できたが、西側隅部ならびに北西壁はまったく把握することができなかった。東側・南側隅部は調査区外、北側隅部はSB110の重複により失われていて、西側隅部が把握できなかったことにより住居形態の確定には至らなかった。床面も不明瞭で脆弱であった。カマド検出高を基準として把握を試みたが、貼床や硬化面の確認はできなかった。また、床面上あるいは直上を示すような遺物のまとまった出土も認められなかった。このように住居形態を明確に把握することはできなかったが、確認された北東壁（カマド）と南西壁より、およそ4m四方の正方形プランを呈する可能性が考えられる。

遺物はカマド周辺より土師器・須恵器片が少量認められたにすぎず、図化・掲載できたものはない。鉄製品はカマド外のSB105想定範囲内の覆土中位より出土している。いずれも調査区南壁に近い側での出土であり、SB105に属す可能性が高いと判断される。1は鉄製鎌で角部に折り返しが認められる。折り返しは乙技法である。残存部は直刃鎌状であるが、先端部に向けてわずかに湾曲が認められ、曲刃形態になると想定される。2は錆化が著しく、細部形態は不明であるが、基部は折り返し状となり、緩やかに湾曲する形態から小型の曲刃鎌である可能性が考えられる。3はいわゆる毛抜き状鉄器である。ほぼ完形品であるが、片側先端部が欠損している。断面は方形を呈し、幅1cm、厚さ0.4cm程度で先端部まで一定幅を保つ。先端は丸くなる。頭部には環が付く可能性が考えられるが、錆化により判然としない。このほか、鉄滓が154g出土している。より多くの鉄滓が出土しているSB110より混入した可能性が考えられる。

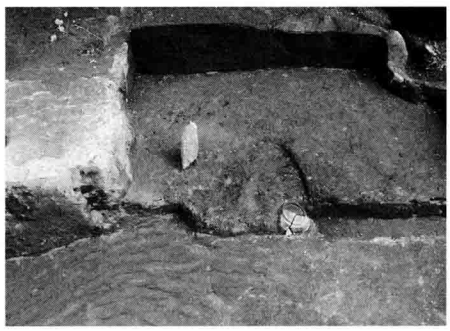


写真14　SB133カマド

SB133　SB110と調査区南壁間で検出された竪穴住居である。北東側はSB110に、南側はSB105に掘り込まれ、極一部分が検出されたにすぎない。床面は南側で貼床が確認された。柱穴は検出されていない。カマドは火床のみで、袖・煙道などは残存していなかった。火床は直径0.5mの範囲で検出されたが、SB110側に黄白色に熱変した焼土がみられ、SB110の掘り込みによって北西半部は失われていると考えられる。焼土の東側では、1辺10cm程度の柱状石が立てられており、支脚と考えられる。

遺物は火床上より須恵器高台付杯が1点出土している。口径12.4cm、器高3.3cmを測る完形品である。底部は糸切り後、周縁部にのみ回転ケズリ調整を施す。高台はほぼ垂直に下り、外面接地となる。鉄製品は覆土中より1点出土している（4）。断面方形の棒状品で、刃はついていない。端部に向けて緩く弓なりし、端部直前で角度を変じて内側に屈曲している。もう一方の端部は欠損していると考えられる。

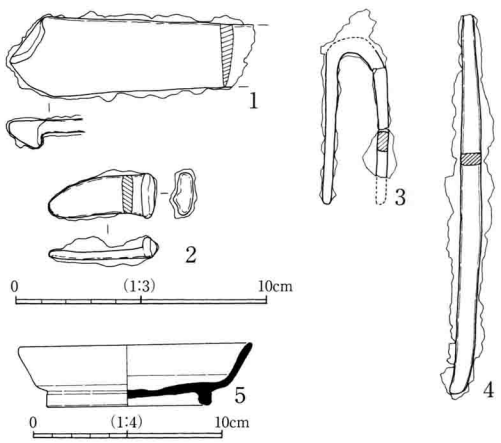


図79　SB105・SB133出土遺物実測図

（S＝1～4；1/3　5；1/4）

1～3：SB105　4・5：SB133

SB132

SB110・SB108の東側で検出された竪穴住居である。東西辺は5.2mを測り、南側はSB108・SB110の重複により大半が失われている。また、北東側をSK125に掘り込まれている。なお、SB103との重複関係については把握できなかった。

床面はSB108とほぼ同一高で硬化面が確認された。柱穴およびカマドなどは検出されていない。特にカマドに関しては、本地区で検出された竪穴住居でカマド敷設の事例が大半を占める北東壁と北西壁が確認されているにもかかわらず痕跡すら認められなかったことからは、存在しない可能性が考えられる。

遺物は土師器・須恵器が出土している。1は覆土中層より出土した土師器高杯脚部片である。外面はミガキ調整、内面はナデ調整で、わずかに残る杯底部から杯内面は黒色処理が施されていたことがわかる。2は覆土出土の須恵器杯で、復元口径13.0cm、器高3.7cmを測る。底面は糸切りである。3は太型蛤刃石斧で覆土中より1点出土している。刃部に一部欠損が認められるが、ほぼ完形品である。1は古墳時代中期後半、2は平安時代、3は弥生時代中期に該当し、各時期の遺物が混じる。特に弥生時代中期と古墳時代中期の遺物は本地点で該期遺構の検出がないことから注意される。

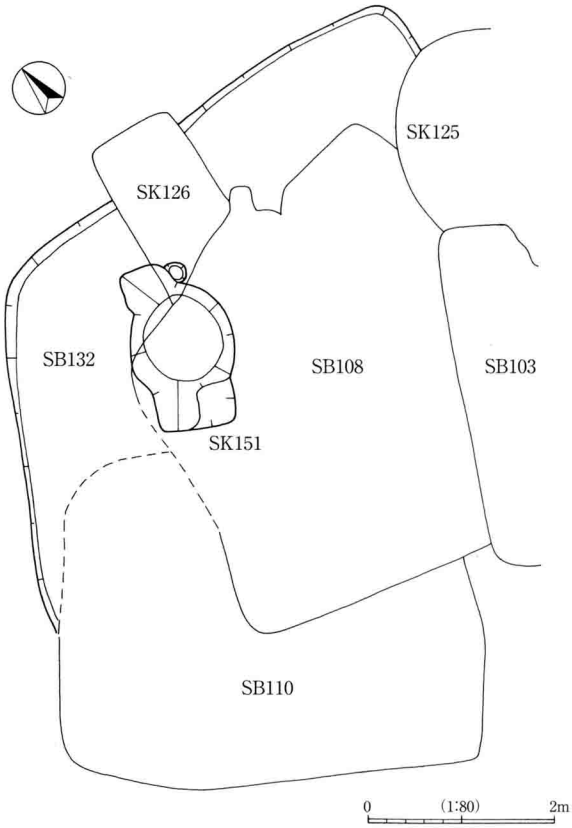


図80　SB132・SK151実測図（S＝1/80）

以上のように、本住居跡は残存状況が悪いうえ、出土遺物も各時期が混在するなど、帰属時期について判断根拠を欠く。住居跡と積極的に判断する根拠も乏しいが、形態ならびに規模より竪穴住居跡としておきたい。

SK151はSB132ならびにSB108床面で確認したが、SB108検出時に両者の重複部分が極めて不明瞭で、SB108の壁面が確認できなかったことからはSB108に後出する可能性が高い。遺物の出土はなく、帰属時期は不明であるが、SK126に確実に掘り込まれる。

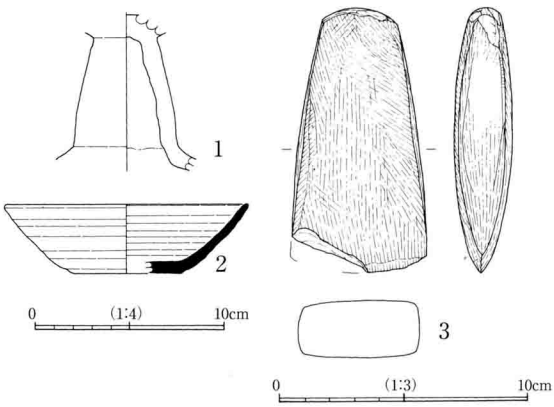


図81　SB132出土遺物実測図

（S＝1・2；1/4　3；1/3）

SB120（PL－8、PL－X－3）

竪穴住居密集域の南西端で検出された。このさらに南西側では竪穴住居が希薄になり、代わりに土坑群が顕在化するなど、②地点から連続する竪穴住居群の重複分布とは劇的な変化をみせている。土坑群は検出高や覆土の状況などから主として平安時代末期以降中世の所産と想定することが可能で、時代的変遷を示す点も注意される。本址はまさにこうした集落構造の変化点に位置している。

規模は3.65×3.80mを測り、正方形プランを呈する。SB115・SB125・SK128など、周辺で検出された遺構をすべて掘り込んで構築されている。

掘り込みは確認面下最深で約1.4mを測る。底部は黄褐色基盤層そのままで、北側が一段低くなっている。貼床等の床面構造は確認されなかった。また、柱穴等も検出されていない。北側の一段低い部分についても、底部に床やピット・柱穴等の痕跡は確認されなかった。

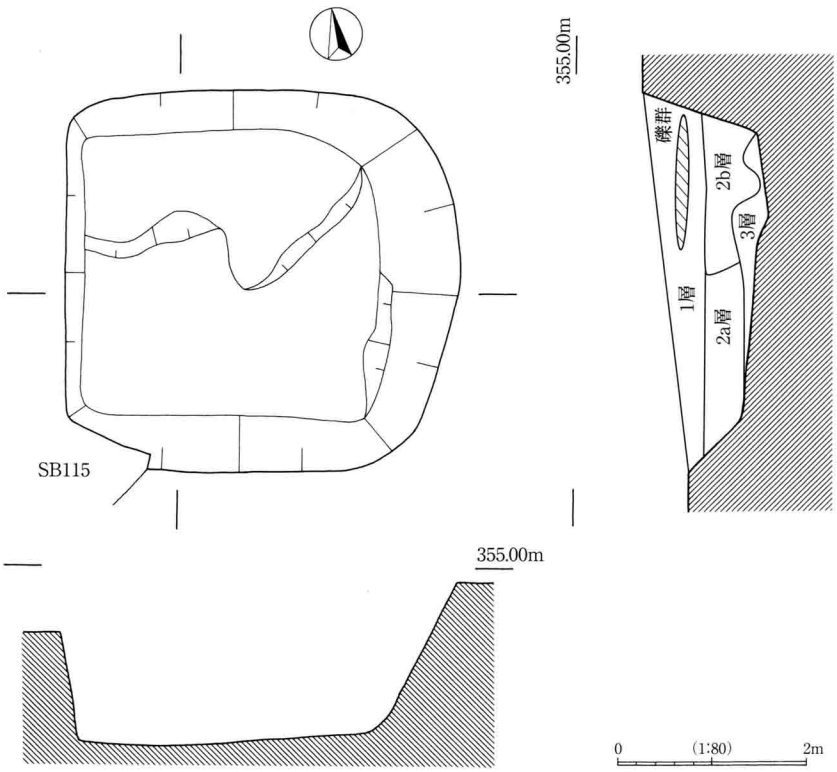


図82　SB120実測図（S＝1/80）

覆土は上層より、1層；暗褐色粘質土層、2a層；黄褐色粘質土層、2b層；灰褐色砂質土層、3層；暗褐色砂質土層に大きく3分される。1層は暗褐色粘質土を主体とする複数の堆積土からなる。遺物も弥生時代後期から古代までさまざまなものを含む。2a層は基盤層と同質の黄褐色粘質土である。遺物などは含まない。2b層は2a層と同一高で3層上にのみ堆積が確認された。3層は北側の一段低い部分にのみ壁際から中央部へ向かって緩やかな傾斜を有して堆積していた。

1層は各時代の遺物を含み、暗褐色粘質土を主体に類似した土層が互層堆積に近い状況を示し、上部からの流れ込みによる堆積土と考えられる。2a層は当初底面の可能性を考慮したが、同一面で確認された2b層を掘り下げたところ、下層の3層が一部2a層下へ入り込んでいることが確認できたため、掘り下げを行った。壁面ははげるように確認でき、堆積土であることが確認できた。2b層は非常に薄く、3層上にのみ5cm弱の堆積が確認されたにすぎない。3層は暗褐色砂質土を主体とするが、2a層土のブロック混入が顕著であった。

写真15　2a・b層検出状況

以上の土層堆積状況を概観すると、2a層は極めて不自然な堆積と考えられる。遺物や混入土を含まない基盤層同質土が0.5mほど堆積し、さらに北側の底面が一段低い部分にはその堆積が及ばないという埋没状況は意図的な埋め戻しとは考えがたい。ここで注意されるのは、2a層が堆積する上部での壁面検出状況である。2a層が堆積する南壁側は、1層が堆積する上部では掘り込みによる壁面として非常に把握しずらかったが、基盤層と同質土である2a層が堆積する下層部分では、壁と2a層間に柔らかい土が存在し、壁面も容易に把握された。この調査時における所見を重視すると、上層部には掘り込みがなく、

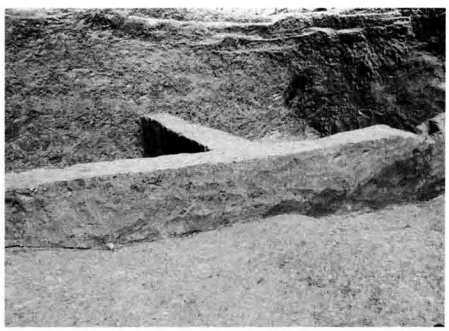


写真16　3層堆積状況

下層部にのみ掘り込み面があったと仮定することで合理的に理解できる。つまり、２ａ層は天井部として掘り残された基盤層土で、それが崩落によって堆積したという解釈である。地下空間を想定した場合、当然、出入口が必要となるが、北側の一段低い部分には２ａ層の堆積がみられないということから、出入口部の竪坑として開口していたと考えることができる。約４m四方の狭い範囲で一部分のみが一段低く掘り込まれることも、出入口部と想定することで理解が可能となろう。

遺物等の検出状況はまず、１層中位、北側の出入口部を想定した部分の上層で集石が検出された。拳大あるいは拳２つ大の河原石がほぼ一定の高さからまとまって出土している。ただし、この石材が構造物に関わったという検出状況ではなく、埋没過程において投棄された可能性が考えられる。

土器は１層全体より小片が出土しているが、集石下の２層直上より一定量が出土している。17と18は弥生時代後期吉田式である。18は壷で、口縁部を欠損する。外面はミガキ調整後、鋸歯文帯下より胴部にかけて赤彩が施される。内面はナデ調整である。頸部には文様帯がみられる。横方向の沈線によって３段に区画され、上から横羽状文・斜線文・鋸歯文となる。なお、横羽状文は斜線の組合せで、中央を貫く横線はみられない。17は注口鉢で、内外面ともにミガキ調整後、赤彩が施される。口縁外面には波状文が施文される。16は土師器甕で、内外面ともにハケ調整が施される。古墳時代後期後半代と考えられ、重複するSB125に帰属する可能性が考えられる。10～12は須恵器杯、14と15は須恵器高台付杯、13は須恵器高杯で、いずれも1/4程度の残存状況である。底部には10がヘラ切り痕、11と12は糸切り痕を残している。須恵器は奈良時代後半期から平安時代と考えられ、SB115より混入したものも含まれていると考えられる。１～９はカワラケである。９点出土している。口径11cm以上、

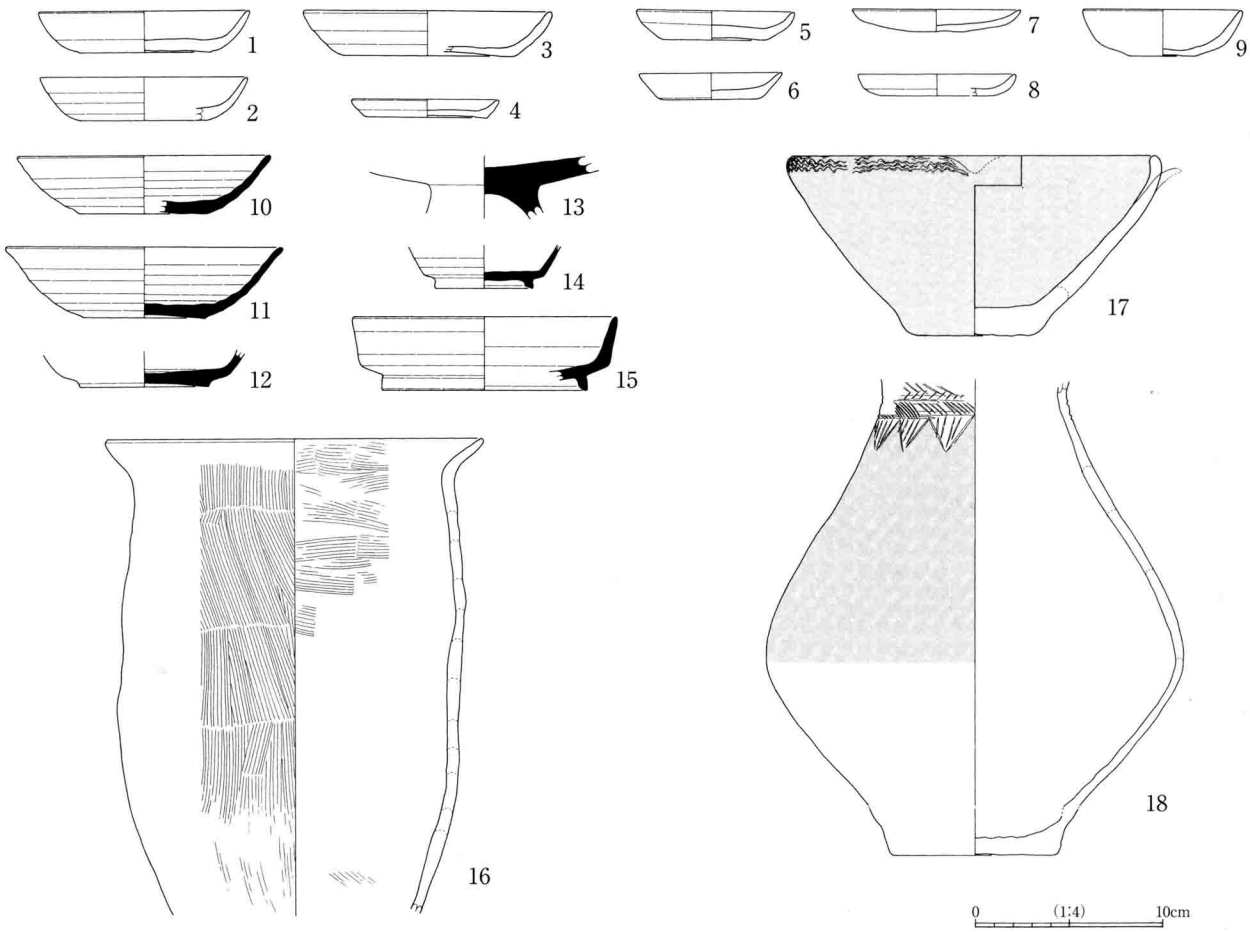


図83　SB120出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

器高2cm以上（1～3）と口径10cm以下、器高1.5cm以下（4～9）の大小二種が存在する。大型品はいずれもロクロ整形であるが、小型品はロクロ整形と手づくねの二種が認められる。手づくね品の形態は3者3様で、須恵器杯状のものからロクロ整形の小型品に近いものまで認められる。出土は2a層直上を中心に集石上層からも認められ、出土状況にみる一括性は保証されない状況であった。鉄製品は刀子かと考えられる破片を含めて3片覆土中より出土している。いずれも1層上位からの出土で、確実にSB120に伴うと判断できるものはない。

図版番号	口径	器高	底径	整形技法
1	11.2	2.2	7	ロクロ
2	11	2.3	6.8	ロクロ
3	13.2	2.4	9.4	ロクロ
4	7.8	1	6.4	ロクロ
5	8.4	1.6	5.7	ロクロ
6	7.6	1.4	5.2	ロクロ
7	9	1.2	6.4	手づくね
8	8.4	1.15	5.6	手づくね
9	8.6	2.5	3.6	手づくね

表8　カワラケ計測表

以上より、本址は地下室状の構造を持つと想定され、室状の施設である可能性が考えられる。ただし、天井崩落土と想定した2a層下で収められていた物品の痕跡は確認されず、また、天井崩落により埋没した物品を掘り出そうとした痕跡も認められないなど、室とするには問題点が多いことも明記しておきたい。また、遺物はカワラケが伴うと判断され、中世に該当すると考えられる。

SK149

調査区北西側の竪穴住居密集域で検出された土坑である。SK148・SK150等周辺の土坑群とともにSB129を掘り込んで構築されている。壁面は明瞭に把握され、12.6×11.5mを測る正方形に近いプランを呈する。覆土は暗褐色砂質土を主体とし、上層より炭化物の混入が顕著であった。北側では有機質の編物が検出されている。写真でみると南側にかけて底面から浮き上がっているが、編物直下はSB129覆土と捉えられる焼土粒が若干混じる暗褐色粘質土であったことから、土坑底直上で確認されたと把握できる。編み目は縦方向と横方向がほぼ直角に交差する「四つ目編み」状に観察される。検出部分は平坦で、周囲が緩やかに立ち上がる形態から底部が遺存しているものと考えられる。全体像は不明であるが、籠状の容器であったと想定される。

写真17　SK149出土籠状品細部

土坑中からはこのほか陶器片1と不明鉄製品片1が出土したにすぎない。本土坑が掘り込むSB129は奈良時代と想定され、これが上限となるが、詳細な時期については残念ながら明らかにしえない。

写真18　SK149籠状品出土状況（東から）

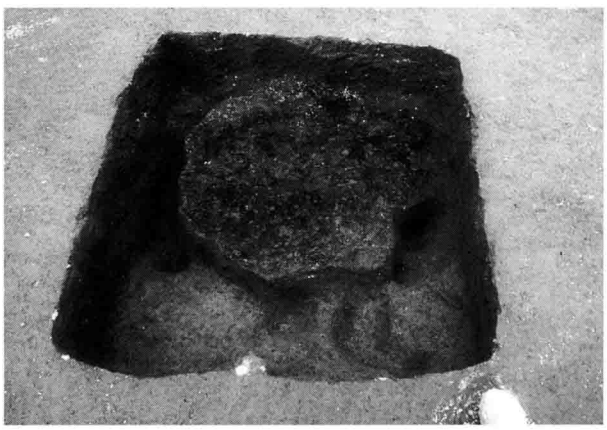


写真19　SK149籠状品出土状況（南から）

検出面等出土遺物（PL－X－4）

石製品・土製品　1はSE013覆土中出土の軽石製品である。4.1×4.7cmの楕円形を呈し、中央に直径0.6cmの円孔が穿たれる。SE031はSB115を掘り込んでおり、本来SB115に属する可能性も考えられる。

2はSK127覆土上層より出土した土錘である。欠損がみられるが、直径1.0cm、残存長2.6cmを測る。外面はナデによって平滑に仕上げられている。

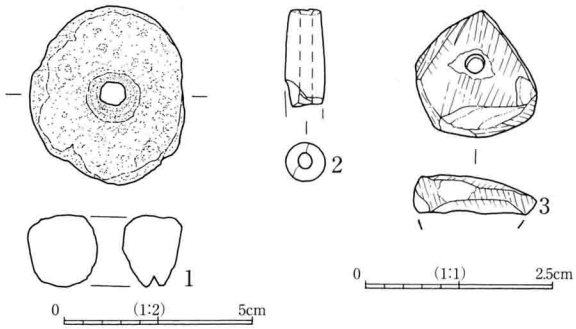


図84　検出面等出土石・土製品実測図（S＝1/2）
1；SE031　2；SK127　3；検出面

3はいわゆる滑石製臼玉で、検出面より出土している。実測裏面は剥離により欠損している。直径1.7cmを測り、一方に角を持つ不整形を呈している。この角をなす直線的な辺には面取りが確認される。中央には径0.3cmの円孔が穿たれ、全体的に粗い整形擦痕をよく残している。出土時には未成品の可能性を考慮し、工房の存在を期待したが、製作跡は検出されず、製品とみなされる。

銅銭　1はSE029覆土中より出土した北宋銭「咸平元宝」である。良好な残存状況で、欠損等はみられない。SE029はSB112を掘り込んでいるが、SB112は北宋銭を含む段階まで時期が下降しないと考えられることから、SE29の使用期間の一端を示すことは間違いない。

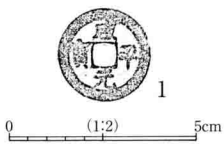


図85　SE029出土銅銭拓影

2はSK118から出土した銭束である。SK118は調査区南側の住居空白域で方形ピット群や井戸跡とともに検出された土坑群のひとつである。直径0.9mを測る円形プランを呈する。銅銭は6枚が癒着した状態で土坑底直上より出土している。6枚は多少のズレがみられるが、孔を通して癒着している。束として固定した有機質の紐等は目に見える形態で残存はしていなかったが、ズレながらも孔を通していることや孔内に付着物の痕跡がみられることから、有機質の紐等によって緩く結束されたと考えられる。束の片側は表、もう一方は裏面を向けて重ねられている。表に当たる部分は緑青が著しく、銅銭種別は明らかにしえない。

写真20　SK118出土銅銭

写真21　SE029出土咸平元宝

写真22　SB077出土神功開寶

（拓影は35頁）

5　①地点の概要

①地点は平成12年度に発掘調査を実施した。古墳時代前期の古墳３基ならびに奈良～平安時代の竪穴住居５軒のほか、井戸・畝状遺構などが検出されている。竪穴住居群は調査区南側に、古墳群は調査区北側に分布し、時代は異なるが住み分けがなされていたかのごとくである。

中世　井戸跡であるSE015は確実に該期に属する遺構と判断でき、散発的に調査区全面に分布する井戸もSE015同様に中世に使用されていた可能性が高い。井戸以外には該期遺構の存在は確認されなかった。

奈良時代～平安時代　竪穴住居５軒、大形土坑２基ほか、土坑・ピット群はほとんど該期と考えられる。このほか、時期不詳の掘立柱建物も居住関連遺構の展開からみて該期に属する可能性が高いと考えられる。遺構の分布は竪穴住居に示されるように調査区南側に偏り、北側にはほとんど展開しない。本地区南側のXI区では該期住居群が検出されており、一連の集落を形成するものとみられる。ただし、XI区を含めて住居分布の密度はX区②・③地点に比して非常に低い。一方、北側空白域についてはさらに北側の③地点南側で確認された空白域と合わせて、住居がみられない空間が明確な広がりを持つことが明らかとなった。ちょうどこの空白域は古墳群の分布域と重なり、あるいは墳丘の高まりを避けた結果とも考えることができる。

畝状遺構はSZ006の周溝から墳丘にかけてとSZ007墳丘上で確認されている。出土遺物がないため帰属時期の確定は難しいが、③地点検出の畝状遺構同様に平安時代に該当する可能性を考えることができる。畝の方向が③地点と異なる点は古墳墳丘が残存していたことによると想起され、古墳墳丘の残存期間の問題とともに集落構造把握のための竪穴住居空白域理解に多大な示唆を与えると評価される。

古墳時代　古墳時代前期の方形墳が３基確認された。本地点において古墳以外に同時存在が確実な遺構は検出されず、墓域と集落域の区分けは明瞭である。また、南西側の④地点では方形周溝墓が集中的に確認されており、これらの地区に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墓域が展開するとみられる。SZ006とSZ007は周溝を共有して位置する。本来周溝間の重複関係が存在すると考えられるが、明確に把握することはできなかった。SZ008はその北側に隣接して分布する。③地点で検出されたSZ014はSZ008と同一古墳周溝と考えられ、現在確認される前期方墳群の北端を示している。埋葬施設はいずれの古墳でも検出されなかった。出土遺物ではSZ006・SZ008から単口縁の底部穿孔壺が出土している。SZ007では出土しなかったが、共通する墳丘上設置土器として注意される。また、SZ006は規模・周溝幅ともに他を圧倒し、前方後方形になる可能性が高いと考えられる。前方後方形は近接する聖川堤防地点で複数例が確認されており、本地点同様に底部穿孔壺も出土している。聖川堤防地点とは直接隣接せず、同一の群単位とは捉えられないが[1]、同時期の墓域展開を考えるうえで、極めて良好な対比資料と評価される。

弥生時代　SZ007北東側に隣接して竪穴住居跡が１軒検出されている。プランが明確でないうえ出土遺物がなく時期比定が難しいが、２柱穴間より炉跡が検出されている。炉の検出位置からは箱清水期以降に特徴的なあり方と捉えられる。また、方墳群の形成という点からはこれを遡る時期と想定され、弥生時代後期から古墳時代前期前半代の可能性が高いと考えられる。このほか、箱清水式土器片は各遺構の覆土に含まれているが、遺構の存在を示唆する量ではなく、ほとんど存在しないと考えられる。後期吉田式期はSB060覆土内より土器小片が出土し、中期栗林期もSB058・SB062覆土内より土器片が出土しているが、他地区に比して出土量は少ない。

1　青木和明ほか　1992『篠ノ井遺跡群（4）―聖川堤防地点―』長野市教育委員会

遺構名	形態 規模 m	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅 製品	報告 頁	時期	
		床面	炉 カマド	柱穴	込む	込まれる		実測数	破片重量 Kg				時代	細別
SB058	方形 (5.1×2.8)	貼床	カマド	2		SE019		3	1.6			83	奈良 (～平安)	
SB059	方形 3.05×3.25	貼床	カマド 火床のみ	検出 なし	SB059 SB060	SD008	土師器甕・高杯（古墳前着）混入。	7	1.6	砥石 2 軽石 1		85	平安	
SB060	方形 3.00×(2.4)	脆弱	検出 なし	検出 なし		SB059 SK075	重複によってほとんど破壊されている。 住居跡ではない可能性高い。		0.325		鉄製刀子		奈良か	
SB061	方形 3.43×3.75	貼床	カマド 石組カマド	検出 なし	SZ006			11	2.55		鉄製刀子？片 不明片	84	平安	
SB062	方形 4.70×(2.9)	貼床	カマド 石製支脚	1			煙道 2 あり。カマド造り直しの可能性がある。	6	1.325			83	奈良	
SB063	不明 柱心間 2.1	貼床	炉 床面状に炭あり	2		SE018	北側不明瞭でプラン把握できず。						弥生 ～ 古墳	
SH002					SZ006		20 箇所近い柱穴が集中的に検出された。 SH002 としたが、2 軒以上重複の可能性が高い。		0.2			87	不明	

遺構名	形態 規模 m	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告 頁	時期	
		床面	炉 カマド	柱穴	込む	込まれる		実測数	破片重量 Kg				時代	細別
SZ006	方形溝 周溝幅 最大 3.60 最小 1.75		墳丘盛土あり			SB061 SK077 SE015 SE016 SE017 SH002	SZ07 との重複関係は明瞭でない。	6				76	古墳	前期
SZ007	方形溝 周溝幅 1.30		墳丘盛土あり			SE018	SZ06･SB63 との重複関係不明。		0.164			79	古墳	前期
SZ008	方形溝 周溝幅 1.35		墳丘盛土あり			SE013	3 地点 SZ014 と同一遺構	1	0.008			80	古墳	前期
SD008	幅 0.40				SB059		東側で調査区壁まで続かず途切れ、不自然。		0.014				不明	
SD009	幅 0.80	ほぼ 平坦				SE014 SK075	調査区際の検出であるうえ、重複により大きく破壊を受ける。	1	0.066			82	弥生～ 古墳	
SE013	円形素掘 径 0.90	未完掘			SZ008				0.021				平安～ 中世	
SE014	円形素掘 径 1.20	未完掘			SD009				0.27				中世	
SE015	円形素掘 径 1.25	未完掘			SZ006			1	0.48		鉄製刀子？片	87	中世	
SE016	円形素掘 径 1.00	未完掘			SZ006							87	不明	
SE017	円形素掘 径 1.00	未完掘			SZ006				0.09			87	平安～ 中世	
SE018	円形素掘 径 0.95	未完掘			SZ007		覆土内に石材の投棄あり		0.069				平安～ 中世	
SE019	円形素掘 径 1.05	未完掘			SB58				0.076				平安～ 中世	
SK075	円形 径 1,75	ピット状の窪みあり		中央ピットに柱痕は確認されず。		SB059 SE014			0.296				奈良～ 平安	
SK076	不正形 1.45×0.75	平坦						2	0.257			87	平安	
SK077	円形 径 0.82	平坦			SZ006	SB061	覆土黄褐色粘質土ブロックが多量に混じる		0.014				奈良～ 平安	
SK078	長方形 1.47×2.50	凹凸あり平坦にならない					北壁の一部が焼け、周辺に炭散布。カマド状であるが、住居跡にはならず。特殊焼土土坑。		0.257		不明鉄片 2		平安	
検出面										臼玉 2	不明片 2			

表 9　X 区①地点検出遺構一覧表

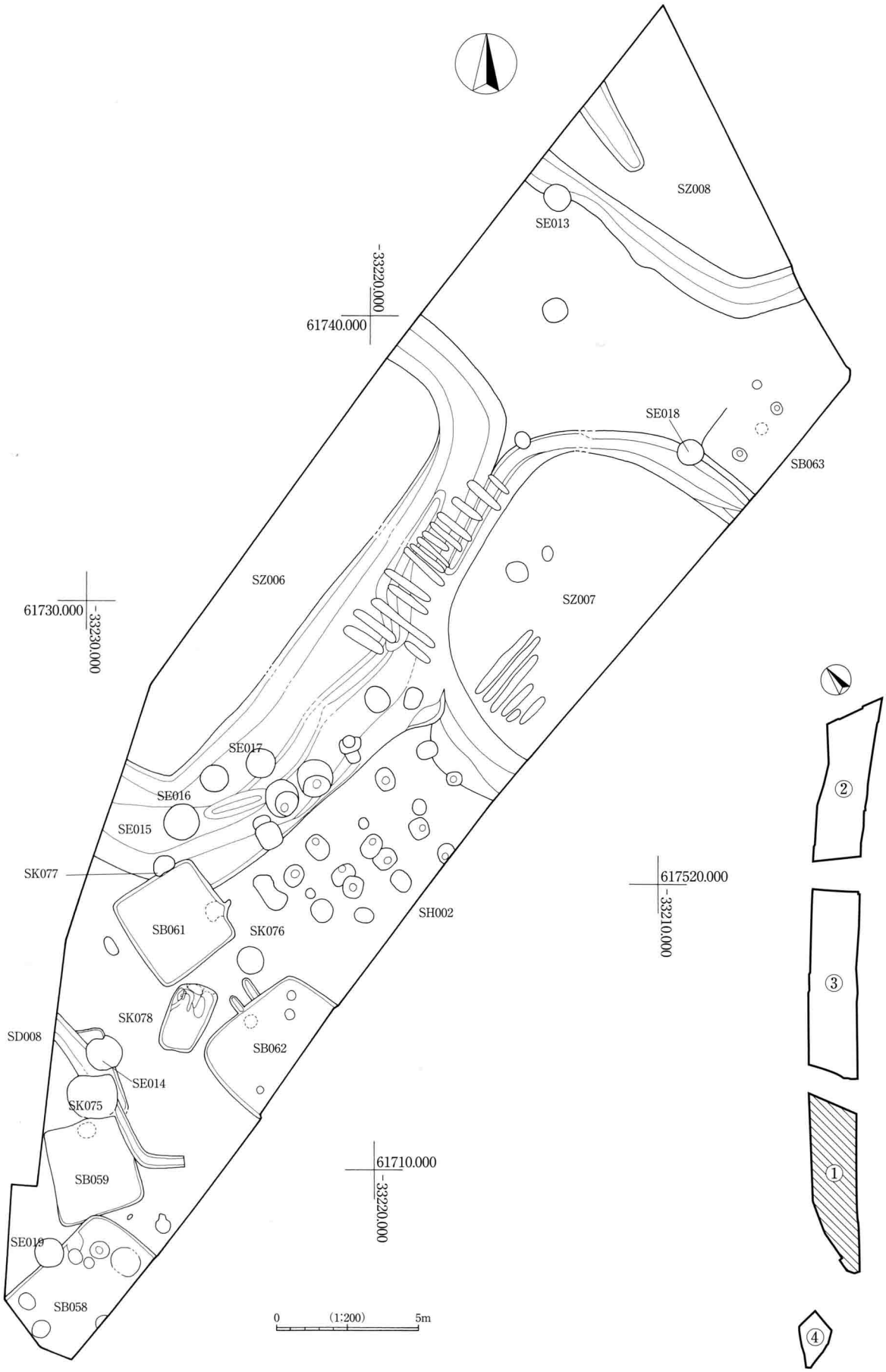


図86　①地点遺構分布図（S＝1/200）

6　①地点で検出された遺構と出土遺物

SZ006（篠ノ井・高畑６号墳）（PL－10、PL－Ⅹ－３）

①地点のほぼ中央西壁際で検出された方形墳である。周溝はコ字形に検出され、東側でSZ007の周溝と一部重複し、西側は調査区外へと延びる。規模は周溝外法で一辺22.3m、周溝内法（墳丘長）で17.5mを測る。周溝幅は北側で2.3m、南側で3.5～4.0mを測り、南側で周溝幅が大きく広がる。隣接して検出されたSZ007やSZ008に比べて墳丘規模・周溝幅ともに倍近い規模となる。周溝断面は墳丘側がきつく、外側が緩やかな形態を呈する。周溝底には溝状の浅い凹みがみられる。周溝覆土は暗褐色から黒褐色の比較的粘性の強い土層を主体とし、周溝底に近いほど土器片等の遺物を含む。基本的に墳丘側からの流入を想起させる堆積状況と捉えられるが、墳丘の削平によって完全埋没することはなく、幾分かの凹みを残していたことが全体を覆う包含層の状況より確認できる。

墳丘は基盤層上に整地面かと考えられる墳丘最下層土が確認されたに過ぎない。ただし、南側周溝からの立ち上がり部分で盛土の残存土と考えられるわずかな土層の存在を確認し（図88　Ⅵ層）、本来は存在したことが確実である。また、墳丘最下層土上には平安時代を主体とした遺物包含層が堆積し、墳丘の削平は平安時代以前までは確実に遡ると把握できる。

埋葬施設は検出されなかった。また、周溝内等でも本墳に伴うと考えられる土坑等の検出はない。

写真23　SZ006遺物出土状況

遺物は周溝内より土師器が出土している。SZ007と重複する部分（図88のトーン部）より土器小片が集中的に出土しているほか、覆土中上層を中心に散発的な土器片の出土がみられた。出土土師器には壷・高杯・杯がみとめられる。１の底部穿孔壷は土器集中地点より出土している。同一個体とみられる小破片が複数存在するが、相互に接合はなく、図上復元した。口径14.2cm、器高15.6cm程度、底径5.1cmにそれぞれ復元された。外面調整は口頸部がハケ調整後、ナデ調整、体部上半はナデ調整、体部下半はケズリ調整を施し、

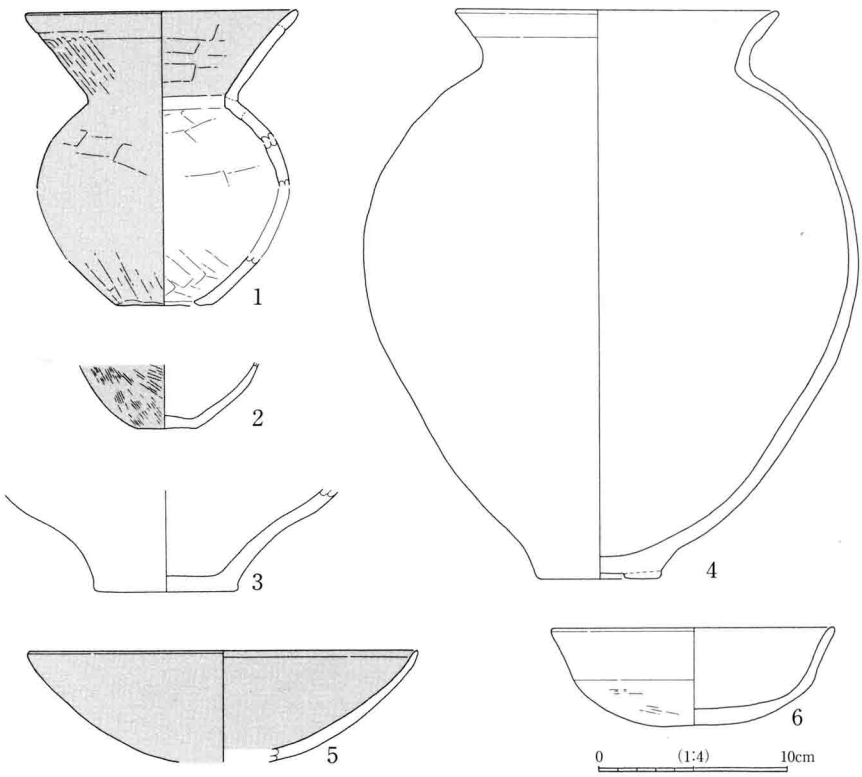


図87　SZ006出土遺物実測図（Ｓ＝1/100）

土層注記
Ⅰ層：表土層　Ⅱ層：耕作土層　10YR4/4 褐色砂質土を主体とした撹拌層　Ⅲ層：10YR3/4 暗褐色砂（洪水砂層）
Ⅳ層：10YR2/2 黒褐色粘質土層（包含層）　Ⅵ層：7.5YR3/2 黒褐色粘質土　絞まり弱（墳丘盛土）
Ⅷ層：10YR3/4 暗褐色砂質土　締まり強（墳丘ベース整地土）　Ⅸ層：7.5YR2/2 黒褐色粘質土　粘性弱　締まりややあり（旧表土）
Ⅹ層：10YR3/4 暗褐色粘質土　粘性強　締まり強い（基盤層）
Ⅴ層：10YR2/3 黒褐色粘質土　締まり弱（周溝覆土）　Ⅶ層：10YR2/1 黒色粘質土　粘性強　締まり弱（周溝覆土）
Ⅺ層：10YR2/2 黒褐色粘質土　粘性強（周溝覆土）　Ⅻ層：7.5YR2/2 黒褐色粘質土　締まり弱　遺物含む（周溝覆土）
ⅩⅢ層：10YR3/2 黒褐色粘質土　粘性強　締まり強い（周溝覆土）
ⅩⅣ層：10YR2/1 黒色粘質土　締まり強い　ⅩⅤ層：10YR2/3 黒褐色粘質土　粘性強　締まりあり（周溝覆土）
ⅩⅥ層：10YR3/3 暗褐色粘質土　粘性強　締まりあり　遺物含む（周溝覆土）　ⅩⅦ層：10YR2/2 黒褐色粘質土　粘性強　締まり強い（周溝覆土）

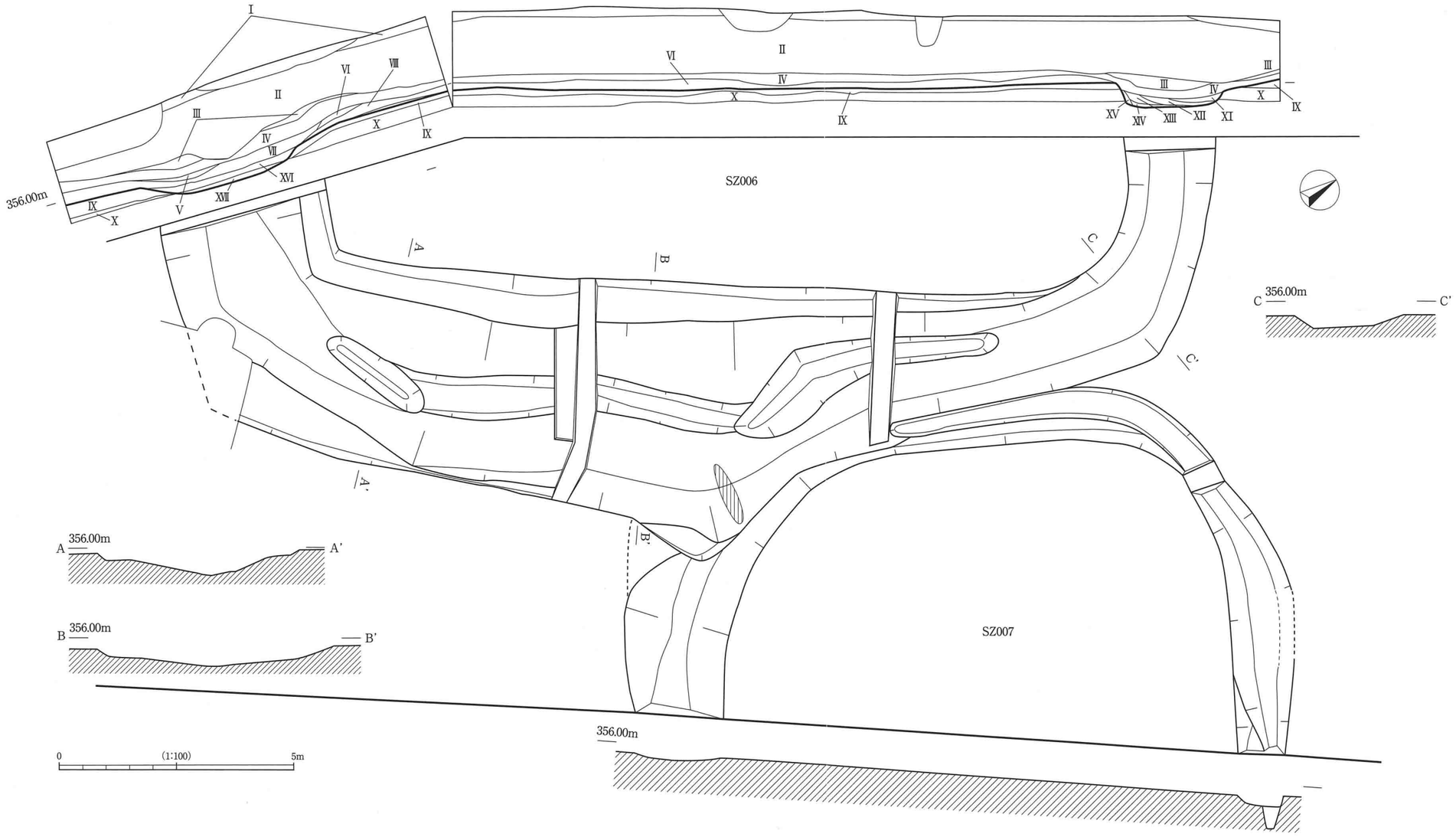


図88　SZ006・SZ007実測図（S＝1/100）

赤色塗彩される。内面調整はヘラ状工具によるナデ調整で、口頸部内面は赤色塗彩される。底部は焼成後穿孔である。２は小型壷の底部片である。周溝のほぼ中央部の覆土上層より出土している。外面はハケ調整後ミガキ調整で赤色塗彩される。内面はナデ調整である。４は口径16.9cm、器高30.4cmを測る壷である。調整は内外面ともにナデ調整が施される。口縁部は中間で弱いながらも角度変換し、有段口縁状となる。ただし、内面にこれに呼応した段は形成されない。底部は輪台技法による平底で、木葉痕が観察される。５は高杯で土器集中地点より出土している。口径20.6cmを測る。内外面ともにミガキ調整後赤色塗彩される。口縁部内面はヨコナデが施され、弱い面をなしている。6の杯は土器集中地点にほど近い部分の覆土上層より出土している。古墳時代後半期に該当すると考えられ、周溝埋没の時期を示すと考えられる。

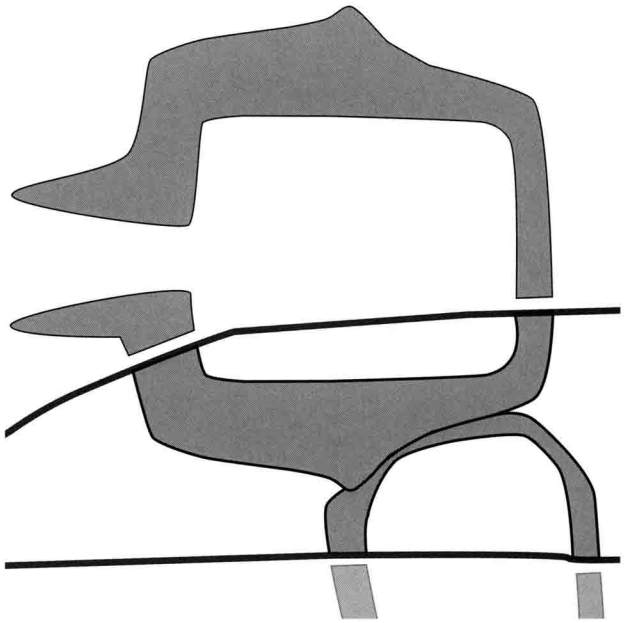


図89　SZ006復元想定図（Ｓ＝1/320）

さて、SZ006はSZ007やSZ008等に比べ、墳丘規模・周溝幅ともに大きい。さらに、周溝幅が北側に比して南側で広くなっていて、一定幅で巡っていないとみられる点からは、単に方形ではない前方後方形である可能性が想起される。くびれ部あるいは前方部ともに調査区外となるため確定的ではないが、全長30m程度を測る前方後方形を呈していた可能性が高いと考えられる。

SZ007（篠ノ井・高畑７号墳）（PL－10）

SZ006の東側で周溝の一部を重複して検出された。北東側でSE018に掘り込まれている。

規模は全長（周溝外法）約14m、墳丘長（周溝内法）約11mを測る小型方形墳である。南側において円弧を描くが、より明瞭に検出された北側が直線的に角をなすことから方形を指向したと判断される。周溝幅は北側で1.3m、南側で2.1mを測る。確認深度は約0.3mである。周溝断面は墳丘外側が緩く、墳丘側が急に立ち上がる周溝通有の形態を呈する。周溝底は緩やかな円弧を描き、中央部が凹む形態を呈する。ただし、周溝北側のベルト以東では基盤層上に暗褐色の漸移層が存在し、これを掘り下げたため周溝底を掘り抜き、形状確認はできなかった。周溝覆土は黒褐色系粘質土が大分２層観察され、その上層に平安時代を主体とする包含層が堆積していた。

SZ006との重複関係については、掲載図（図88）でSZ006が掘り込んでいるように図示したが、これは検出時の状況把握に基づいている。より確実な重複関係の理解のために調査時に再三にわたって精査したが、重複部分への畝状遺構の掘り込みもあって、確実な状況把握には至らなかった。

埋葬施設は検出されなかった。また、墳丘盛土も確認されていない。SZ006同様に平安時代を主体とする包含層直下に墳丘最下層の一部と考えられる土層が確認でき、埋葬施設の痕跡も見いだされなかったことからも、本来は存在したものと考えられる。

遺物は周溝内より土器片の出土があるが、小破片が極少量出土しているに過ぎず、図化・掲載したものはない。小破片ながら箱清水式崩壊段階以後の土師器が散見され、古墳時代前期後半代に該当する可能性が考えられる。

なお、墳丘部上では平安時代かと考えられる畝状遺構が確認された。この畝状遺構は周溝に対して直交しており、SZ006上で検出されたものと掘り込みの方向が90度異なる。検出位置も周溝から墳丘にかけての部分に存在したとみられ、ちょうど周辺より小高くなった墳丘緩傾斜面に対して畑地として開墾を進めた結果と考えられる。

このことは畝状遺構が形成された段階で若干ながらも墳丘の高まりが存在していたことを示唆すると捉えられる。平安期包含層形成期には周溝がほとんど埋没し、若干小高くなった部分も畑耕作による開削が進み、まったく古墳としての存在を失ったものと考えられる。

SZ008・SZ014（篠ノ井・高畑８号墳）（PL－８、PL－Ⅹ－３）

SZ008は①地点東壁際で検出されたL字形に屈曲した溝である。SE013に掘り込まれるほか、他遺構との重複はない。覆土や断面形態、出土遺物よりSZ006に隣接する小型方形墳の周溝と判断した。

周溝は幅1.4m前後を測り、確認深度は0.2m程度である。周溝底は緩やかな平坦面をなす。周溝断面は西側が緩やかで東側（周溝内側）が急に立ち上がる形態を呈する。覆土は黒色粘質土を主体として、上層に平安期を主体とする包含層が堆積する。

墳丘は調査区壁面の観察によると、SZ006やSZ007同様に基盤層上に旧表土と考えられる黒褐色土が認められ、本来存在した可能性が高いと考えられる。ただし、明確な盛土層が確認できないまま平安時代を中心とした包含層に覆われていることからは、包含層形成以前に墳丘は削平されたものと考えられる。

埋葬施設は検出されなかった。また、埋葬施設内より流出したと把握できる遺物の出土もない。

周溝内より遺物はほとんど出土していないが、１点、土師器・底部穿孔壷が周溝底直上より横倒しの状態で出土した（図91の●）。口縁部に欠損が認められるが、頸部以下ほぼ完形で、墳丘上に設置されたものが周溝埋没の初期の段階で転落したと考えられる。口径11.8cm、器高14.0cm、底径6.7cmを測る単口縁壷である。調整は内外面ともにハケ調整後にミガキ調整が施され、外面には赤色塗彩が確認できる。底部は焼成後穿孔が底部全面に対して行われている。

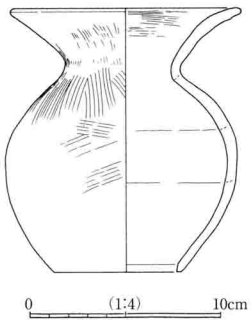


図90　SZ008出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

写真24　SZ008底部穿孔壷出土状況

SZ014は③地点の西壁際で検出された溝で、西側立ち上がりは調査区外となる。SE028・SE032・SD016に掘り込まれる。溝跡としては規模が大きく、覆土ならびに断面形態・検出位置より古墳周溝と判断した。検出された形状は両端部に角部を持つ、方形プランである。ただし、南側角部の明確さに比べて、北側角部は底部が直線的に伸び、壁際部ということもあって、明らかな角部を把握したものではない。

周溝幅は西側が調査区外となるため不確定であるが、少なくとも1.4m以上を測る。確認深度は0.6mであった。周溝の断面形態はSZ008同様に東側が緩やかで西側（墳丘側）が急に立ち上がる形態を呈する。周溝覆土は黒色系の粘質土が主体をなし、最上層のⅠ層；黒色粘質土は平安期を主体とする遺物包含層に該当する。これより包含層形成期にはすでに周溝の大半が埋没していたと理解でき、SZ008と同様な状況と想定される。また、この覆土を噴砂が貫いている。噴砂が地表面に噴出した砂溜まりは確認されなかった。

周溝内より土器片の出土がみられたが、出土は極めて少なく、図化・掲載した遺物はない。古墳時代前期から平安時代までを含むが、底に近い位置（Ⅳ層ならびにⅡ層下層）で古墳時代前期土器片の出土がみられることから、該期に該当すると想定される。

SZ008とSZ014は調査年次が異なるうえ、未調査区域を間に挟むため、直接の連続性は確認できなかった。し

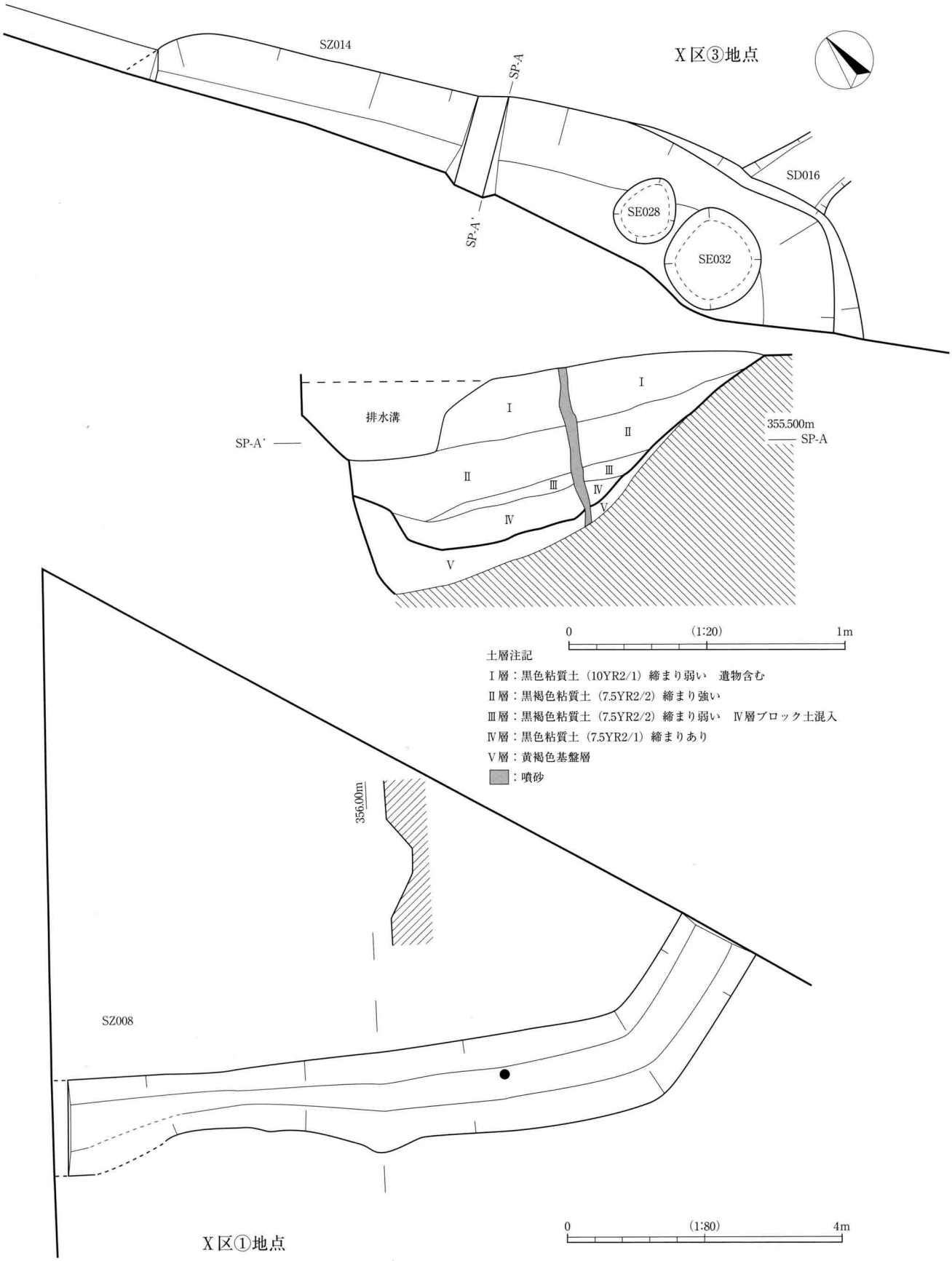


図91　SZ008・SZ014実測図（平面図・断面図：S＝1/80　土層堆積状況図：S＝1/20）

かし、堆積土の状況や断面形態、出土遺物の量や時期の類似性からは同一遺構と想起される。この想定に基づき両者を繋ぐと、SZ008の屈曲角度が直角をなさず、また、SZ008とSZ014の確認辺が並行しないことから、歪な形態となる。しかし、SZ007も整美な方形ではないことから許容範囲とでき、おおよそ一辺が全長（周溝外法）で15m、墳丘長（周溝内法）で12mほどの方墳に復元できる（図92）。SZ007とはほぼ同規模であるが、全長・墳丘長ともに若干大きい。

出土遺物は周溝内より出土した底部穿孔壷１点のみである。周溝全周の約1/3程度を調査したにすぎないが、他に同様な壷の破片がほとんどみられないことから、墳丘部に設置された壷は極少量であったと想定される。

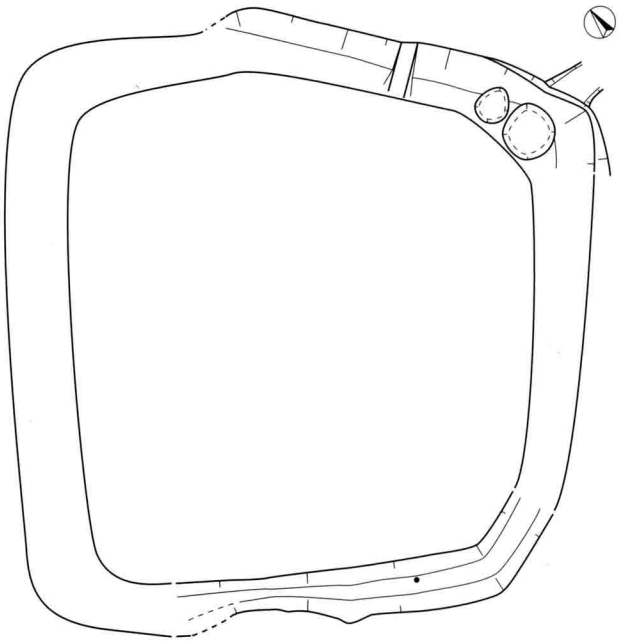


図92　SZ008・SZ014復元想定図（Ｓ＝1/160）

以上より、SZ008とSZ014は同一の方墳と判断され、古墳時代前期後半代に該当すると考えられる。

SD009

南北方向に主軸を持つ溝である。SE014・SK075・SB059によって掘り込まれる。また、SK075を介して溝が南側に延びる（SD008）が、これは覆土ならびに溝幅・断面形状等より別遺構であることが明らかである。幅は0.8mを測り、断面形状は台形を呈する。覆土は暗褐色砂質土の単一層であった。出土遺物には古墳時代前半期を中心とした土師器片ならびに須恵器片が認められた。図化・掲載できた土器は土師器壷１点である。体部上半の破片で、外面はハケ調整、内面はナデ調整である。口縁部・底部を欠損するが、形態・調整からは古墳時代前期に該当すると考えられる。

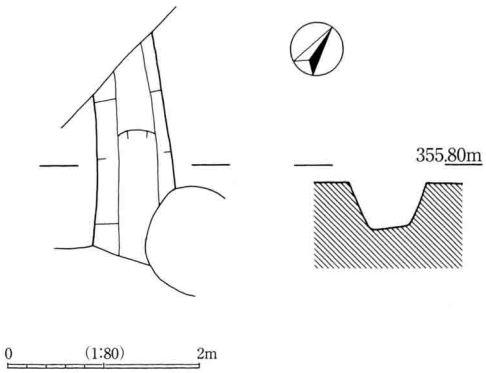


図93　SD009実測図（Ｓ＝1/80）

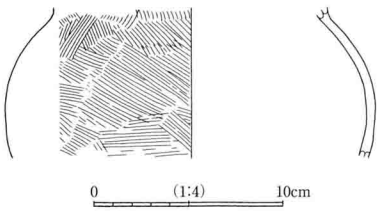


図94　SD009出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

本溝跡の時期は確定的な出土遺物がないため不明であるが、奈良時代に該当するSK075に掘り込まれていることからは、奈良時代以前に確実に遡り、掲載した土器片が時期を示す可能性が考えられる。本溝跡を前述のように古墳時代前期と想定した場合、ほぼ同時期とみられる前期方墳群との関連性が注意される。検出箇所は方墳群の南西端部に位置し、XI区で検出されたSZ010との中間地点に位置する。断面形状や規模からは方墳群と同様な墳墓周溝とは考えられず、他に同時期遺構の展開もほとんど認められないことからは、方墳群に関連し墓域を区画する溝状遺構等の可能性が想起される。また、溝幅は後述する④地点にて検出された方形周溝墓周溝や溝跡と同規模であり、④地点遺構群と一連の遺構である可能性も考慮される。重複遺構により南西側の状況が把握できず、形態的特徴からの性格検討が難しいが、その性格には注意を要する溝跡である。

SB058（PL－９）

調査区南西端部で検出された竪穴住居である。南西側は調査区外となり、確認長は5.1×2.8mを測る。重複関係はSB059ならびにSE019に掘り込まれている。

床面は貼床が確認された。柱穴は２カ所検出され、確認位置からは４主柱構造と考えられる。カマドは北東壁より火床の一部が検出されたにすぎない。袖ならびに煙道も検出されなかった。ちょうどSE019の重複位置と重なり、これにより失われたと考えられる。

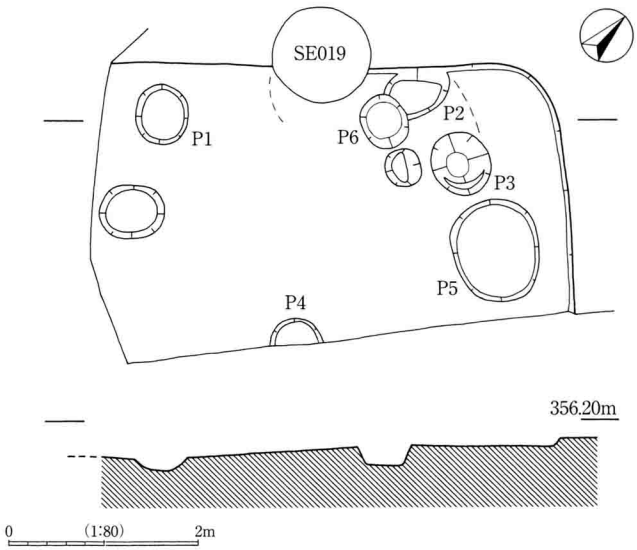


図95　SB058実測図（Ｓ＝1/80）

遺物は火床上ならびに柱穴周辺より土師器・須恵器が出土している。須恵器は壷が２点ある。１は小壷で口径8.7cmを測る。２は長頸壷片で底部ならびに口径部は残存していない。Ｐ１脇の床面上より出土している。土師器甕は口径19.5cm、器高27.4cmを測る。内外面ともにナデ調整が施されるが、輪積痕が明瞭に観察される。Ｐ１脇の床面上より出土している。 以上より、奈良時代と考えられる。

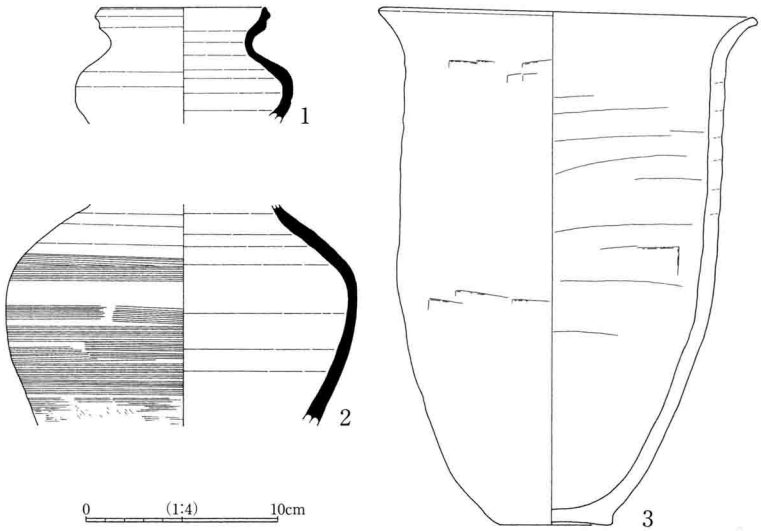


図96　SB058出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

SE019は直径1.05mを測る円形・素掘の井戸である。確認面下２m程度まで掘り下げを行っているが、底面ならびに湧水面まで達していない。壁面の検出は容易であったが、井戸枠等の痕跡は確認されなかった。遺物は土器小片３片とほとんどみられず、石材等の投棄も認められなかった。時代を特定する資料がないが、本遺跡群における他の井戸と同様の様相と捉えられ、平安時代後半期以降、中世の可能性が最も高いと想定される。

SB062（PL－９）

一辺4.7mを測る竪穴住居である。南東側は調査区外となり、東西方向の確認長は2.9mを測る。

床面は貼床が確認された。柱穴はピットが３カ所検出されているが、確実に柱穴と判断できるものはない。カマドは西壁中央部で検出された。火床ならびに煙道が確認されたが、袖は残存していなかった。火床は直径0.45mの範囲で確認され、中央部は黄白色に熱変した良好な状況で確認された。また、壁側では長方形の柱状石が床面下10cm程度埋め込まれた状況で検出され、支脚石と考えられる。掘り方は伴わず、打ち込まれたと考えられる。煙道は壁外に水平に0.6mほど延びる。確認された煙道の北側からはもう１カ所、煙道が検出された。この煙道が取り付く壁の前面には焼土粒の散布が確認されるうえ、貼床が途切れることからここにもカマドがあった可能性が考えられる。遺物の出土状況などからは同時併存の可能性は低く、作り替えと把握される。

遺物はカマド周辺を中心に土師器（甕）、須恵器（杯蓋・杯・壷）が出土している。このほか、弥生時代中期栗林式土器片ならびに後期箱清水式土器片が認められる。２の須恵器杯は口径13.2cm、器高3.9cmを測る。底部は丸底で回転ケズリ調整が施される。土師器甕は３点あり、基本的にハケ調整甕である。

以上の様相より、奈良時代に該当すると考えられる。

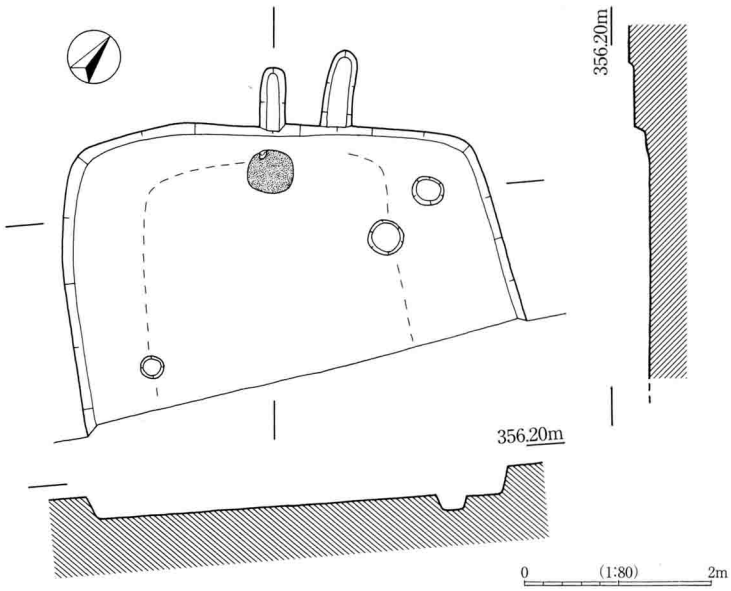


図97　SB062実測図（Ｓ＝1/80）

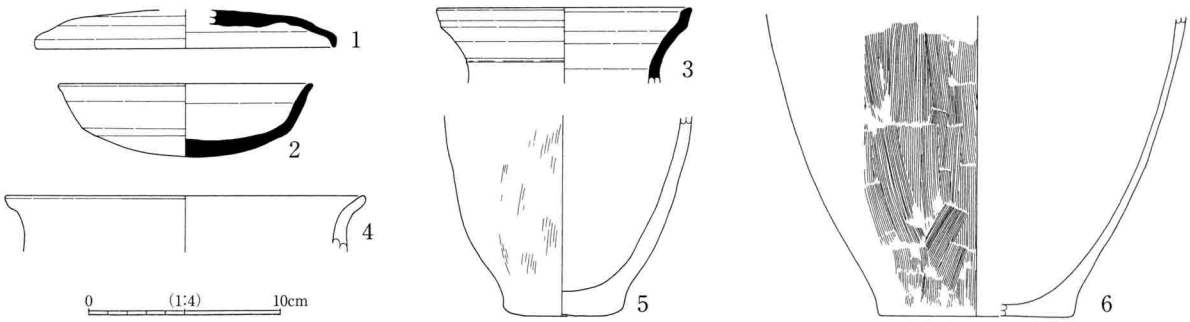


図98　SB062出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

写真25　SB062カマド支脚石

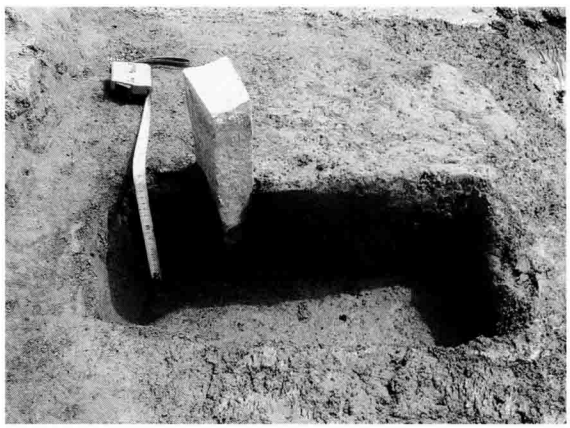


写真26　SB062カマド支脚石断割状況

SB061（PL－９、PL－Ｘ－４）

SZ006周溝を掘り込んで構築された小型の竪穴住居である。ほぼ正方形プランを呈し、3.43×3.75mを測る。

床面は全面貼床で、柱穴は検出されなかった。床面の検出状況からは柱穴は存在しないと考えられる。カマドは北東壁のやや東側に偏った部分より検出された。左袖部はまったく残存していなかったが、右袖部では壁ならびに床面に埋め込まれた立石が検出された。この立石の手前側には斜めに傾いた板状石がみられ、並列して立っていたと考えられる。さらに、右袖部の東側では大型の板状石の散乱が認められ、石芯構造であったとみられる。

カマド内部は床面確認高で炭に混じって土師器・須恵器が出土している。この土器群直下より、浅い皿状に凹んだ火床が検出された。火床に接した左袖側からは、土器群出土高ではまったく確認されなかった断面三角形の柱状石が埋め込まれた状況で検出された。上部は割れているが、位置や形状から支脚石の可能性が考えられる。

遺物はカマド周辺を中心に土師器（杯・高台付杯・甕）、須恵器（杯・壷）、覆土中層より鉄製品が出土している。須恵器杯は5点図化・掲載できた。いずれも底部に糸切り痕を残す。1は体部外面に墨書がみられ、口径13.4cm、器高4.1cmを測る。カマド右袖東側の板状石の脇より出土している。土師器杯は3点、高台付杯は1点出土し、いずれも内面黒色処理が施される。7は体部外面に墨書が認められる。口径13.9cm、器高5.45cmを測る。南西壁にほど近い位置で、覆土上層より出土している。高台付杯は口縁部を欠損し、高台は内面設置である。甕はロクロ整形で、体部外面下半はケズリ、内面は回転カキ目調整後、下半のみハケ調整が行われる。鉄製品は住居中央の東よりの覆土中層より小破片が1点出土している。刀子あるいは鉄鏃とみられる。また、鉄滓かとみられる小塊が若干出土している。以上の様相より、平安時代と考えられる。

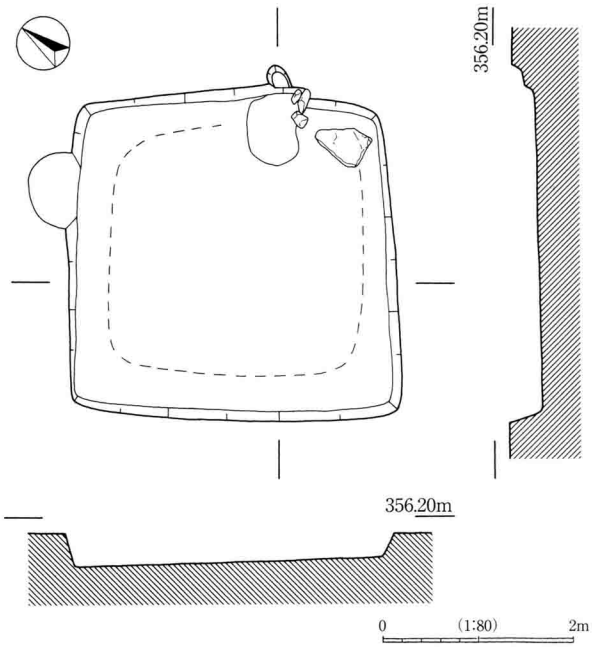


図99　SB061実測図（S＝1/80）

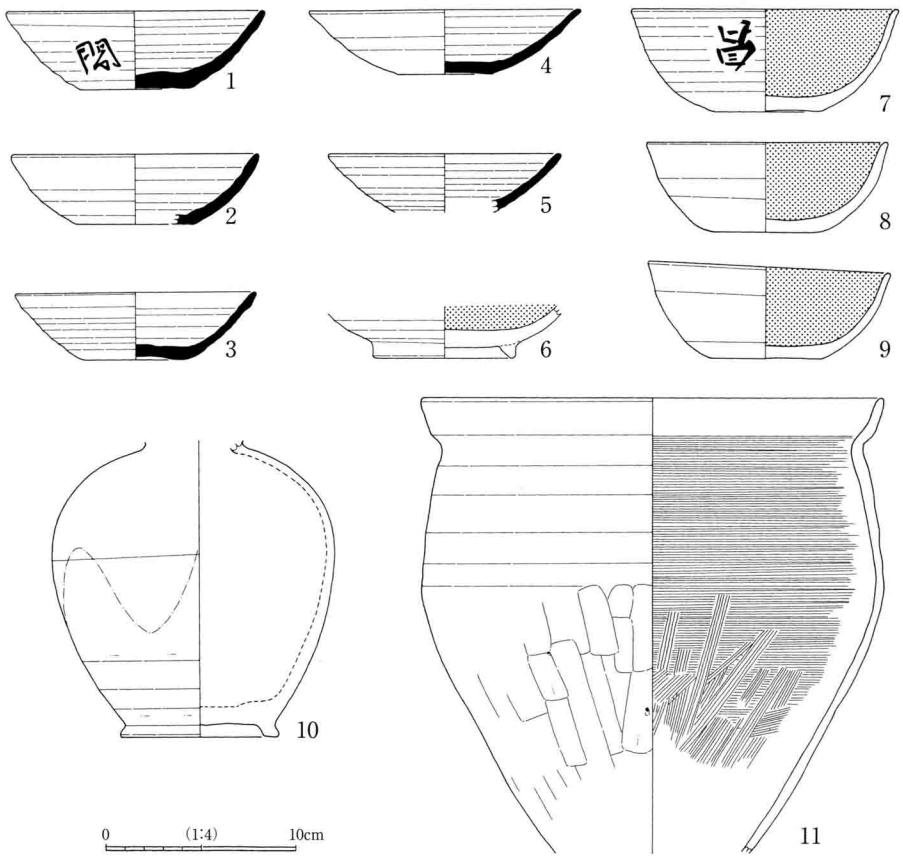


図100　SB061出土遺物実測図（S＝1/4）

SB059（PL－9）

SB058の北側隣接部より検出された小型の竪穴住居である。西壁は調査区端に設定した調査用排水溝掘削のため、壁面がほとんど確認できなかったが、ほぼ全体が確認できた。重複関係はSB058・SB060・SD008に掘り込まれ、SK075を掘り込んでいる。

3.05×3.25mを測る正方形プランを呈する。床面は全面で貼床が確認された。柱穴は検出されていない。貼床

の検出状況からは柱穴は存在しないことが確実である。カマドは北壁中央部より火床が検出されたにすぎない。袖は残存せず、煙道も検出されなかった。

遺物はカマド火床上ならびにカマド前面、南壁際付近床面直上より土師器（甕・高杯）、須恵器（杯蓋・甕・四耳壷）・砥石・軽石が出土している。2の高杯は覆土中出土で、内外面ともにミガキ調整、黒色処理は施されない。土師器甕は床面出土の3点を図化・掲載したが、ロクロ甕と非ロクロ甕を含む。非ロクロ甕（3）の肩部外面にはケズリ調整が施される。4は口径21.7cmを測る中型甕の口頸部片で、床面上から出土している。5は突帯が巡る壷肩部片で外面平行タタキ調整で内面に当て具痕が残る。耳部は存在しないが、四耳壷と考えられる。床面出土。8は全長17.4cm、幅8.5cm、厚さ6.0cmを測る大型の砥石である。片面のみが砥石として使用されている。SB058との重複部分にほど近い壁際床面上より出土している。

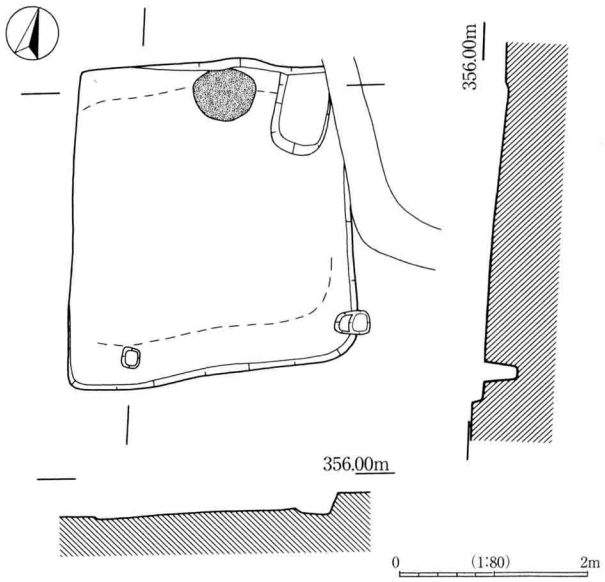


図101　SB059実測図（S＝1/80）

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

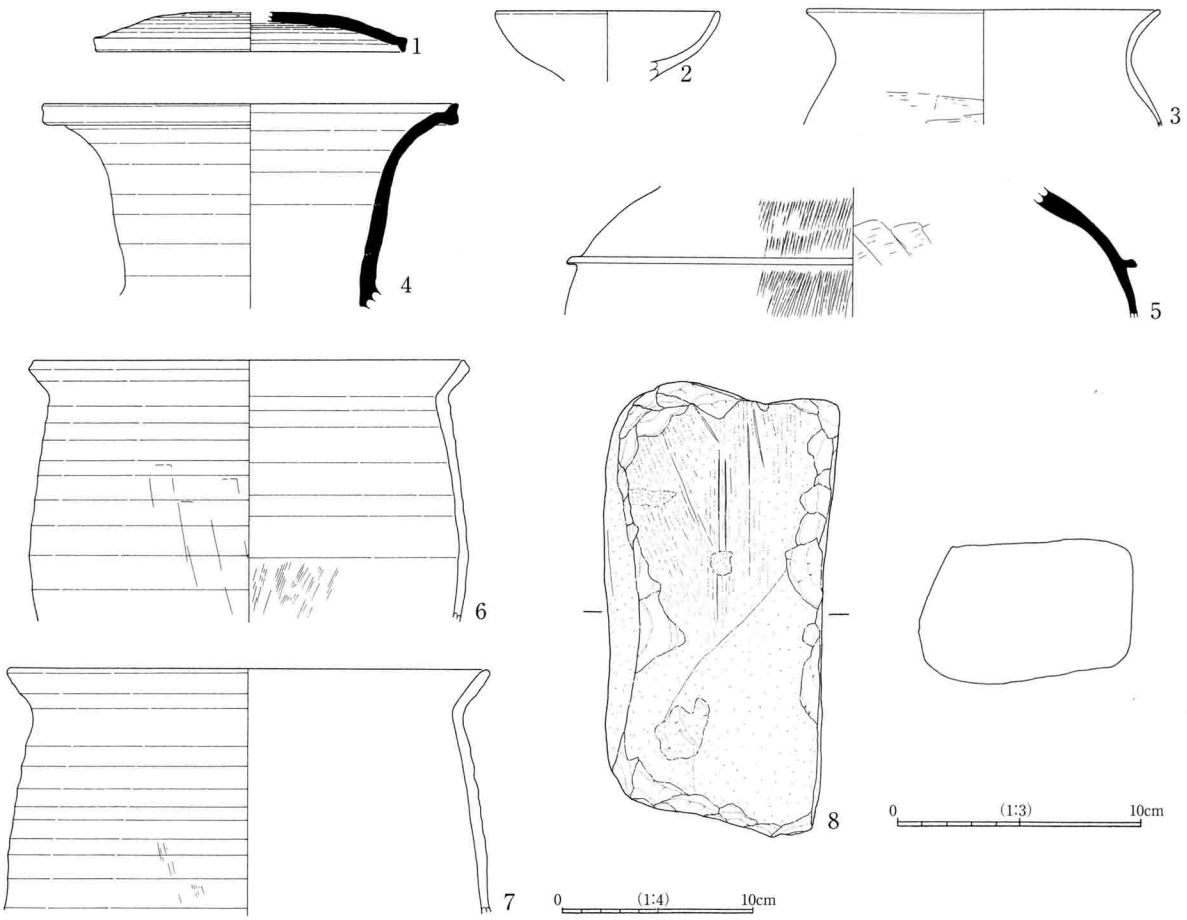


図102　SB059出土遺物実測図（S＝1/4　8のみ1/3）

SH002（PL－９）

竪穴住居群と方墳群の間で検出された掘立柱建物である。24基の土坑が検出され、複数棟が存在すると考えられる。

SH002は２軒×３軒と捉えられ、方形の掘り方内に径0.2mほどの柱穴が確認された。また、SH002柱穴が重複する柱穴列も認められ、先行して別の掘立柱建物が存在したことが確実である。確認される柱の径はSH002とほぼ同規模で、類似した建物であった可能性が高い。しかし、柱穴の配列状況より建物を復元することはできなかった。また、遺物の出土はなく、帰属時期も明らかにしえないが、遺構確認高ならびに覆土の状況がSK076に類似し、本地点集落遺構の展開状況からも奈良～平安時代と捉えて大過ないと考えられる。

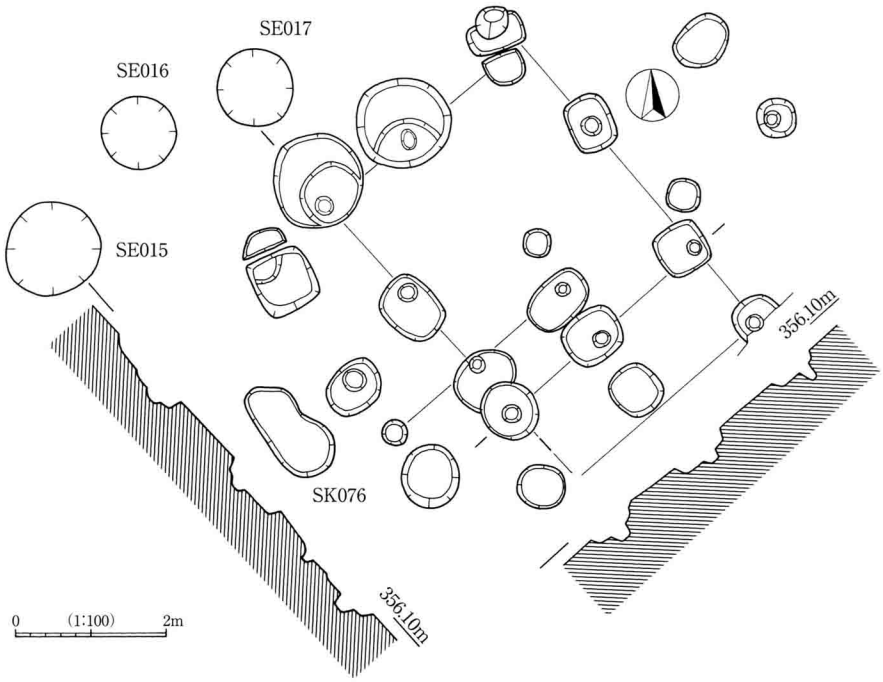


図103　SH002・SK076・SE015～017実測図（S＝1/100）

SK076

SH002柱穴群に接して検出された土坑である。不整形を呈し、長軸1.45m、短軸0.75mを測る。覆土は暗褐色粘質土の単一層であった。SH002柱穴覆土との類似性がみられたため、土坑底を精査したが、柱穴等は確認されなかった。

遺物は覆土中より須恵器が出土している。１は口径13.2cm、器高3.5cmを測る杯で、底部は糸切りである。２は底部片で、糸切りの後、底部外側から体部下半にかけて回転ヘラケズリを行っている。出土遺物より平安時代と考えられる。

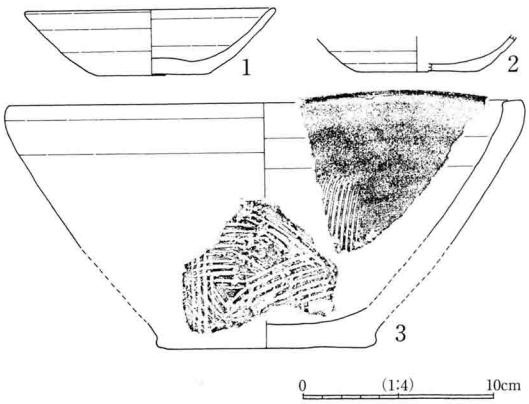


図104　SK076・SE015出土遺物実測図

S＝1/4　1・2；SK076　3；SE015

SE015・016・017

SH002の北西側で、SZ006の周溝を掘り込んだ井戸が３基並列して検出された。SE015は直径1.25m、SE016とSE017は直径1.0m測る円形・素掘の井戸跡である。いずれも井戸跡も壁面は明瞭に確認されたが、井戸枠の痕跡は見いだされなかった。また、それぞれ確認面下約1.5m掘り下げを行ったが、底面には達していない。出土遺物はSE015では土師器・須恵器片ほかが極少量あり、すり鉢１点を図化・掲載した。口縁部と底部の破片があり、直接の接合はないが、同一個体とみられることから図上復元を行っている。SE016は覆土中より土器片が極少量出土したにすぎない。SE017では覆土中より、弥生土器・土師器・須恵器の破片が極少量出土している。

SE015は出土遺物より中世まで下ることが確実視される。SE016・SE017については時期決定根拠に欠けるが、覆土の状況はSE015に極めて類似し、ほぼ同時期の所産とみて大過ないと考えられる。

7　④地点の概要

④地点からは弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓・土坑を中心に古代から中世の井戸跡、時期不明の方形ピット群が検出された。住居に関わる遺構は検出されず、①地点から連続する弥生時代後期から古墳時代前期墓域の一角をなしている。

方形ピット群　検出した方形ピット群は調査区全面に広がりをもち、一部で東西方向の列を確認した。ただし②・③区で検出されたピット列のような明確さはなく、①地点とほぼ同様なあり方と把握される。他地点同様に杭などの打ち込みあるいは抜き取り痕、残存物は観察されず、遺物の出土もない。遺物の出土がない点は本来、このピットが遺物を持たないことを明示すると捉えられる。このため時期把握は難しいが、検出されたすべての遺構を掘り込み、最も新しい時代の所産であることは明らかである。

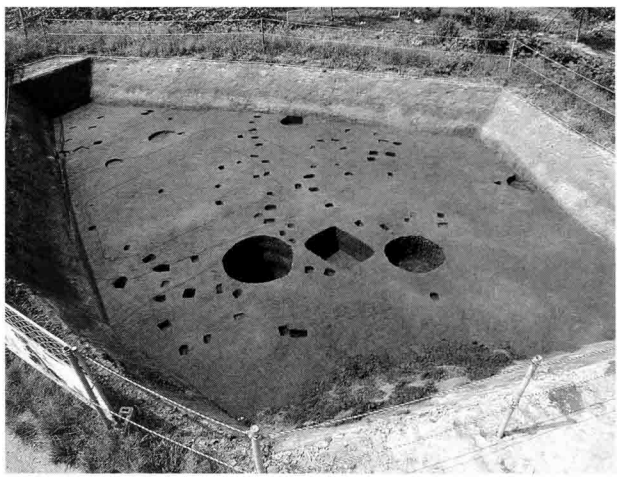


写真27　方形ピット群検出状況

古代から中世　古代から中世にかけての所産と考えられる遺構に、井戸１基、土坑３基が検出されている。このほかSZ017に重複して並んで検出された方形土坑群も埋没した周溝を掘り込む点を重視すると、該期まで時期が下降する可能性が高いと想定できる。いずれも土坑底はほぼ平坦であるが、柱穴あるいは柱受けの構造物は確認されず、建物跡を構成する土坑と積極的に評価する根拠に乏しい。

このように本地点では古代を主とした時期の検出遺構数が極めて少ないが、実はこれは大きな調査成果でもある。隣接するＸ－①地点・XI区では希薄ながら該期竪穴住居が検出されており、奈良・平安時代を中心とした住居分布が北側で空白域をもつと把握でき、集落構造の一端を垣間みることができる。また、調査区全体を通じて、該期、特に平安期の住居跡が検出されないことは稀少で、自然堤防上に分布密度の差こそあれ、広く展開する平安期の住居展開把握において注意すべき点を喚起する。北側のＸ－②・③区、西側のD－③区・市道山崎唐猫線地点に密に分布する住居群とは鮮やかに対比され、自然堤防上に途切れなく展開するとの印象が強い該期遺

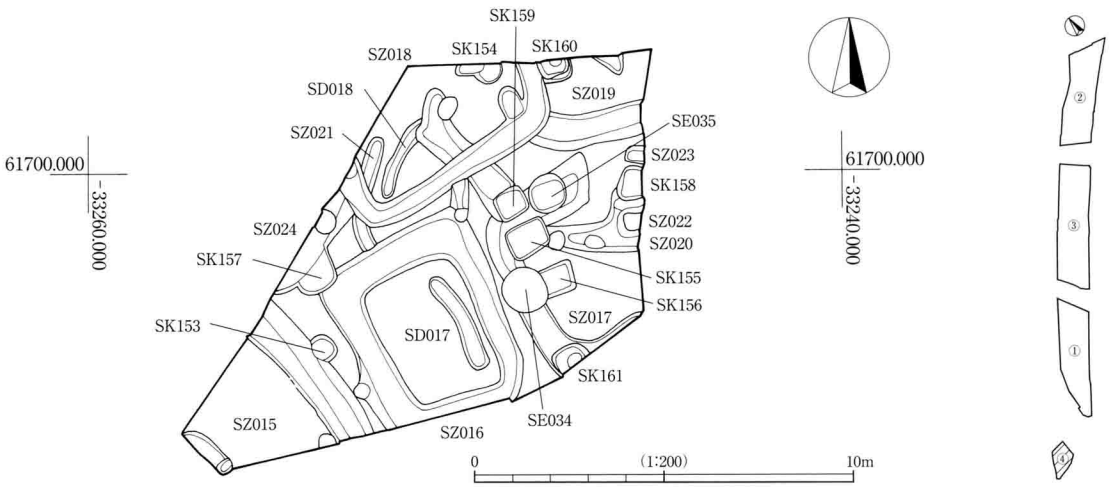


図105　④地点遺構分布図（Ｓ＝1/200）

遺構番号	形態規模	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品土製品玉類	鉄製品青銅製品	報告頁	時期	
		底部	その他	備考	後	先		実測個体数	破片重量				時代	細別
SZ015	方形か		主体部未検出			SK153	平行する2本の溝。一連のものとして方形周溝墓と想定。		0.01			90	不明	
SZ016	方形南区外		主体部未検出			Pit054	溝の途切れるブリッジ部なし。		0.479			90	弥生	後
SZ017	方形		主体部未検出			SE034 SE035 SK155 SK159 SK161	コ字形溝。		0.023	臼玉1		91	弥生(後)～古墳(前)	
SZ018	方形北区外		主体部未検出		SZ019 SZ021				0.027			92	弥生(後)～古墳(前)	
SZ019	東区外		主体部未検出			SZ018	円形周溝墓周溝として調査。形態からは？		0.007				弥生(後)～古墳(前)	
SZ020	東区外		主体部未検出			SK155 SK158 SK159 SZ022	円形周溝墓周溝として調査したが、溝である可能性大。		0.005				弥生(後)～古墳(前)	
SZ021			主体部未検出			SZ016 SZ018	円形周溝墓周溝として調査したが、根拠希薄。		0.012				弥生(後)～古墳(前)	
SZ022	不明		主体部未検出		SZ020		溝の先端部のみ検出。周溝墓か否かは不明。		0.024				弥生(後)～古墳(前)	
SZ023	不明		主体部未検出				先端部のみ検出。周溝墓としては幅が狭く、性格不明。		0.005				不明	
SZ024	不明		主体部未検出			SZ018 SK157 Pit055	壁際で検出された溝状遺構。方形周溝墓となるかどうかの確証は薄い。		0.036				弥生(後)～古墳(前)	
SD017	溝						SZ16墳丘部で確認された溝。墳丘底部である可能性が高い。		0.227				弥生	後
SD018	溝					SZ020			0.001				不明	
SE034	円形	未完掘		枠なし	SZ017 SK156				0.19			平安以降		
SE035	円形	平底					井戸跡ではなく、土坑。SZ017との重複関係は不明。		0.014				弥生	後期
SK155	長方形	平底					浅い長方形土坑。		0.027				弥生	後
SK156	長方形	平底				SE034	浅い長方形土坑。SK155･SK159とユニットを組むか？		0.008				弥生	後
SK157	楕円形か	平底					非常に浅い土坑。		0.142				弥生	後
SK158	方形か	平底					浅い長方形土坑。SK155･156･159に類似する。		0.02				弥生	後
SK159	方形	平底 少ピット状の窪みあり					方形土坑。						不明	
SK160	方形	平底 ピットあり		中央部			掘立柱建物柱穴か？ ただし建物を構成する他の柱穴なし。		0.006				不明	
SK161	方形	中央にピット状の窪みあり					中央ピット状にくぼむがSK160とは様相が異なる。						不明	

表10　X区④地点検出遺構一覧表

構群の捉え方に再考を促すものである。

弥生時代後期から古墳時代前期　弥生時代後期から古墳時代前期にかけては方形周溝墓群、溝が検出された。方形土坑群は出土土器微細片が該期に限定されるが、遺構間の切り合い関係より後出する時期の所産と判断した。

周溝墓は計10基検出した。ただし、確実視できるものはSZ015・016・017・018の4基の方形周溝墓で、他は大半が調査区外で溝跡の可能性も考えられる。規模は周溝内法（墳丘規模）が2.5～3.5mに収まる長方形で共通し、ブリッジ部が確認されたSZ017のみが一回り大きい。周溝墓間の重複は認められず、周溝を接するように並

列して分布する。方形周溝墓は隣接するX－①区・XI区でも検出されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて墓域を形成すると把握される。

8　④地点で検出された遺構と出土遺物

SZ015（篠ノ井・高畑15号墓）（PL－10）

調査区南西端部で検出された2条並行の溝跡である。南北ともに調査区外となり、並行する2条の溝跡の直接的連続性は確認できなかったが、覆土の状況ならびに掘削深度より同一遺構と判断し、方形周溝墓と想定した。

規模は周溝外法で一辺4.6m程度、周溝内法で2.6mを測る。周溝の途切れ部分などは調査区外となるため確認されなかった。周溝断面は墳丘側がきつく、外側が緩やかな形態を呈する。確認深度は0.2m程度と浅く、覆土は暗褐色粘質土の単一層であった。

墳丘盛土は確認されなかった。調査地は従前果樹園であったため、果樹根による撹拌が著しく、また抜根に伴う撹拌部を除去したため、遺構確認面は基盤層直上部まで達している。このため、墳丘盛土は確認されなかったが、本来は盛土が存在したものと考えられる。また、墳丘部断割調査も実施したが、埋葬施設は検出されなかった。表土掘削中にも注意を払ったが、埋葬施設に関わる土層の確認ならびに遺物の出土はみられず、調査実施時点までに墳丘の大半とともに削平されたと考えられる。

出土遺物は周溝より土器片が極少量出土している。図化・掲載できたものはないが、弥生時代後期から古墳時代前期に該当するものが主体を占め、該期の所産と考えられる。

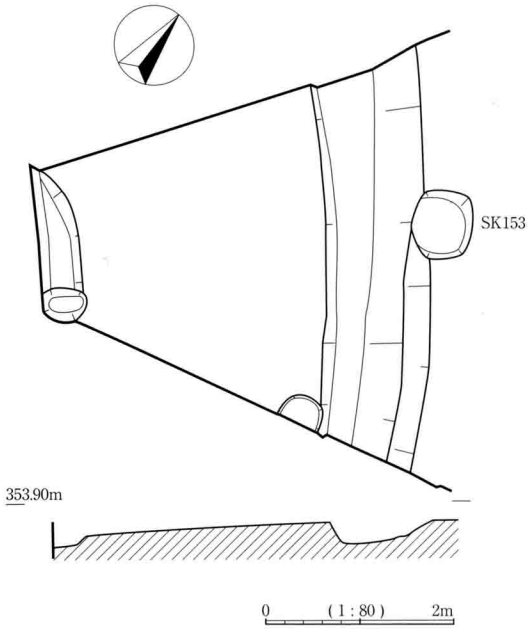


図106　SZ015実測図（S＝1/80）

SZ016（篠ノ井・高畑16号墓）（PL－10）

調査区のほぼ中央で検出された方形周溝墓である。東西に並列するSZ015、SZ017との周溝の重複はみられず、3基並列して検出された方形周溝墓群の中央に位置する。南側で一部調査区外となるが、ほぼ全形が把握できる唯一の事例である。

規模は周溝外法で4.2m×5.2m、周溝内法で3.6m×2.6mを測り、南北に長い長方形を呈する。周溝の途切れ部分は確認されず、全周すると考えられる。周溝

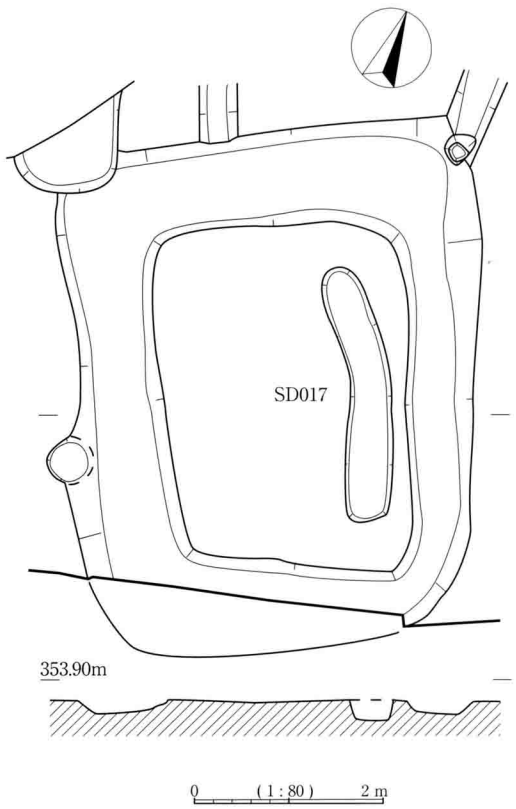


図107　SZ016実測図（S＝1/80）

断面は墳丘側が緩やかで外側が幾分急に立ち上がる形態を呈する。確認深度は0.2～0.3mで、覆土は暗褐色粘質土の単一層であった。

墳丘盛土はSZ015同様に確認されなかった。確認面の設定は前述のSZ015同様で、本来は墳丘盛土が存在したと考えられる。墳丘部上では墳丘内で収束するSD017が検出されている。当初、埋葬施設との関連性を考慮したが、明確な関連性の根拠は認められなかった。また、墳丘部の断割調査も実施したが、埋葬施設は検出されていない。

出土遺物は周溝内より土器片が少量出土している。図化・掲載できたものはないが、破片資料は弥生時代後期から古墳時代前期に該当するものが主体をしめ、該期の所産と考えられる。

SZ017（篠ノ井・高畑17号墓）（PL－10、PL－X－4）

3基並列する方形周溝墓の最も東側に位置する。後出する土坑や井戸の重複が著しく、検出状況は良くない。

規模は南北方向の周溝外法で一辺5.6m程度（確認長4.5m）、周溝内法で3.1mを測る。周溝はコ字形に検出され、南北辺の中央部付近にそれぞれブリッジ部を持つと想定される。なお、東半部は調査区外となるため、検出されていない。ブリッジ部をほぼ中央に想定して全形を復元すると、東西に長い長方形を呈すると考えられる。

周溝の断面は墳丘側が急で外側に緩やかな形態を呈する。ただし、SE034以南では若干墳丘側が緩やかとなるものの、他例に比して立ち上がり角度が急である。これは周溝壁面が極めてわかりづらかったことに起因しており、本来の形状を示していない可能性が考えられる。周溝覆土は暗褐色粘質土の単一層であった。

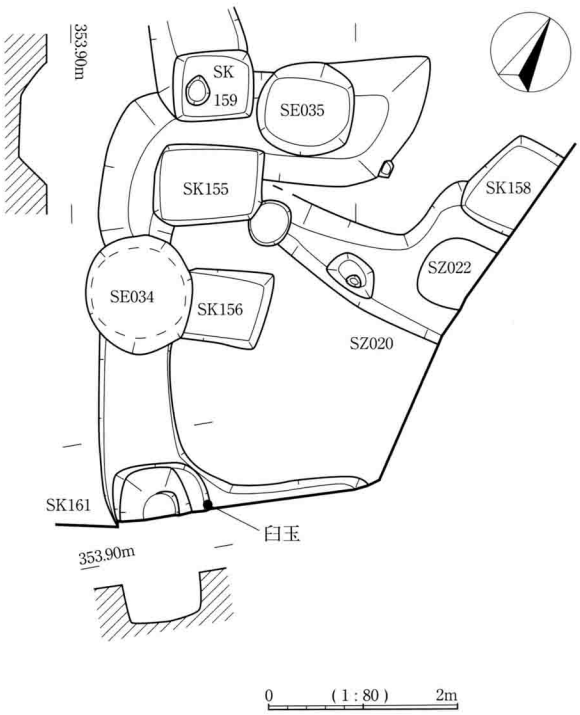


図108　SZ017実測図（S＝1/80）

重複遺構は方形土坑ならびに井戸跡がある。いずれも後出遺構で周溝を掘り込んでいる。また、南壁際で検出されたSK161からSE034付近にかけて、周溝底を中心に炭の広がりが確認された。炭は壁面中に続くことが確実で、本墓に伴うものではない。別遺構の重複の可能性が考えられ、精査を行ったが、その存在については把握できなかった。なお、前述したSE034以南で周溝壁面が明確に把握できなかった点はこの未確認遺構との重複によるものと考えられる。

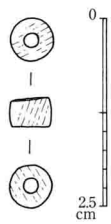


図109　SZ017出土臼玉実測図（S＝1/1）

出土遺物は周溝内より土器ならびに石製臼玉1点が出土している。出土土器は破片3片と極微量であるが弥生時代後期から古墳時代前期に該当するとみられ、該期別遺構が認められないことから築造時期を示す可能性を想定しておきたい。石製臼玉は1点出土している。直径0.6cm、厚さ0.5cmを測る。側面は非常に丁寧に仕上げられており、平滑である。上下面は整形痕が確認でき、整形が加えられているが若干の凹凸が観察され、管切技法によって製作された可能性が考えられる。石材はいわゆる緑色凝灰岩である。出土位置はSK161の壁際で、周溝底より10cm前後上層で検出された。厳密にはSK161覆土中に含まれない壁外となるが、SK161掘削による影響は当然受けている範囲に含まれ、本来の位置を止めていない。帰属の判断は極

めて難しく確定はできないが、他に当該遺物を伴う遺構の存在も見いだせないことから、本墓副葬品であった可能性も考慮しておきたい。

SZ018（篠ノ井・高畑18号墓）（PL－10）

SZ016・SZ017の北東側よりコ字形に検出された溝跡である。北側は調査区外となる。SZ015から017の３基の並列する方形周溝墓と主軸を揃えて、重複せずに位置する。この位置関係ならびに形状より方形周溝墓と判断した。

周溝の確認深度は0.1m程度と極めて浅い。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、周溝最下層が残存しているに過ぎなかった。墳丘盛土ならびに埋葬施設も検出されず、残存状況は極めて悪い。

重複遺構はSK154・SK160の土坑に掘り込まれ、溝跡群はいずれも先行すると考えられる。当初、これらの溝跡は先行する円形周溝墓の可能性を考慮したが、明確に墳形が把握できた事例はなかった。

遺物は周溝内より土器小破片が２点出土しているのみである。弥生時代後期から古墳時代前期に該当すると思われるが、先行する溝跡が多数みとめられることから、築造時期を示すものとして積極的に評価しがたい。ただし、SZ015からSZ017とともに計画的に配置されたとみられる位置関係からは、それらと同時期の所産と見なして大過ないと考えられる。

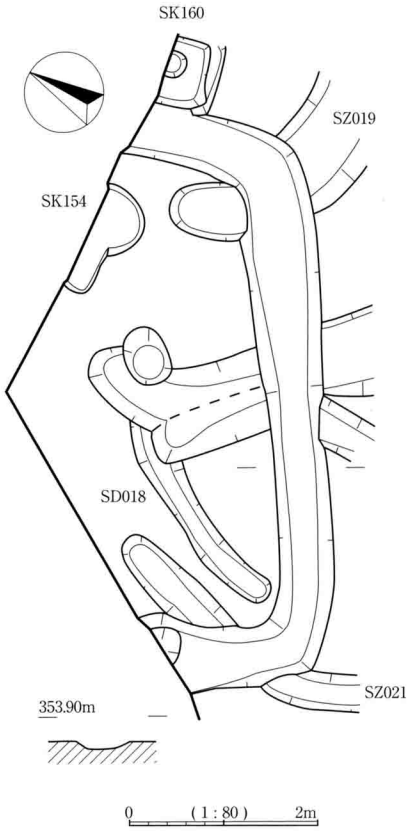


図110　SZ018実測図（S＝1/80）

写真28　④地点全景
（北東から）

写真29　SZ017・SK161臼玉出土位置
（SK161左側の土柱上ピン中央が出土位置）

V　XI区の調査

1　XI区の概要

XI区からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての円形周溝墓・方形周溝墓、古墳時代中期の円墳、奈良から平安時代にかけての竪穴住居・掘立柱建物・土抗等、中世かと考えられる溝・井戸、時期不明の方形ピット群が検出されている。古墳時代後半期遺構は存在せず、この空白期を経て墓域から集落域へ転換したと捉えられる。この転換の時期はX-①・③・④区でも同様に認められ、自然堤防上で広く連動する遺跡変遷の画期と認識することができる。

調査区中央北よりからは窪地状の落ち込みが検出されている。土抗あるいは溝状の形態を呈すると考えられるが、人為的掘削の痕跡が観察できなかったことから窪地状の落ち込みとして報告する。

このほか、攪乱が3カ所検出された。攪乱内にはコンクリート片を多量に含み、従前の建物基礎に関わると考えられる。遺構分布域に存在するため、攪乱土の完全除去を行ったが、南北両側の攪乱は遺構確認面下まで達し、中央の攪乱下で辛うじて遺構を検出することができた状況であった。

中世　平安時代後半期以降、中世に該当すると考えられる遺構に溝（SD012・SD013）と井戸（SE020～023）がある。住居遺構は検出されていない。溝跡は北壁際で東西方向に調査区を横断して並行する2条を検出した。出土遺物は少ないが、青磁片や古銭などの遺物や遺構の重複関係より中世に比定される。井戸はいずれも円形素掘で井戸枠などの検出あるいは痕跡は認められない。確認面下2m程度まで掘り下げを行っているが、底面は検出されていない。覆土中より平安時代を主とする土器片が出土しているが、他地区の様相を加味すると、中世まで下るものが大半を占めると想定される。

奈良から平安時代　竪穴住居・掘立柱建物・土坑などが検出され、隣接するX区～XII区にかけて展開する該期集落域の一角に該当する。ただし、遺構間の重複がほとんどみられないなど分布は希薄で、偏在する傾向からも繰り返し選択された住居地ではないと把握できる。

平安時代はSB092・096・097が該当し、いずれも東壁際に位置している。調査区北西側にはほとんど遺構分布がみられず、より東側に遺構の広がりがあるものと予想される。散発的な住居分布はX区と同様で、一連の集落を形成すると把握される。

奈良時代竪穴住居はSB095・100・101など調査区南側に集中し、北側には展開しない。この北側の住居空白域には後述する窪地状の落ち込みが位置し、X-①区の該期住居群とはこの落ち込みを挟む位置関係となる。周溝墓墳丘を避けるような分布状況は当区、X-①区ともによく類似し、一連の集落を形成することは確実であろう。また、掘立柱建物SH003・005は平安時代の住居であるSB097床面にて検出されており、該期に属すると想定される。柱穴がそれぞれ2および3カ所確認されたに止まり全体形は不明であるが、窪地状の落ち込みに面して掘立柱建物が配置されていることが把握できる。

古墳時代中期　円墳（SZ011）が1基検出されている。当初、古墳時代前期土器の出土が大半を占めたことから大型の円形周溝墓（円形墳）の可能性を想定していたが、周溝形状が中期円墳群と類似すること、少量ながら古墳時代中期に比定される土器や玉類・鉄製品の出土がみられたことから円墳と判断した。XII・B・C・D区で検出された中期古墳群の1基として群をなしたと把握される。

弥生時代後期（箱清水式期）から古墳時代前期　竪穴住居・周溝墓・溝が検出されている。SB099は西壁際で

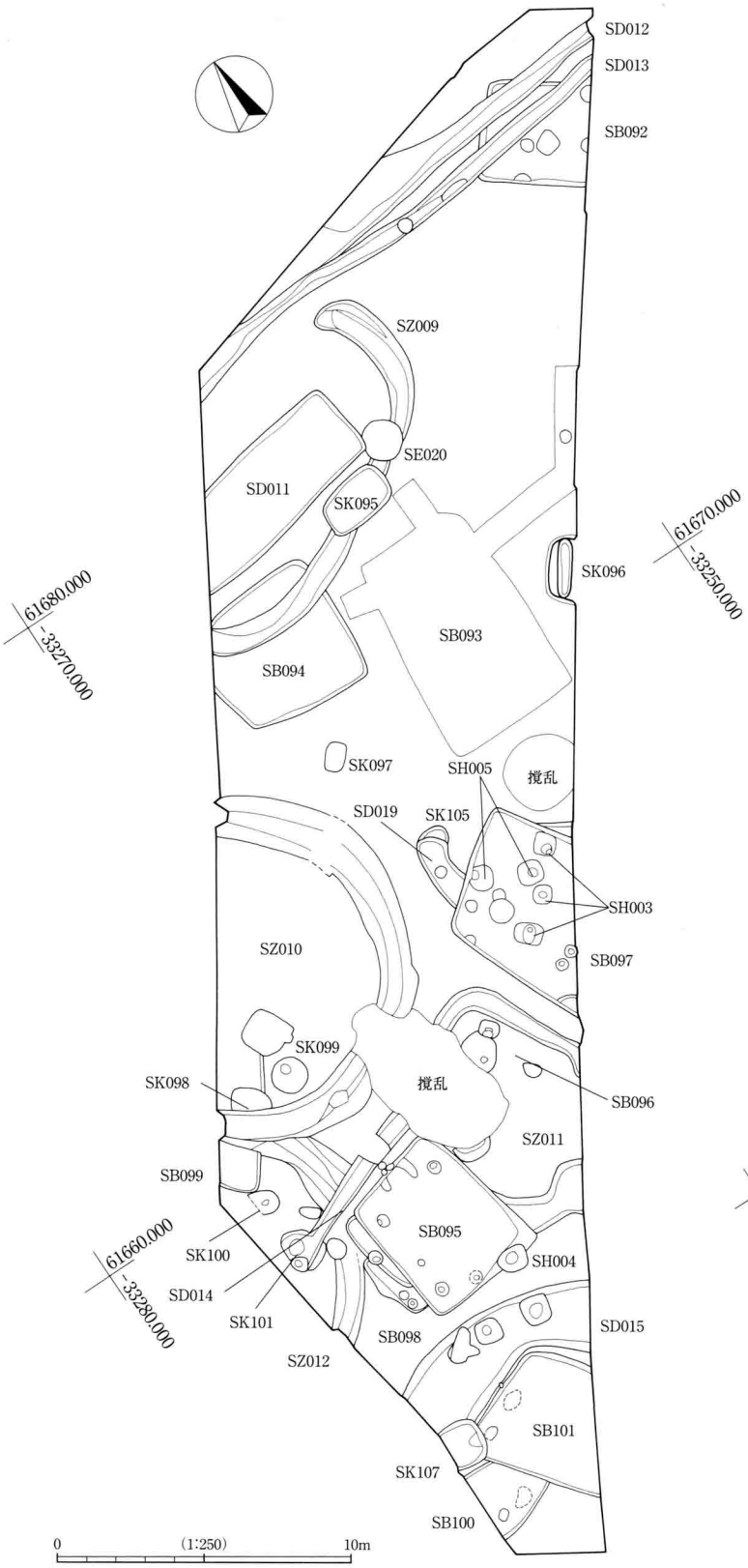
検出されたうえ、SZ010周溝によって破壊されているため確認範囲が狭く、充分な情報は取得されなかった。床面・柱穴・炉などの付帯施設は未検出であり、竪穴住居と積極的に評価する確証は少ないが、形態より住居跡と判断した。溝はSD011が検出されているほか、円形周溝墓周溝として調査したSZ009やSB097下層で検出された溝跡も該期に該当するとみられる。調査区を横断して延びる溝跡はみられず、いずれも調査区内で収束する。円形周溝墓（小型円形墳）は１基（SZ012）、方形周溝墓（小型方形墳）は１基（SZ011）が検出されている。SZ009は検出当初円形周溝墓として調査を進めたが、円形を呈さない点や周溝の掘削深度・底部形態などより周溝墓として積極的に把握する根拠に乏しく、溝跡である可能性が高いと判断した。円形周溝墓（小型円形墳）であるSZ012はSZ011と周溝を重ねて並列する。墳丘盛土は最下層部分がわずかに残存しているに過ぎず、埋葬施設などは検出されていない。方形周溝墓（小型方形墳）であるSZ010はSB095や撹乱によって大部分が破壊されたうえ、確認部分も撹乱下でかろうじて検出された状況で、残存状況は非常に悪い。埋葬施設なども検出されなかった。なお、SB097直下で検出された溝跡は方形周溝墓になる可能性があるが、北側が窪地状落ち込みとなり、周溝は巡らない。円形周溝墓はXII区で、方形周溝墓群はX−①・④区でも検出されており、これらとともに該期墓域を形成すると把握される。

弥生時代後期（吉田式期） 遺構の検出はなく、土器破片がSD015・SB097・SK105・SK096覆土中より出土しているにすぎない。出土点数は少なく、該期遺構の展開が予想できるものではない。

遺構番号	形態 規模m	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
		底面	炉・カマド	柱穴	先	後		実測数	破片重量				時代	細別
SB092	方形 4×(3.6)	不明瞭 堆積土の変化による	検出されず	3		SD012 SD013	撹乱によって検出面での確認ができず。また、北側を溝に掘り込まれる	2	1.7	軽石製品1		109	平安	
SB093		不明瞭	なし	なし			窪地状の落ち込み	11				98	奈良	
SB093 下層							窪地状の落ち込み	3				98	奈良	
SB094	方形	不明瞭	なし	なし			覆土上層より遺物出土。竪穴住居である確証少なく、窪地状の落ち込みの一部である可能性が高い。		1.05			98	奈良か	
SB095	長方形 5×4.1	貼床	カマド（石芯カマドか）	3		SH004 SK102		11		軽石製品1		105	奈良	
SB096	不明	不明瞭	検出されず	なし			撹乱1・撹乱2間でわずかに検出された。	2					平安	
SB097	方形 4.4×(5.4)	不明瞭 堆積土の変化による	検出されず	なし	SH003 SH005	SE021	北・東壁は明瞭に確認。西壁は撹乱2の影響により不明瞭。	13				106	平安	
SB098	方形か 4m	不明瞭	検出されず	検出されず		SB095		2	0.81			105	奈良	
SB099	方形か 5.1m	不明瞭	検出されず	検出されず		SZ011	壁面の土層観察で存在は確実。		0.32			101	弥生（後）～古墳（前）	
SB100	方形か	不明瞭	カマド 火床検出	検出されず				4	2.7			107	奈良	
SB101	方形 4×(4.6)	貼床	カマド 火床検出	なし		SK107		14				107	奈良	

遺構番号	形態 規模m	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
		底面	炉・カマド	柱穴	先	後		実測数	破片重量				時代	細別
SH003				3		SB097			0.53			106	奈良か	
SH004				3	SB095		3箇所以外に柱穴検出されず。		0.31				奈良以降	
SH005				2		SB097			0.19			106	奈良か	
SZ009	楕円形 幅0.7						プラン不明瞭。円形周溝墓として調査したが、溝跡と判断した。	1	0.77				弥生(後)～古墳(前)	
SZ010	方形 外径7					SB095	方形周溝墓。撹乱1・2によって大きく破壊される。残存部分の検出状況は確実。	5				100	古墳	前期
SZ011	円形 径12m				SB099		円墳。	4		臼玉1 勾玉1	鉄鏃1	101	古墳	中期
SZ012	円形 径7前後					SZ011 SD014	円形周溝墓。		0.27			104	弥生(後)～古墳(前)	
SD011	幅2.9								1.95				弥生(後)か	
SD012	幅0.74				SB092				1.95	土錘1	針状銅製品 古銭2	109	中世	
SD013	幅0.7				SB092			1	0.82			109	中世	
SD014	幅0.7				SZ011 SZ012				0.24				不明	
SD015	幅1.9							1	1.82				平安か	
SD019	幅1.0					SB097 SK105		(6)					弥生	後期
SE020	円形 径1.53	未完掘			SZ009		素掘。井戸枠の痕跡なし。		0.07				中世か	
SE021	円形 径0.85	未完掘			SB097		素掘。井戸枠の痕跡なし。					106	中世か	
SK095	長方形 2.5×1.5	平坦			SZ009			2	0.5				弥生(後)か	
SK096	長方形	溝状凹あり					掘り込みは表土直下より行われていることを確認。		0.09				近現代	
SK097	長方形 1×0.7	平坦							0.03				平安か	
SK098	不整方形 径1.48				SB099	SZ010		1	0.52			101	弥生(後)か	
SK099	円形 径1.32								0.36			101	平安	
SK100	楕円形 径1.4						南西側調査区外。		0.05				弥生	後期
SK101	円形 径3.0				SD014				0.28				不明	
SK102	方形 1×0.8						方形ピット群とともに検出。		0.1				奈良～平安か	
SK105	楕円形 1×0.8				SD019				0.06				奈良～平安	
SK106	楕円形 1.2×0.5						南東側に突出部あり。		0.02				不明	
SK107	方形 1.7×(1.3)	平坦						2	1.01			107	奈良	

表11　XI区検出遺構一覧表



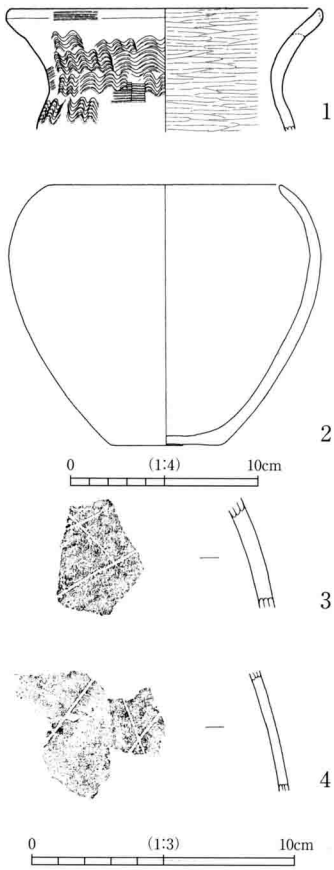


図112　検出面等出土遺物実測図

1・2；S＝1/4

3・4；S＝1/3

1：SZ009　2：検出面

3：SK096　4：SD015

図111　XI 区遺構分布図（S＝1/250）

方形ピット群

調査区北東部ならびに南端部を除くほぼ全域より検出されている。検出状況は本書にて報告する各調査区で最も良好な状況と評価できる。南側で列は明瞭さを欠くが、北側では南北方向に明確な列が認められる。東西方向は全体的に列の乱れが著しいものの、列配置を想定するに充分な検出状況と考えられる。この列の方向はX-②・③区で検出された方形ピット群と同一方向で、一連の遺構群として広範囲に分布していたことが想定される。遺物の出土は他地区同様にみられず、帰属時期などは明らかにしえない。ただし、井戸を含め、下層に存在する遺構を掘り込んでいて、検出遺構中最も新しい時期の所産であることは確実である。

写真30　方形ピット群（南より）

写真31　方形ピット群（北より）

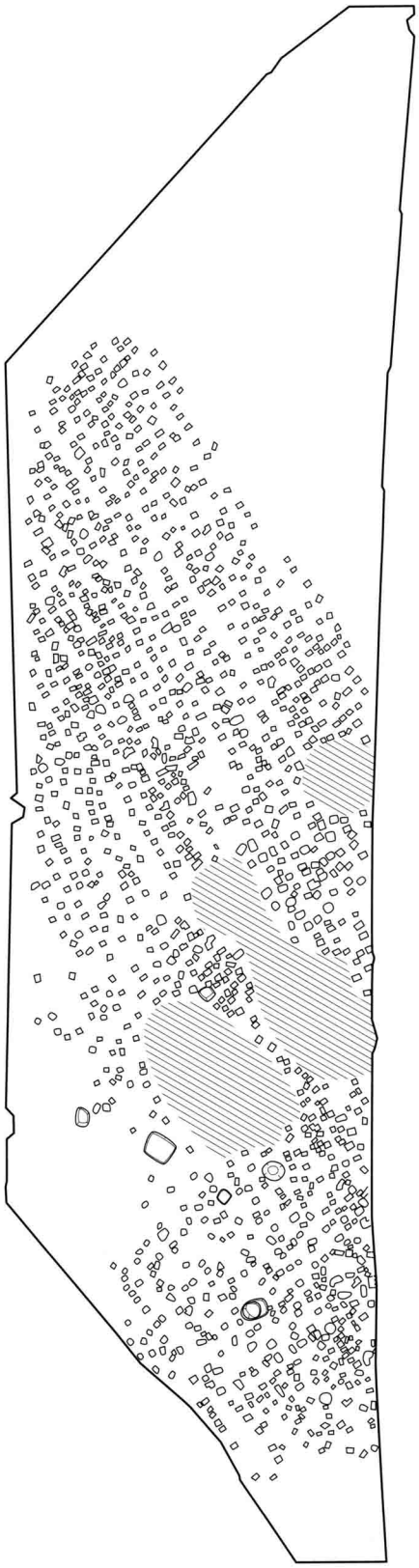


図113　方形ピット群平面図（S＝1/250）
トーン部は撹乱を示す

窪地状の落ち込み（SB093・SB094）

調査区ほぼ中央北よりで検出されたSB093は当初、竪穴住居跡の可能性を想定して調査を進めた。しかし、床やカマド・柱穴等の施設がみられないうえ、四壁ともに壁面が明確に把握できず、当初想定した遺構とは規模も形状も異なる別遺構の可能性が考慮された。さらに、遺構覆土と想定した黒色粘質土が北側で基盤層と想定した黄褐色粘質土下へ入り込んでいることが確認され、トレンチにより落ち込んだ状態で黄褐色粘質土下に堆積が連続していることを確認した。この結果に基づき、SB093として調査を進めた範囲全体を掘り下げ、窪地状の落ち込みを検出した。

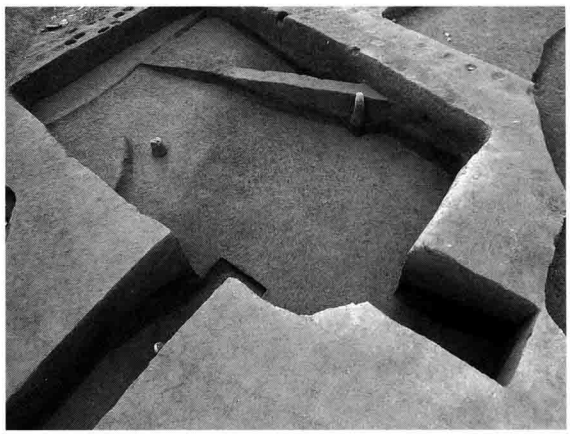


写真32　落ち込み全景（北東より）

確認された落ち込みは南より北に向かって落ち込んでいる。東側に延長したトレンチにおいて東側限界点が確認され、北西側ではSB093北東壁に設定したトレンチならびに住居跡としての要件をSB093同様に備えないSB094内に設定したトレンチにより、包含層が東側の落ち込み底部に向かって緩傾斜を有して堆積していることを確認した。また、北側で検出されたSZ009とSD011では弥生時代後期～古墳時代前期に該当する遺物を含むことからこれらの遺構までは拡がらないと想定される。以上より、方形に近い大型の土坑状の落ち込み、あるいはSZ009とSZ010間に延びる溝状の落ち込みと想定される。

写真33　土層堆積状況（南東側トレンチ）

遺物包含層である黒色粘質土直下では遺跡基盤層となる黄褐色粘質土が確認され、基盤層直上に包含層が堆積している状況である。落ち込み底部にピットなどの付随施設は認められない。また、水流や滞水の痕跡は認められず、自然流路を含む溝状遺構という性格も想定しづらい。

写真34　下層包含層堆積状況（北東から）

出土遺物は包含層中より土器の出土がある。図115－4～14はSB093とした上層出土で、1～3は黄褐色粘質土層下底部直上に堆積した包含層中より出土したものである。この2層の包含層間には当初SB093床面（底部）と把握した黄褐色粘質土が堆積し、層位としての分離は明確であった。ただし、両者ともに古墳時代タイプの杯蓋が残存するなど時間的な非連続性を指摘する要素に乏しく、非常に近接した時期に上下2層の包含層が形成されたことを示している。この点は土層の堆積状況でも同様の所見となる。前述したように遺物包含層である上層と下層の暗褐色粘質土の間には黄褐色粘質土が堆積する。この黄褐色粘質土は礫などの混入物をほとんど含まないうえに窪地への自然堆積に特有の地形に沿った帯状堆積が観察できず、一気に埋め戻された可能性が想起される。出土土器相に示されると考えた時間的近似性は黄褐色粘質土の堆積状況とも合致し、自然埋没ではない人為的埋め戻しの可能性が高いと把握できる。

以上のように、埋没については人為性が強く想定できるが、掘削については緩傾斜面・底面ともに明らかな痕

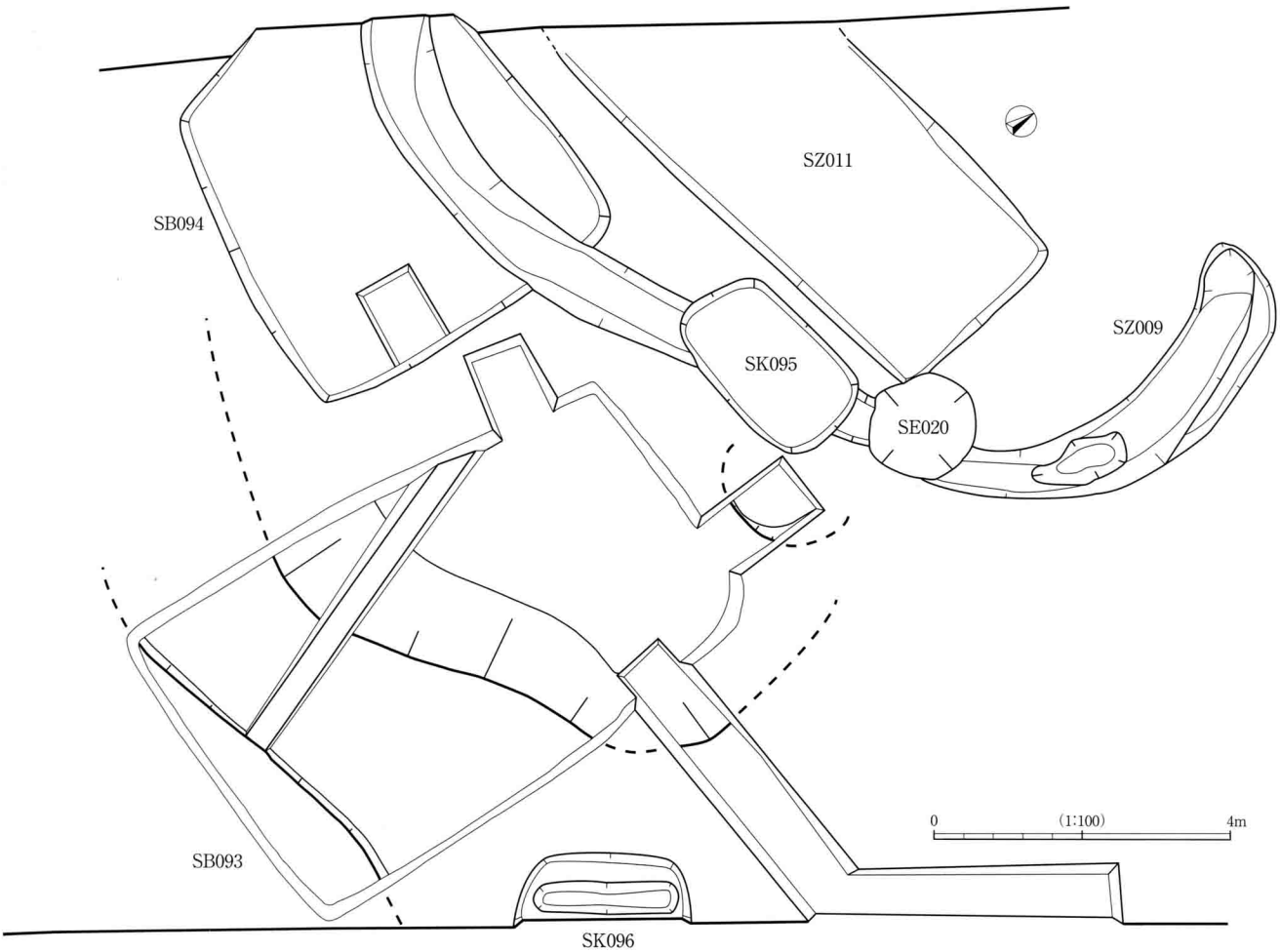


図114　窪地状落ち込み周辺実測図（S＝1/100）

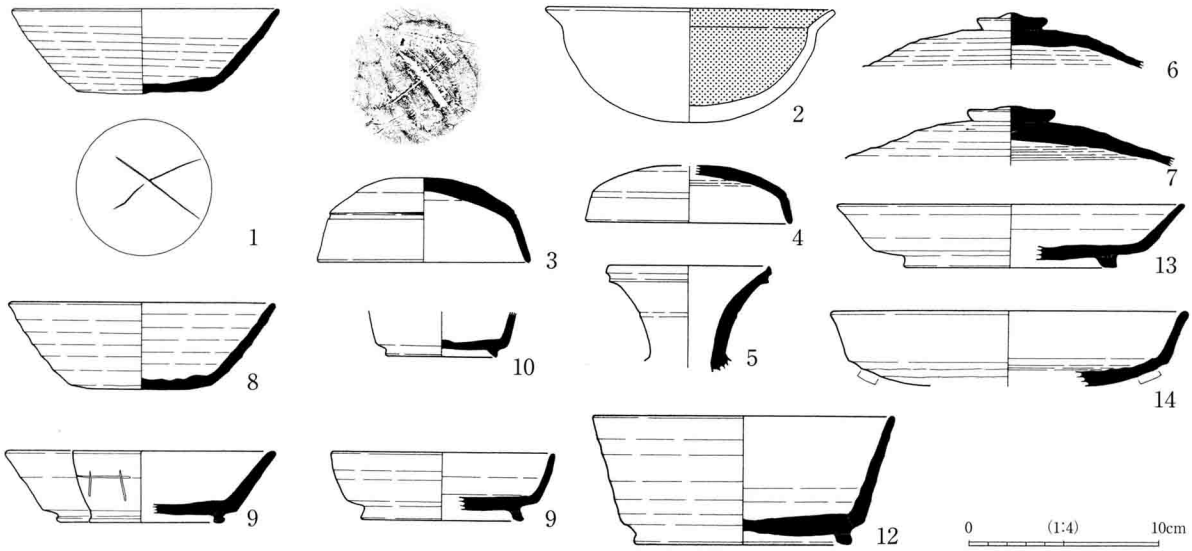


図115　窪地状落ち込み出土遺物実測図（S＝1/4）1～3は下層、4～14は上層（SB093）出土

跡が認められないため、窪地状の落ち込みとして報告する。ただし、自然堤防上で部分的に窪地状地形が形成される過程を説明することは難しく、また、出土遺物からみてこの窪地状地形が存在した期間がほぼ奈良時代に限定され、住居空白域に存在することを想起すると、条里水田の開発に関わり人為的に手が加えられた遺構の可能性も充分考慮することができると考えられる。

2　検出された遺構と出土遺物

SZ010（篠ノ井・高畑10号墳）（PL－11）

周溝外法７m、周溝内法5m程度を測る方形墳（方形周溝墓）と考えられる。北辺を撹乱に、西辺をSB095の重複によって破壊され、南辺は調査区外となる。東辺も撹乱下でわずかに確認された程度で、周溝の確認深度も最深10cm程度と残存状況は極めて悪い。

墳丘盛土・埋葬施設ともに検出されていない。特に東壁に周溝がかかっているため、壁断面により墳丘の存在が確認できることを期待して壁面の精査をおこなったが、撹乱等の影響が大きく、把握することはできなかった。

周溝は周溝東辺・西辺ともに東壁際で収束する形態を取り、東南部にブリッジ部の存在が想定される。厳密には調査区外となるため確証はないが、東壁の堆積土層に周溝覆土の延長が認められないことから、東南角部にブリッジをもつ形態である可能性が高い。

出土遺物には土師器壷・高杯、須恵器杯がある。１は小型の壷で外面縦ミガキ後、赤彩を施す。内面はナデ調整で、屈曲を分割成形し、接合痕が明瞭に残る。底径５cm、残存高8.6cmを測る。２・３は壷底部片で、２は輪台状の成形により底部中央が凹み、３は平底である。４は高杯で、内外面ミガキ調整で、外面に波状文が施文される。赤彩は施されない。６は北陸系と考えられる台付壷である。外面はミガキ後、赤彩を施し、胴屈曲部にはシャープな突帯が巡る。内面にはユビナデの痕跡が残る。周溝と接したSB096想定範囲内より出土しているが、SZ010に伴う可能性が高く、他の土器群との齟齬もない。古墳時代前期前半代に該当すると捉えられる。

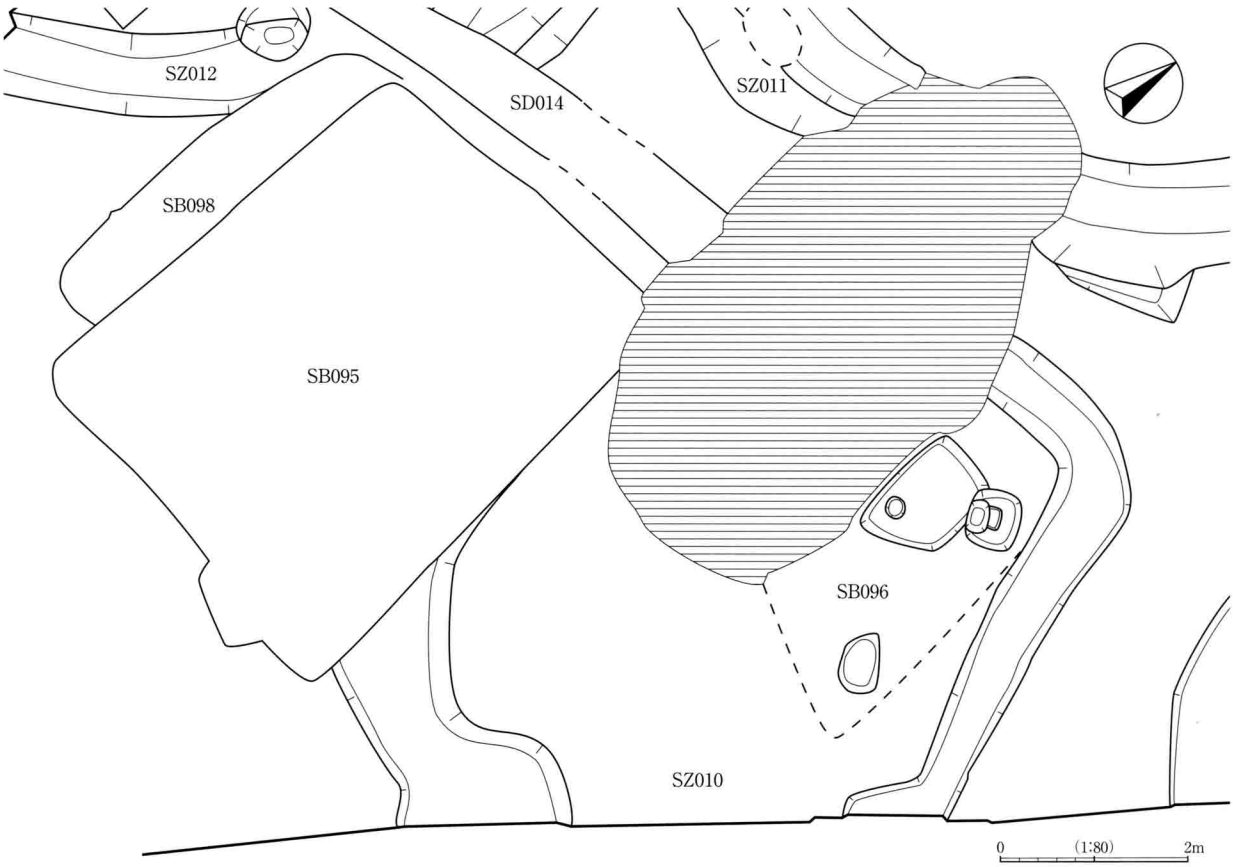


図116　SZ010実測図（S＝1/80）

また、SZ010の墳丘上には平安時代の竪穴住居かと考えられるSB096が存在したと考えられるが、撹乱の影響を大きく受け、プランなどを把握することができなかった。他の竪穴住居の掘削深度を考慮すると、SB096の構築面は他より高く、これによりSZ010に墳丘が存在した可能性を推定することができる。

出土遺物には須恵器杯がある。さらに、SZ010周溝出土として図化掲載した須恵器杯（図117－5）はちょうどSB096が位置したとみられる周溝北東角部からの出土で、底部糸切り未調整という特徴からもSB096に帰属すると考えられる。

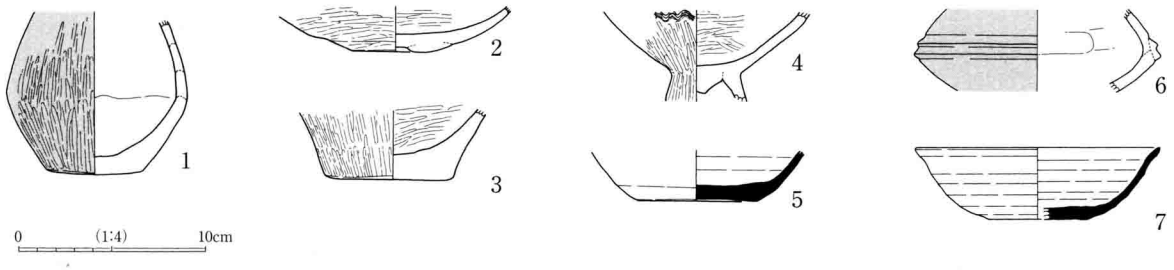


図117　SZ010・SB096出土遺物実測図（S＝1/4）　1～5；SZ010　6・7；SB096

SZ011（篠ノ井・高畑11号墳）・SB099・SK098・SK099（PL－11、PL－XI　XIII　XII－1）

SZ011は周溝外径約12m、周溝内径約9.4mを測る円墳である。西側約1/2が調査区外となる。墳丘は調査区西壁の観察によって盛土の存在が確認できた。ただし、周溝を破壊する撹乱が現地表下１m程度まで本墳を覆って広がり、撹乱下においてわずかに確認されたにすぎない。確認できた盛土は検出面上20cm程度の黄褐色粘質土で、その上は周溝覆土にかかる黒色土で覆われていた。また、壁際に設けた排水用の溝をトレンチとして精査したが、検出面下では基本的に基盤層が確認された。墳丘中央部に設定したトレンチにおいても同様の所見が得られ、検出面付近が古墳ベース面であることが確実である。盛土の造成単位なども明確でなく、造成面を含めた墳丘最下層がわずかに残存しているに過ぎないと考えられる。

墳丘上ではSB099を掘り込む1.34×1.4mの方形の土坑が１基検出された。この土坑に近接する方形ピット覆土中より勾玉の出土がみられたため（図118の●）、埋葬施設の一部である可能性を想定して調査を進めた。しかし、覆土は炭化物や土器の微細粒を含む暗黄褐色粘質土の単一層で、木棺そのものや木棺等の腐朽による陥没の痕跡あるいは副葬遺物の出土はなく、埋葬施設に関わる可能性は低いと判断された。

周溝はコンクリート塊を含む現代の撹乱により一部破壊されていたが、調査区内では途切れることなく検出された。撹乱の南側、周溝確認面で獣骨が検出されたが（図118の点線内）、より上層からの掘り込みが確実で、本墳に伴うものではない。

周溝の断面形態は墳丘側の傾斜がきつく、外側が緩い。底部も明確な平坦面を有さずに緩い円弧を描く。周溝覆土は黒色ならびに黒褐色粘質土を主体し、Ⅴ層を中心に土器片の出土が認められた。さらに、Ⅵ層からも若干ながら土器片の出土がみられたため、当初Ⅵ層直下の基盤層を周溝底と捉えたが、周溝底からの壁の立ち上がりがつかめず、土層堆積状況の検討の結果、Ⅵ層は基盤層直上に堆積する漸移層と把握された。また、Ⅱ層暗褐色砂質土層は黄褐色粘質土ブロックを含み、他の堆積土と異なる。基本層序にはみられない土層で、あるいは墳丘削平土である可能性が考えられる。覆土最上層は墳丘上まで連続する黒褐色粘質土で、これは検出面上に堆積する平安時代包含層に該当すると判断される。埋葬施設が検出されなかったことからも、この段階までに墳丘が削平され、わずかな高まりとして埋没したと理解される。

出土遺物は墳丘上より翡翠製勾玉１、周溝内より土器片、滑石製臼玉１・鉄製品１が出土している。周溝内出

土の土器片は意図的な配列や墳丘上からの転落を明確に示す良好な状況での出土はみられなかった。土師器が主体をなし、テンバコ（54×34×9.5cm）2箱弱の出土量をみたが、そのほとんどが微細片であった。図化・掲載できたものに土師器甕・壷ならびに須恵器杯がある。1は土師器小型甕である。1/4程度の残存で、口縁部片と底部片が存在するが、直接の接合はない。復元器高約14.3cm、復元口径12.8cmを測る。調整は内外面ともにヘラ状工具による整形後、ミガキが施される。焼成は良好で、胎土には雲母片が多量に含まれる。底部は欠損が著しく、その不自然さからは打ち欠きが行われた可能性も考えられる。2は土師器壷の底部片で、Ⅵ層より出土している。内外面ミガキ調整が施され、特に外面の縦方向のヘラミガキは、弥生時代箱清水式に通有の調整方法である。周溝底直下での出土であり、本墳の上限を示す資料と評価される。3・4の須恵器杯2点は覆土上層からの出土であり、周溝埋没過程での混入品で、周溝の完全埋没の時期を示す可能性が高い。

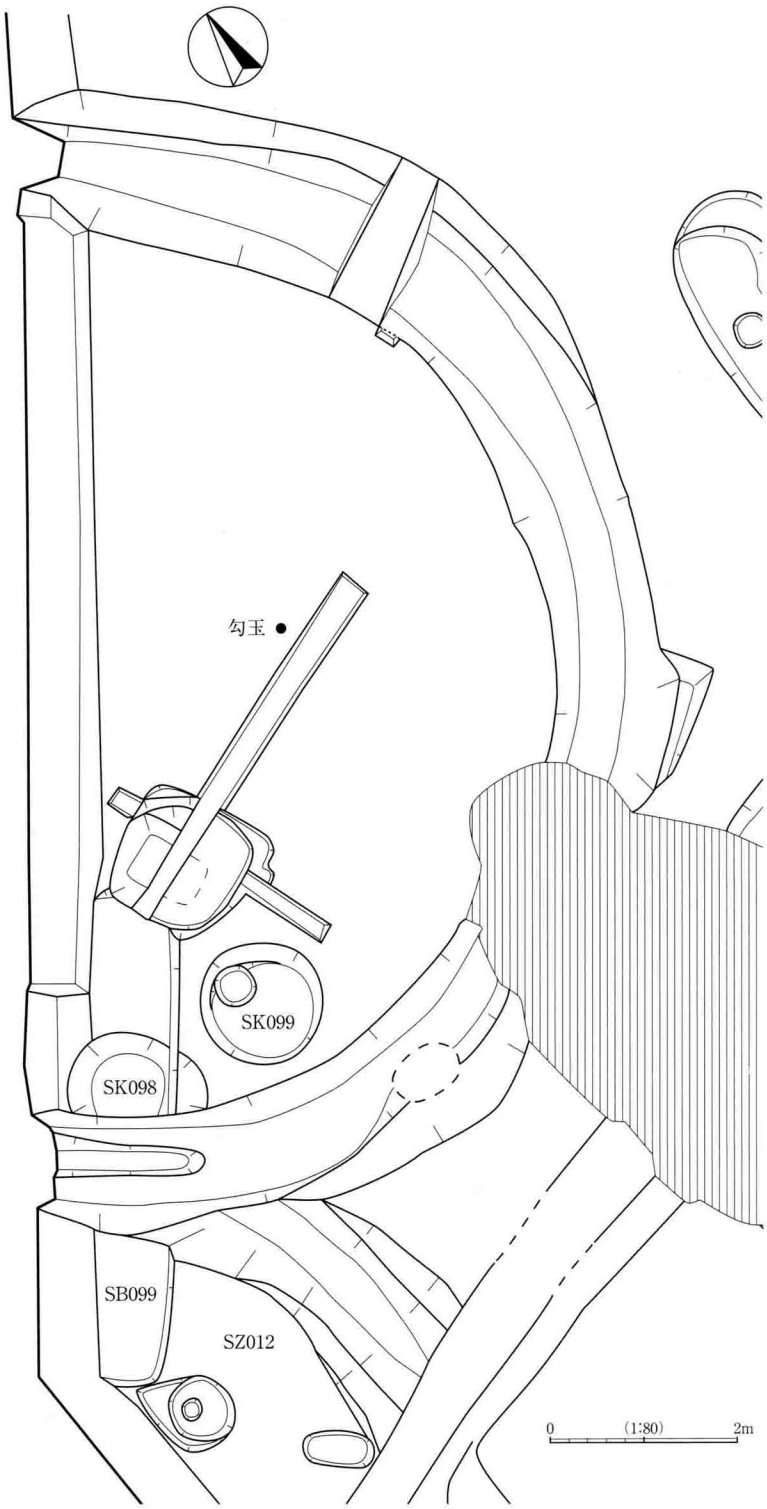


図118　SZ011実測図（S＝1/80）

勾玉はSZ011墳丘上で確認された方形ピット内より1点出土している。淡緑色に乳白色が縞状に混じる翡翠製で、全長2.3cm、頭部幅1.3cmを測る。穿孔は片側穿孔で、貫通した側の孔は小さいままで再整形等はみられない。臼玉は周溝覆土より1点出土している。直径0.9cm、高さ0.6cmを測る。側面は緩やかに円弧を描く形態で、中央部に最大径があるが、稜線は認められない。穿孔面は平坦に調整が加えられる。詳細にみると整形痕は観察されるが、全体的に平滑に仕上げられている。凝灰岩石製と考えられる。

鉄製品は切っ先部の破片で、片刃形の鉄鏃片と考えられる。残存長4.5cm、幅1.1cmを測り、切っ先にむけて緩やかなふくらを有する。

これら周溝出土品のうち、勾玉は墳丘上で確認された方形ピット内出土という点で、墳丘および埋葬施設削平によって流出した遺物の可能性が考えられる。滑石製臼玉は周溝覆土中より１点のみの出土であるが、XI区において他に臼玉出土遺構がないことから単純に混入として片付けることはできない。勾玉同様に墳丘および埋葬施設の削平により流出した副葬品とみるならば、１点のみであることも説明がしやすい。鉄鏃・土師器甕と合わせて時期を示すものと捉えてよく、副葬品を構成した遺物として把握できる。

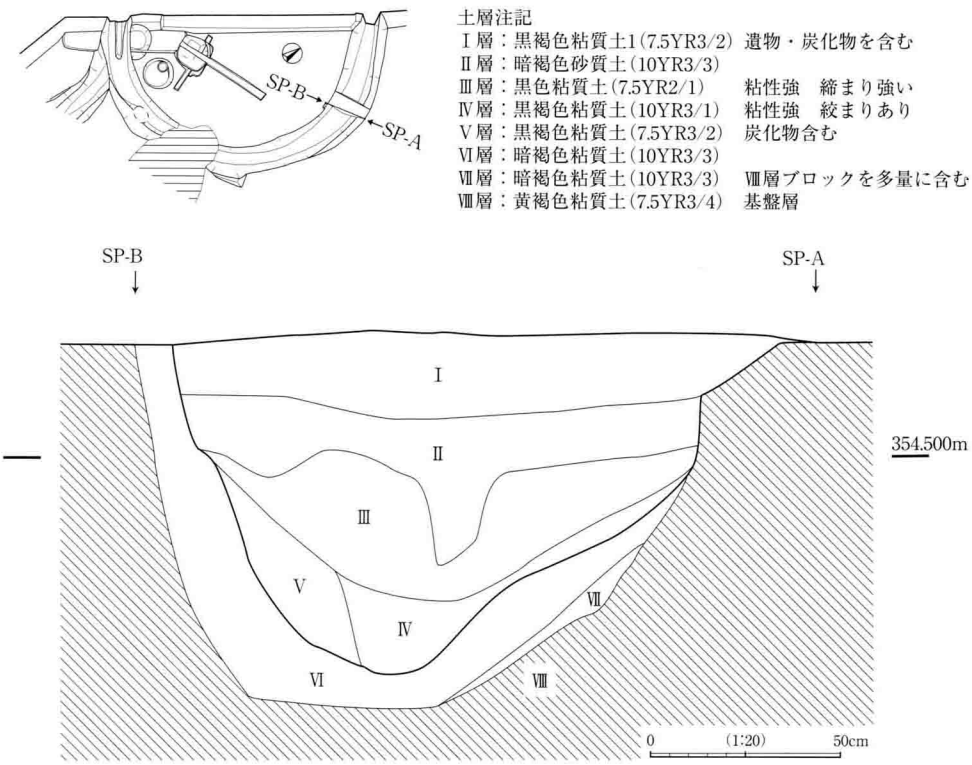


図119 周溝堆積土層実測図（S＝1/20）

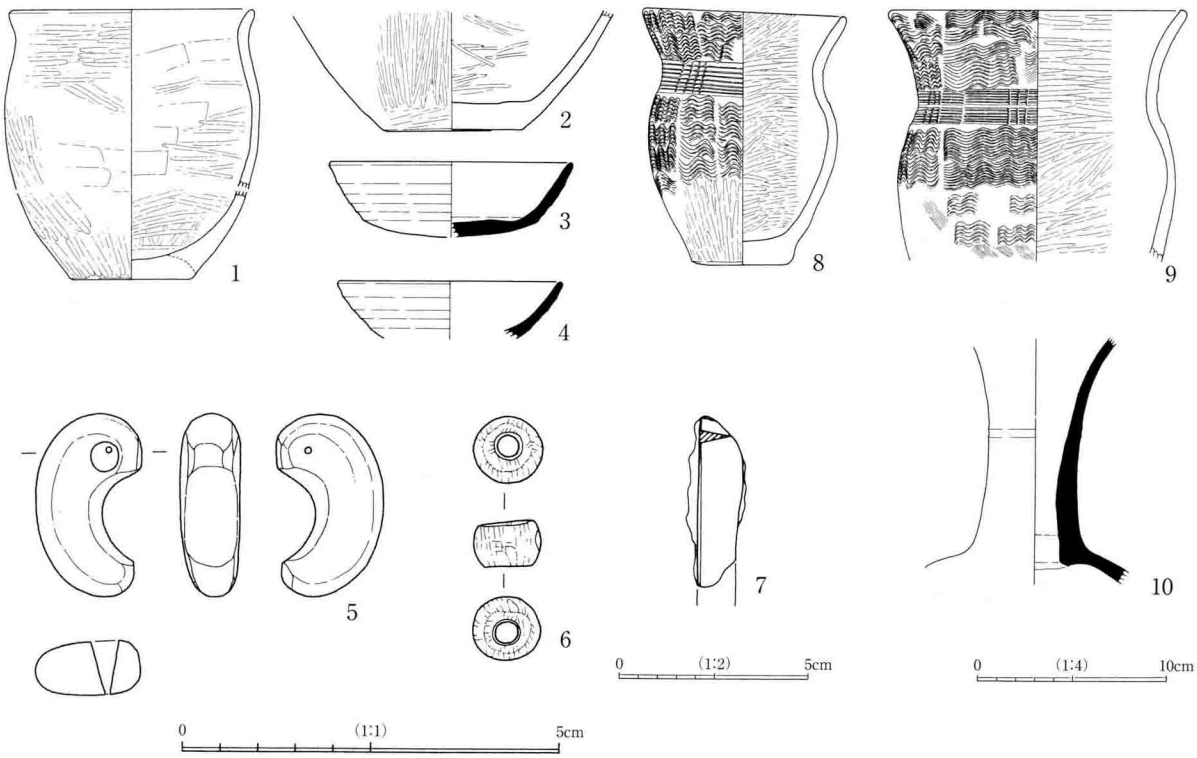


図120 SZ011・SK095・SK098出土遺物実測図（S＝1/4；1～4・8～10 1/2；7 1/1：5・6）

1～7；SZ011 8；SK098 9・10；SK095

以上より、本墳は古墳時代中期後半代の円墳と考えられる。

SB099は調査区西壁際、SZ011・SZ012に跨がる位置で検出され、ほぼ中央部を周溝によって掘り込まれる。一辺約5.1mを測るが、西側は調査区外となるため、全体形は不明である。床面は脆弱で、貼床・硬化面などは確認されていない。また、柱穴・炉などの検出もなく、出土遺物も極少量の土器小片がみられたに過ぎない。遺構確認面はSZ010・SZ012墳丘盛土下に該当し、周溝墓に先行することが確実である。

SK098は直径約1.48mを測る不整楕円形の土坑である。SB099を掘り込むが、南西側をSZ011周溝によって破壊されている。東壁際底部には不整形ピットがみられたが、SK099同様に果樹根の撹拌と判断される。底部北西壁際より弥生土器が出土している。

SK099は直径約1.32mを測る円形の土坑である。底面には木の根の撹拌と判断される不整形ピットが多くみられ、平坦ではなかった。また、出土遺物も少量の土器片がみられたに過ぎず、従前の果樹根撹拌の可能性が高いと考えられる。

SZ012（篠ノ井・高畑12号墳）（PL－11）

調査区南西隅部で検出された、直径約７mの円形墳である。北側でSZ011と周溝が重複し、南東側でSD014・SB095・SB098に掘り込まれる。SD014を境に南北で周溝の深さに若干の違いがみられるが、覆土の類似性から一連の周溝と判断している。

調査区南壁の観察により黄褐色粘質土を主体とした墳丘盛土がわずかに観察されたが、墳丘盛土の造成単位などは確認できなかった。壁際の排水溝の精査では検出面直下に基盤層が確認され、観察された盛土は墳丘造成に先立つ整地面直上の墳丘最下層と把握される。また、この盛土上には平安期包含層と考えられる黒褐色土の堆積が確認され、SZ011同様にわずかな高まりを残していたことが確実である。埋葬施設は検出されなかった。

周溝の形態は墳丘側がきつく、外側が緩い傾斜を有して立ち上がり、底部も平坦というよりは緩い円弧を描く。SZ011で確認された地山漸移層の存在は確認されなかった。

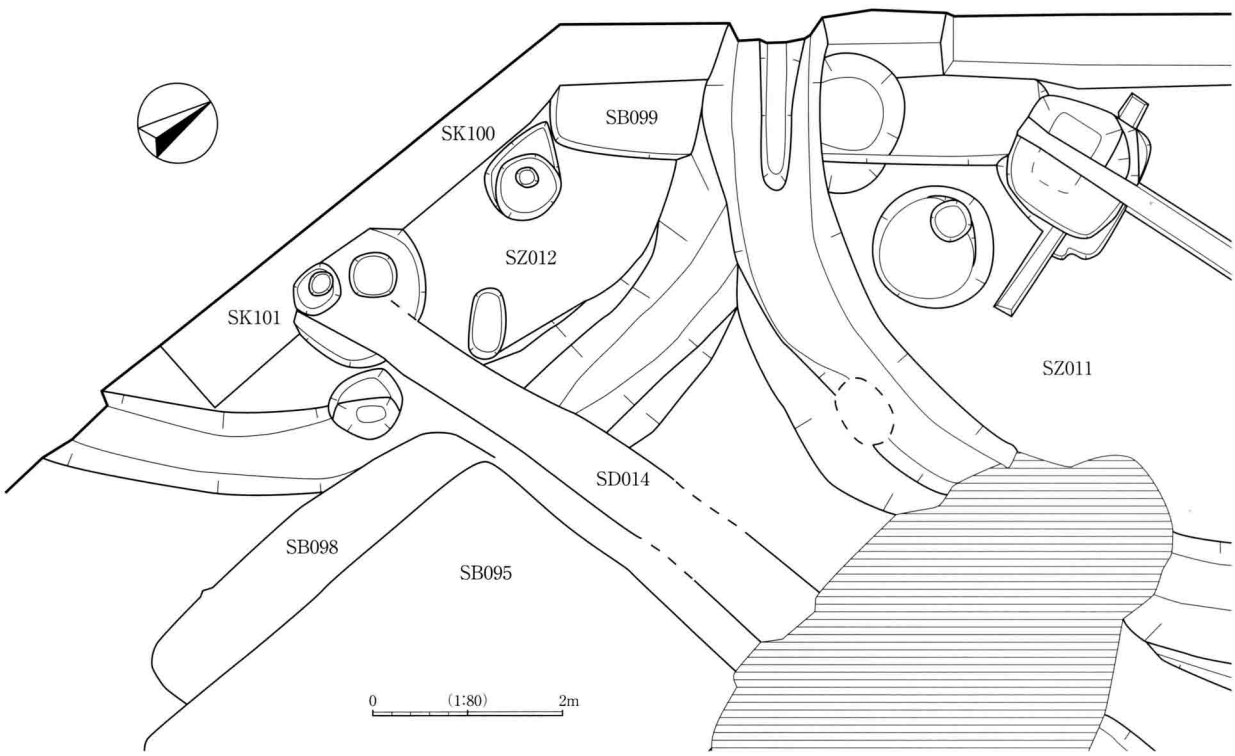


図121　SZ012実測図（S＝1/80）

出土遺物は周溝内より土器片の出土がみられたが、墳丘上からの転落状況を明瞭に示すものや意図的な設置状況が確認できたものはない。また、いずれも微細片で図化掲載できるものはなかった。破片資料からは古墳時代前期前半代の可能性が考えられる。

SB095・SB098（PL－12）

SB095は5.0m×4.1mを測る長方形プランの竪穴住居である。北東隅部を攪乱によって破壊されているが、ほぼ全体が検出できた。カマドは北壁中央部にて検出され、袖、火床、煙道が残存していた。袖は右袖下半部がよく残るが、左袖は一部が残存しているにすぎない。左袖欠損部には炭の広がりが認められ、意図的な破壊があったと考えられる。袖残存部は粘質土によっており、石・土器などの芯材は使用されていない。ただし、カマド部分の壁最上段、煙道との連結部上に2枚の板石が残存していた。この板石は確認面下の壁中に入り込んでおり、原位置を留めると考えられる。南壁付近を中心に被熱した石材片の散乱が認められ、天井部は石芯構造であったと考えられる。煙道先端部は平安時代の土坑により破壊されている。床面は中央部からカマド前面にかけて貼床が確認され、柱穴は3箇所検出された。カマド両脇の柱穴は明瞭であり、南西側も若干浅いが柱穴と認識できる。配置よりは4本柱の構造と考えられるが、南東側の柱穴は検出されなかった。南壁際中央部にあるピットは出入口施設に関連する可能性が考えられる。

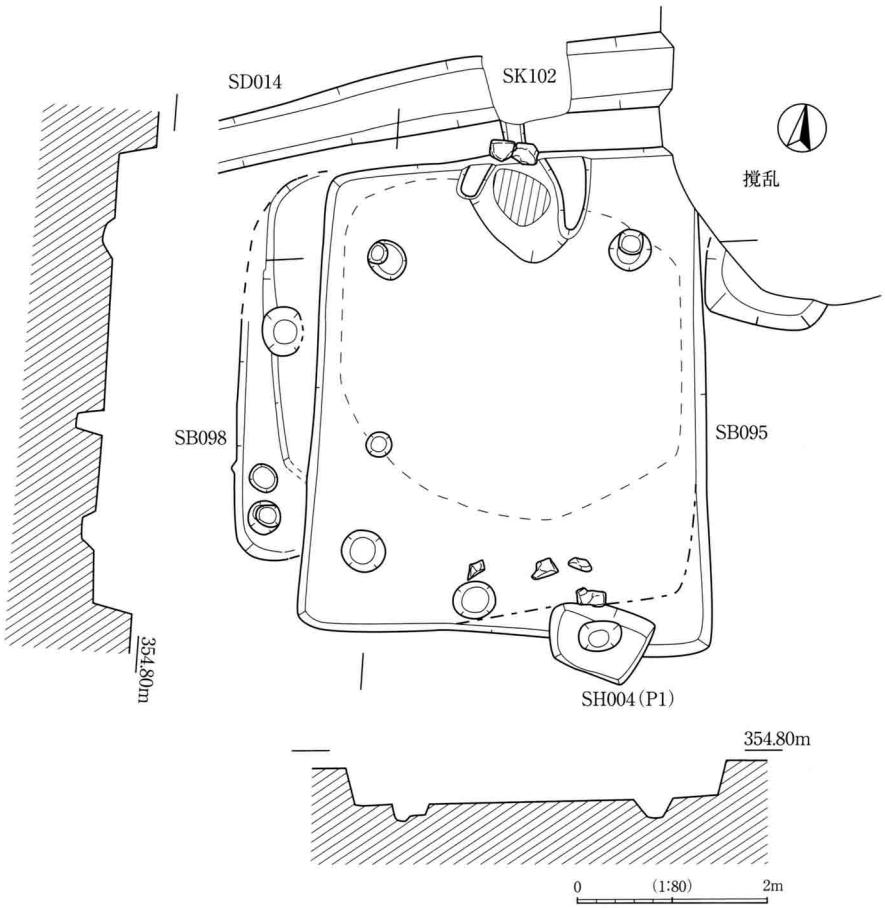


図122　SB095・098実測図（S＝1/80）

遺物はカマド周辺と南壁付近を中心に土師器・須恵器が出土している。特に破壊が著しい左袖から西壁にかけて遺物の出土が顕著で、特に図123－7の広口壺は残存した左袖部に石材2点を使用して逆位に設置された状態で出土した。

SB098はSB095西壁外で検出されたが、SB095の重複によって大部分が滅失している。西壁と南北隅部が残存するのみで、カマド・床面・柱穴などの住居付帯施設などは検出されなかった。

出土遺物には須恵器杯蓋・杯身がみられる。重複関係・出土遺物ともにSB095に先行すると捉えられる。共に奈良時代に該当し、大きな時間的差異は認めがたく、継続的に構築されたと考えられる。

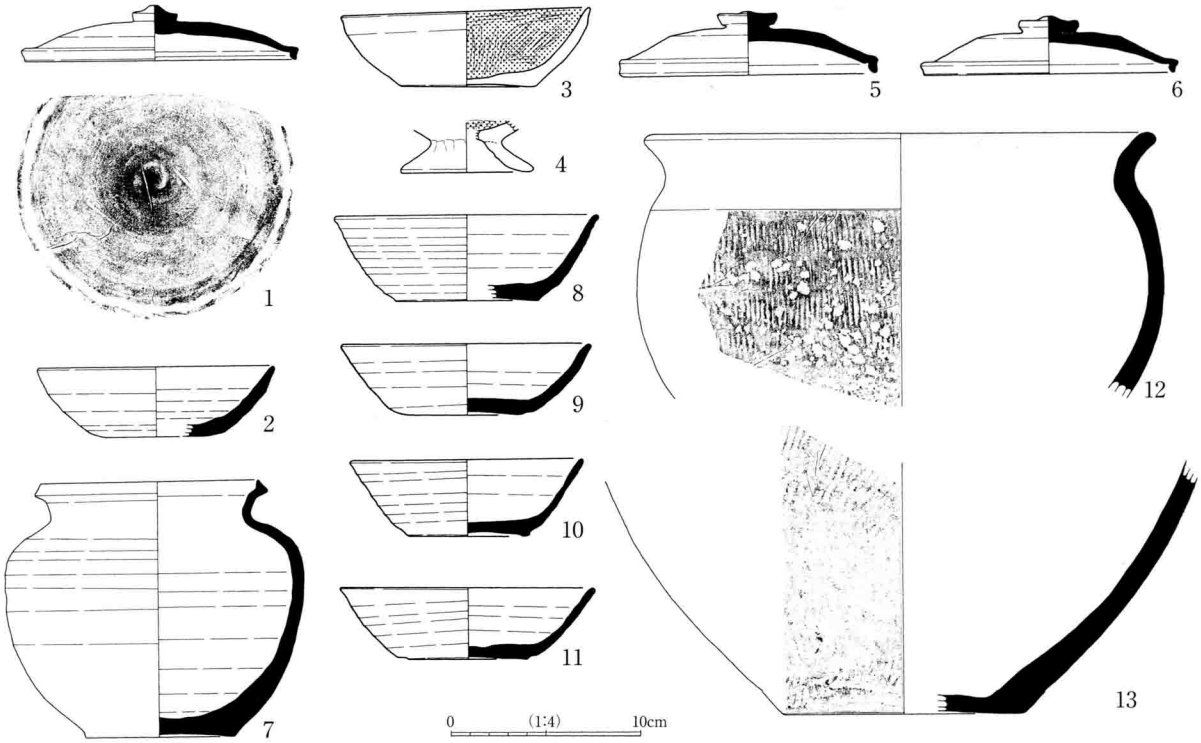


図123　SB095・098出土遺物実測図（S＝1/4）　1・2；SB098　3～13；SB095

SB097・SH003・SH005・SE021（PL－12）

SB097は調査区のほぼ中央、東壁際で検出されている。4.4m×5.4m以上の長方形プランを呈し、東側1/3ほどが調査区外となる。床面は貼床・硬化面ともに検出されず、脆弱であった。覆土掘り下げによって検出した基盤層が水平面をなしていることから床面と判断した。柱穴・カマドは検出されていない。付帯施設が検出されず住居としての要件を備えないが、撹乱の影響を受けた北東壁の一部を除いて壁面が良好に確認できたことにより、竪穴住居跡と判断した。

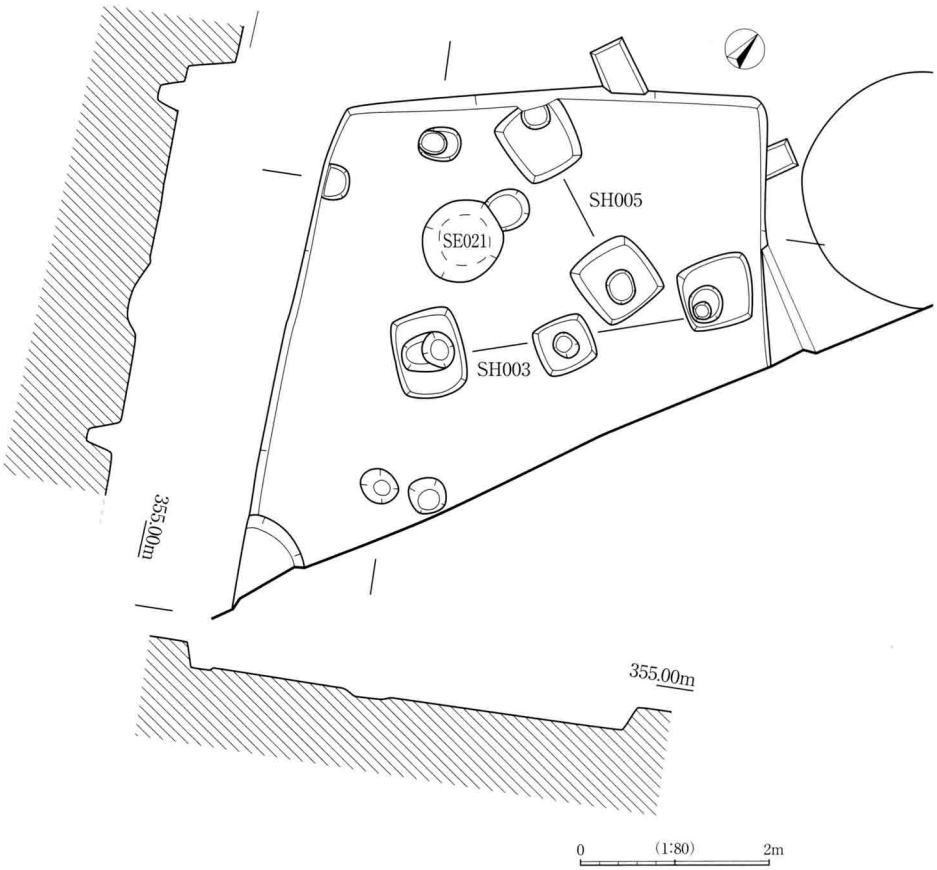


図124　SB097・SH003・SH005・SE021実測図（S＝1/80）

出土遺物は覆土中より土師器・須恵器・弥生土器・砥石が出土している。破片資料も含め土器群は須恵器が主体をなす。弥生土器も一定量存在しているが、これは床面下で確認され、北西側に延びる溝跡に帰属すると考えられる。主体をなす土器群より平安時代に属すると考えられる。

SB097床面では掘立柱建物柱穴が5箇所検出された。それぞれの位置関係からは同一の建物跡とは考えがたく、2棟存在したと考えられる。

SH003は北東―南西方向に直線的にならぶ3カ所の柱穴より構成される。他に柱穴が検出されなかったことより、東壁外へと続く2×3軒の建物跡と考えられる。柱穴にはいずれも柱痕は残存せず、柱受けの石材などの使用もない。出土遺物はないが、SB097床面で検出されたことと本調査区における遺構年代より奈良時代に属する可能性が高いと考えられる。

SH005は北西―南東方向に並ぶ2カ所の柱穴より構成される。周辺の精査を行ったが、建物を構成する他の柱穴は検出されなかった。このため、建物跡とするには極めて不十分で、規模・形態とも明らかにしえないが、SH003と異なる建物跡が存在した可能性を考慮して、掘立柱建物跡として報告する。出土遺物はないが、SH003同様、奈良時代に属する可能性が高いと考えられる。

SE021は円形・素掘の井戸跡である。SB097床面高より2mほど掘り下げを行ったが、底面ならびに湧水点まで達してない。壁面は容易に検出されたが、井戸枠に関する痕跡は認められなかった。出土遺物には弥生土器ならびに土師器片があるが、図化・掲載できるものはない。意図的に投棄された状況での出土をみなかった点からは平安時代末以降中世まで下る可能性が高いと考えられる。

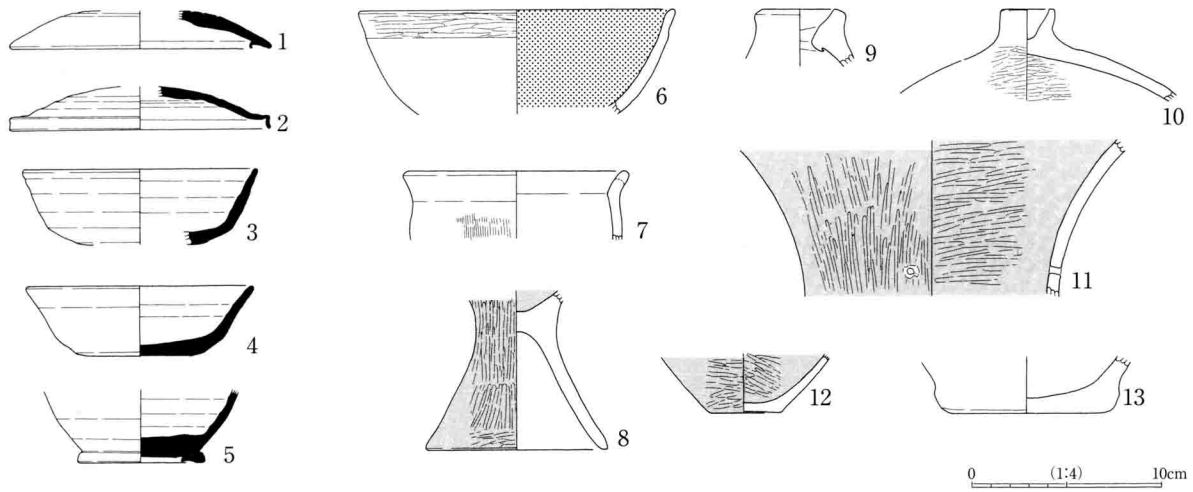


図125　SB097出土遺物実測図（S＝1/4）

SB101・SB100・SK107（PL－12・13）

SB101　調査区南端部で検出された竪穴住居である。4.0m×4.6m以上の長方形プランを呈するが、東側は調査区外となる。また、北西隅部をSK107によって掘り込まれる。床面は貼床で、柱穴はカマド西側にて1カ所検出されている。カマド東側の対象点を中心に柱穴の検出に努めたが検出されなかった。カマドは北西壁中央に位置するが、袖は残存せず、奥壁基底部ならびに火床が検出されたにすぎない。カマド周辺には少量ながら石材片の散乱が認められ、石芯構造であった可能性が考えられる。なお、石材の一部は柱穴の上部を覆う位置からも検出されており、この石材をカマド部材とした場合、カマドの意図的破壊は柱除去による上部構造撤去後に実施されたとみられる。煙道は方形ピットならびにSD015によって破壊されたとみられる。ただし、SD015の掘削深度からみて壁外で直ぐに上方へ立ち上がる形態であったと想定される。

遺物はカマド周辺ならびに住居中央部の床面直上よりまとまって出土している。完形品の出土はなく、いずれも破片での出土である。須恵器杯・甕、土師器杯・鉢・甕が認められ、須恵器高台付杯には底面に墨書が確認された。杯類底部は回転ヘラ切り未調整が主体をなし、奈良時代末～平安時代に帰属すると考えられる。

SB100　調査区西壁際で検出された。北側をSK107、東側をSB101に掘り込まれ、西側は調査区外となる。南壁の一部が確認されたにすぎず、規模・形態ともに不明である。南壁では火床が検出され、南向のカマドが設置されていたと考えられる。袖・天井・煙道などは残存していなかったが、周辺に少量ながら石材の散乱が認められることからは石芯構造であった可能性も考えられる。

床面は火床検出高で基盤層土である黄褐色粘質土に暗褐色粘質土が混ざる脆弱な状況で、貼床などは確認されなかった。この混成土は10cm前後の厚さで基盤層上に堆積しており、掘方整地土に該当すると想定される。柱穴はカマド側部で１カ所検出された。

出土遺物には土師器杯・須恵器高杯がある。これらはいずれもカマド周辺部よりの出土で、掘方整地土と想定した混成土内からは出土はみられなかった。出土土器群はSB101に先行する様相で、重複関係とも矛盾なく、奈良時代に該当すると考えられる。

SK107　SB101の北西隅部を掘り込んで検出された土坑である。1.3以上×1.7mを測る隅丸方形を呈するとみられるが、西側は調査区外となる。底部は平坦であるが、東側短壁際にてピット状の掘り込みが確認された。直接、本土坑との関連性は認められず、あるいはSB101に伴うピットである可能性が考えられる。

SD015　SB101を取り巻くように円弧を描いて検出された溝跡である。覆土は暗褐色砂質土の単一層で、礫などの混入は認められなかった。検出当初、形態より周溝墓周溝最上部に堆積する砂質土の可能性を想定して調査を進めたが、砂層下で基盤層が確認され、掘削深度が非常に浅い断面U字形を呈する溝と判明した。

遺物は須恵器片を中心に少量出土している。また、弥生時代後期吉田式土器片の出土も認められている。

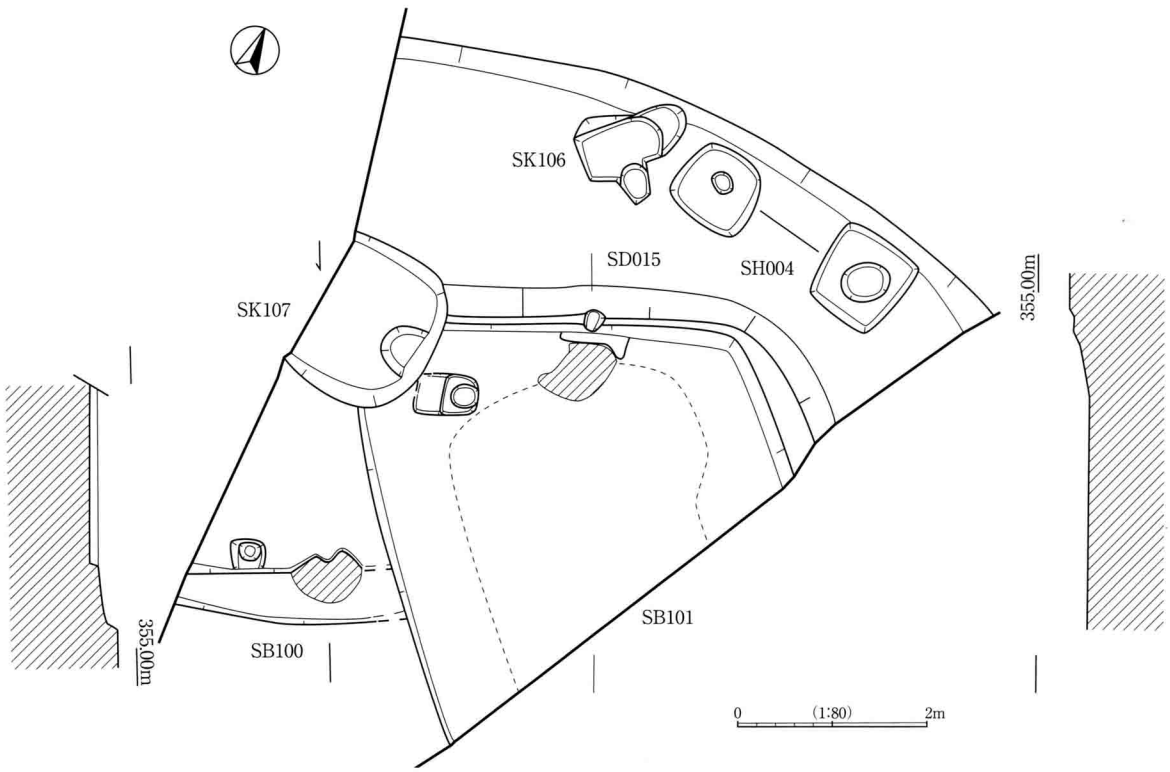


図126　SB101・SB100・SK107実測図（S＝1/80）

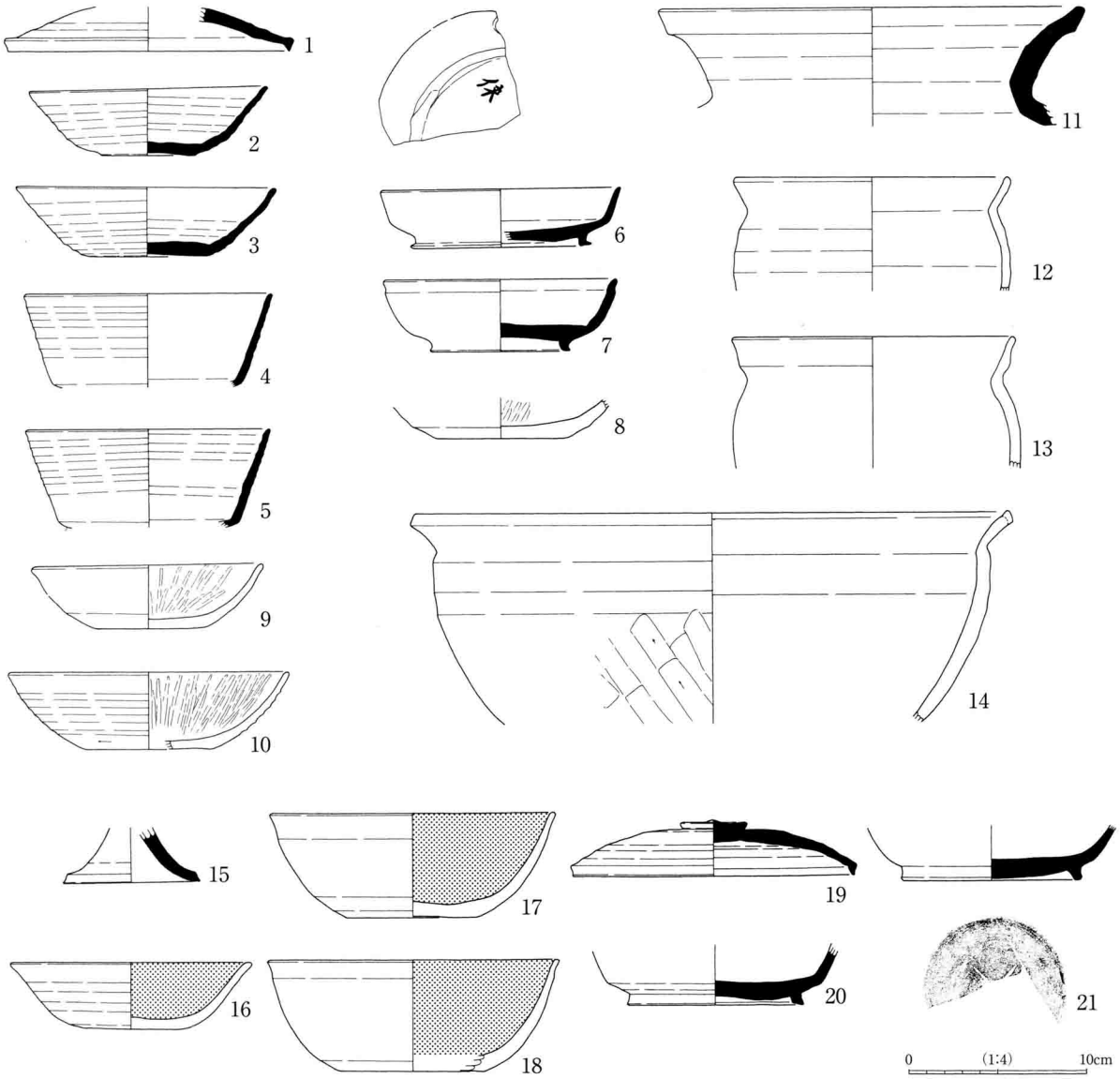


図127　SB101・SB100・SK107・SD015出土遺物実測図（S＝1/4）

1～14；SB101　15～18；SB100　19・20；SK107　21；SD015

SB092・SD012・SD013（PL－13、PL－XI　XIII　XII－1）

調査区北壁際で併走する2条の溝跡とその溝跡に掘り込まれた竪穴住居1軒が検出されている。これらの遺構について合わせて報告する。

SD013は北壁際のSD012に並行する溝跡である。西壁付近で北側に屈曲し、SD012に重複する。覆土は暗褐色砂質土を主体とし非常に堅く締まっている。また、覆土上層には多量の礫が混入する。礫は溝中央部を中心に溝底より浮いた状況で混入しており、溝としての本来的機能が失われ埋没途上にある段階で投棄されたものと考えられる。出土遺物は少なく、図化・掲載した遺物はすり鉢1点（図129－3）である。

SD012は北壁際で検出された溝でSD013と並行する。西壁付近で北側に屈曲したSD013と重複するが、屈曲したSD013以西に延長部分が認められないことからSD013同様に北側に屈曲する可能性が考えられる。覆土は暗褐色砂質土でよく締まり、SD013に極めてよく似た状態で覆土上層に多量の礫が混入する。礫は溝中央部に底部より浮いた状態で認められ、埋没過程での投棄と判断される。

調査区東壁付近では壁から底部にかけて焼土の分布が認められた（図128トーン部）。これはSD012に直接伴うものではなく、周辺に別遺構（竪穴住居跡か）が存在することを示す痕跡と判断される。SB092の検出に合わせて周辺の精査は実施したが、明確な遺構プランの確認はできなかった。

出土遺物には青磁片や銅銭・土錘・不明針状銅製品が認められる。銅銭は２枚出土し、１枚は種別不明であるが、もう１枚は1004年初鋳の景徳元宝である。

以上のように、SD012とSD013は並行しながらも西側で重複関係を有し、時間的前後関係が存在する可能性が想定された。このため、調査時にはこの前後関係の追求に務めたが、明確に把握することはできなかった。それぞれの覆土には違いがみられるというよりも、堅く締まった暗褐色砂質土を主体に上層に多量の礫が混入するというよく似た状況で、特に覆土上層への礫の混入状況からは、一括投棄されたと理解することが自然である。すると、すくなくとも礫投棄時にはSD012・SD013ともに埋没途上で同時存在していたことになる。また、SD012はSD013との重複部分の手前で浅くなり、一定の掘削深度を保ったまま重複部に達していない。それぞれが時間的前後関係を有して独立した溝であるならばSD012が重複部手前で浅くなる必然性がどこにもない。

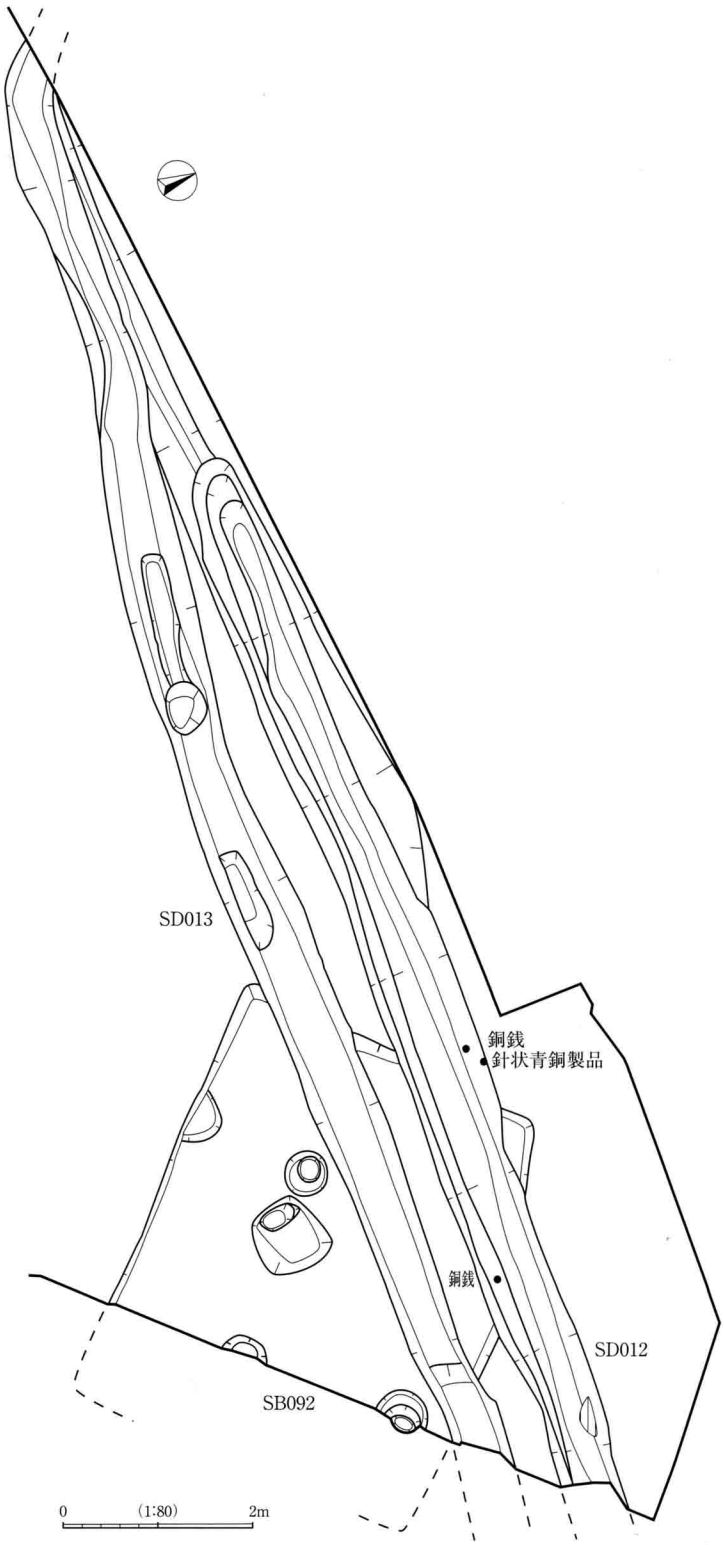


図128　SB092・SD012・SD013実測図（S＝1/80）

遺物量が少ないため詳細な時期比定による同時存在の立証は難しいが、ともに中世に属するとみられ、前述の状況所見からは時間的前後関係を有した２条の溝と解するよりも、同時存在し、水量が増加した際などに機能する分岐した一連の溝と理解することが妥当と考えられる。

SB092は調査区東壁際で検出され、北側をSD012・SD013に掘り込まれ、東側が調査区外となる。4.0m×3.6m以上を測る、長方形プランの竪穴住居である。床面は貼床・硬化面などは検出されず、堆積土層の変化をもって

脆弱な床面と判断した。柱穴は3カ所確認され、検出部分の壁面も明瞭に把握された。カマドは検出されず、溝によって破壊された部分でも痕跡は認められなかった。存在するならば、東側調査区外の可能性が考えられる。なお、SD013の本住居跡に近接した部分で焼土が検出されているが、この焼土以北に焼土粒や炭の散布が認められ、本住居跡附設のカマド破壊に伴う痕跡と積極的に評価する根拠は希薄である。

出土遺物には土師器杯・須恵器杯・土錘がある。須恵器杯は体部側面ならびに杯内底に墨書が認められる。出土遺物ならびに重複関係より平安時代に属すると判断される。

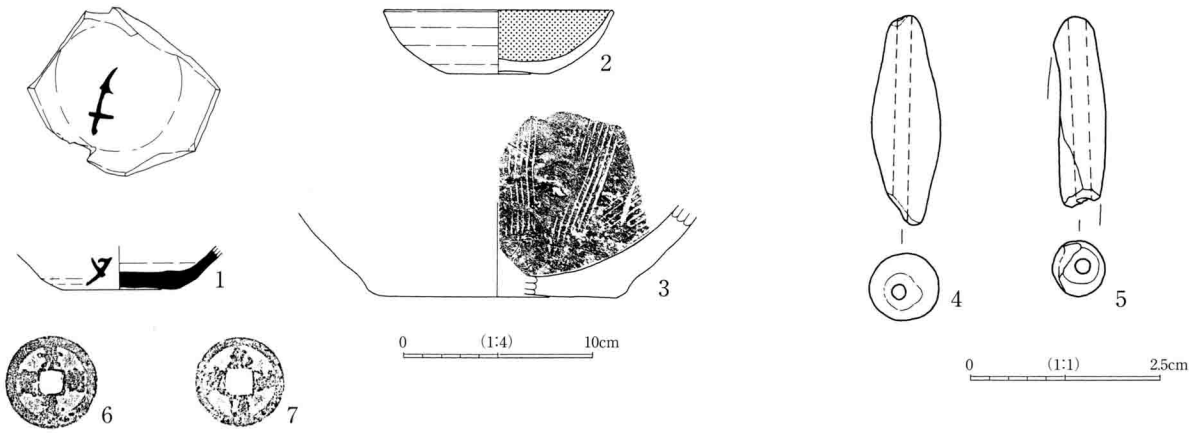


図129　SB092・SD012・SD013出土遺物実測図（S＝1～3・8；1/4　4・5；1/1　6・7；1/2）
1・2・8；SB092　3；SD013　4～7；SD012

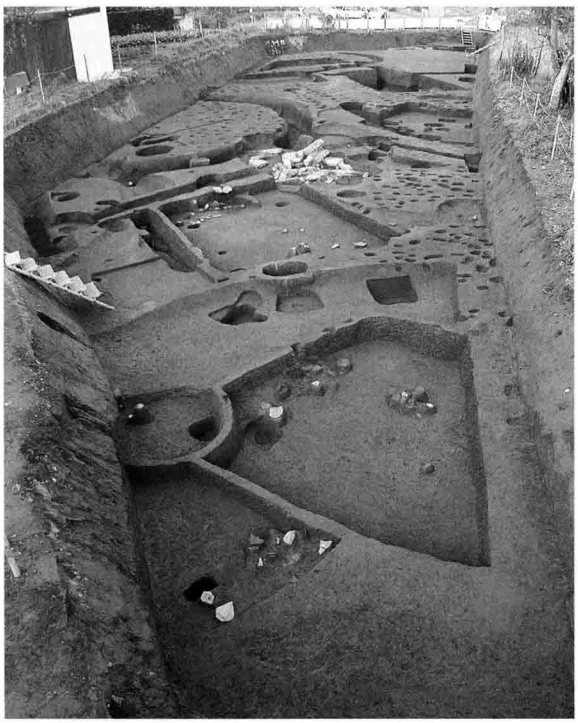


写真35　XI区全景（南から）

写真36　XI区全景（北から）

Ⅵ　XII区の調査

1　XII区の概要

XII区は南北に調査区を二分して発掘調査を実施した。平成11年11月に南半部より調査に着手し、平成12年6月に現地におけるすべての作業を完了した。

中世　明確な中世遺構は検出されていないが、調査区北側を中心に分布する井戸は中世段階に使用されていたものがかなりの比率で含まれると考えられる。また、後述する方形ピット群は本地区でも検出されており、井戸を含めてすべての重複する遺構覆土を掘り込んでいることから、中世以降の所産と考えられる。

平安時代　平安時代遺構は竪穴住居が、SZ001墳丘ならびに周溝上、SZ002西側、SZ003墳丘ならびに周溝上の3箇所で2・3軒がまとまって検出されている。規模はSB037が一回り大きいが、他はそれほど大きな差はなく、一辺5m前後の方形を呈する。カマドは北向き、西向き、東向きと一定方向に固定されないが、隣接する住居間では共通し、風向きだけでない道路の位置など集落構造を示すものとして注意される。出土遺物ではSB009より出土した金張の銅製巡方が注意される。墨書土器・刻書土器の出土も比較的多くみられ、「壬」の墨書や「間」の刻書は異なる住居から出土した土器間で共通して興味深い。また、墨の痕跡が認められる転用硯として使用されたとみられる土師器杯・須恵器杯が多くみられることも特徴として列記できよう。調査区北端部のSZ004以北においては、複数の掘立柱建物が検出されている。出土遺物がないため時期の確定はできないが、該期に属する建物跡が含まれる可能性は高いと想定される。すると、南に住居群・北に倉庫群という配置が復元でき、これはX区・XI区でみられた遺構分布と共通する。竪穴住居と掘立柱建物の組合わせは集落内の小単位をなす可能性が高く、遺構分布からみた集落構造把握のひとつの糸口を示すものとして、大いに注意されよう。

奈良時代　奈良時代遺構はSZ002とSZ003の間から竪穴住居が6軒検出され、一箇所への集中的な分布傾向が明瞭である。また、検出された住居はいずれも古墳外に位置する。古墳周溝は古墳時代後期後半代には埋没していたと考えられるが、墳丘を避けるかのように分布する状況は、該期までは目視可能な状況で墳丘の高まりが残存していたことを示すと捉えられる。いずれの住居も4m代の方形プランを呈し、柱穴が確認された。カマドは北西向きが優勢で、SB034一軒のみが北東方向を向く。出土遺物にも特記すべきものはなく、住居構成要素に各住居間で大きな違いはみられず、均質な印象を受ける。本地点は居住域として古墳時代前期以来空白期であったが、該期から集落の再形成が始まる。X区②・③地点では古墳時代後期より集落の形成がはじまっており、この時間差は先行する集落を起点として居住域が拡大した結果と解釈できる。1～2軒という小規模単位でそれまでみられなかった地点に竪穴住居が現れ、建て替えの可能性が想起されるような重複状況を持つという現象はⅣ区以東でも確認され、自然堤防上における集落拡大期の一般的傾向の可能性が考えられる。該期はまさに南側への集落拡大の起点と捉えられ、千曲川の位置変化を含めた土地利用のひとつの画期をなすと評価できる。

古墳時代中期　古墳時代中期は墳丘が削平された古墳が4基検出されている。いずれも墳丘はほとんど残存していなかったが、周溝が確認された。古墳間での周溝の重複はなく、それぞれが隣接しながらも互い違いに東西壁に接し、千鳥状に位置している。群中、最も古い古墳はSZ002で、古墳時代前期末に遡ると考えられる。その後、中期前半代の造墓空白期がみられ、中期後半になってSZ001・SZ003・SZ004が相次いで築造されたと考えられる。この中期後半代の3基の古墳では周溝底に密着して配置されたとみられる土器群が検出されている。配置方法は三者三様で、特に共通する配列意識は認められないが、いずれも破砕された可能性が高いと考えられる。

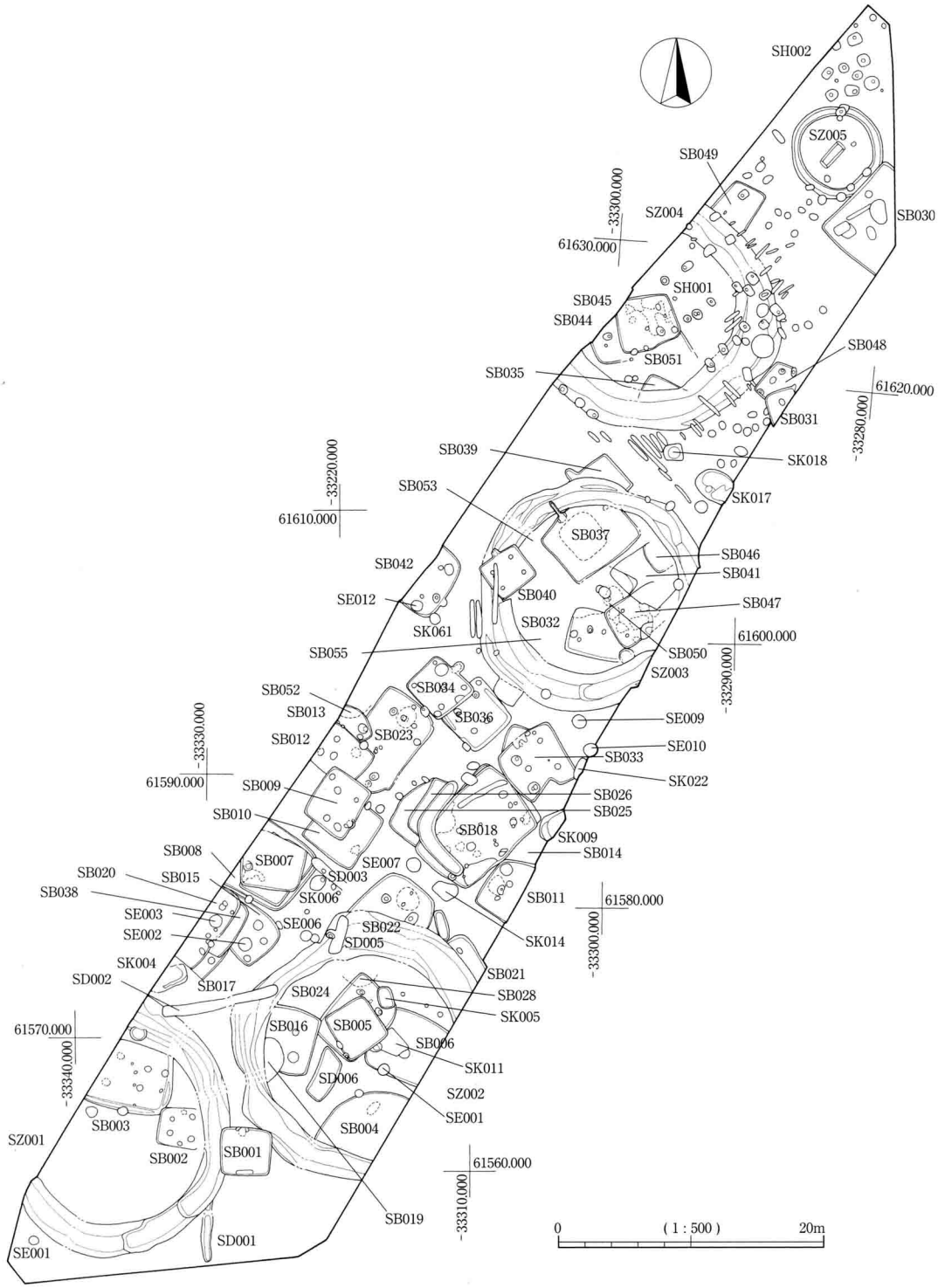


図130　XII区遺構分布図（S=1/500）

遺構名	形態	付属施設				重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
	規模 m	床面	炉・カマド	柱穴	その他	先	後		実測数	破片重量				時代	細別
SB001	方形 3.80×3.65	貼床	カマド火床と奥壁煙道は延びない	なし		SZ001			4	4.5	凹石 石鏃 （周辺検出面）		196	平安	
SB002	方形 3.10×2.90	貼床（硬化面）	カマド火床のみ	4	カマド対辺中央にピット1	SZ001			2	1.25			197	平安	
SB003	隅丸長方形 4.50×(5.0)	貼床	未検出	4			SZ001 SB002		30	58.56	打製石鏃1 ガラス小玉2 土製勾玉1		128	弥生	後期
SB004	隅丸長方形か	貼床	なし	なし	東側床面上より炭		2号墳周溝			3.6				弥生	後期
SB005	方形	脆弱	カマド	なし		SB006 SB024	SK011	掘り下げ底部は堀方底部の可能性が高い。		4.95				古墳	前期
SB006	隅丸長方形 5.0×(4.5)	貼床	炉2	2			SB005 SB024 SE001	同じ弥生時代後期であるSB024に確実に掘り込まれていて、重複関係は明瞭である。 銅釧は炭中より歯を伴って出土。墓跡の可能性を考慮してが、木棺等は確認されなかった。また、炭は貼床上に直接堆積していた。	6	11.55	勾玉	銅釧片	151	弥生	後期
SB007	不整方形 4.10×4.60	部分的に硬化面を確認	カマド火床のみを確認	なし		SB008			6	5		鉄製紡錘車	197	平安	
SB008	長方形 4.70×3.80	脆弱	検出されず	なし			SB007		5	7.25			197	平安	前半
SB009	方形 4.30×3.80	硬化面	カマド石芯構造か	4		SB010 SB012 SB023			14	11.2		青銅製巡方	199	平安	
SB010	方形 4.90×4.60	硬化面	カマド石材散乱	なし			SB009		8	6.35			201	平安	
SB011	隅丸長方形	貼床	炉	2			SE004			7.4				古墳	前期
SB012	方形	硬化面	カマド	なし		SB013	SB010			2.4				奈良か	
SB013	方形 4.3	脆弱	火床のみ	なし		SB023 SB052	SB012		7	6.65			192	奈良	
SB014	不明	硬化面	なし	なし		SB018	(SB011)			0.1				不明	
SB015	長方形 3.5	貼床	なし	なし			SB038 SE002		6	10.85			156	弥生	後期
SB016	長方形	貼床	なし	2			SB019 SB024			20.4	凹石1			弥生	後期
SB017	不明	不明	未確認	なし			SB038		3	1.75			156	古墳	前期
SB018	隅丸長方形 8.4×6.0	貼床	炉	4	溝1 土坑1		SK015	壁際を中心に焼土・炭化材が分布 土坑内より多量の土器片	30	50.55	翡翠製勾玉1 管玉1 ガラス小玉1 磨製石鏃1 石槌1	鉄鏃	135	弥生～古墳	後期新相～前期
SB019	隅丸長方形か？	貼床	なし	なし		SB016	SZ002	SB016調査の過程で床面のみ確認		1.25				弥生	後期
SB020	隅丸長方形 6.9	貼床	なし	1			SB 038 下層		3	2.15			156	弥生	後期
SB021	方形 3.45	貼床	なし	なし			SZ002	古墳・前期の可能性あり	8	7.05			154	弥生	後期
SB022	隅丸長方形 (2.8)×5.1	貼床	炉	2			SZ002		2	7.2	ガラス小玉		150	古墳	前期
SB023	隅丸長方形 4.70×7.50	貼床	炉	4	南壁にピット2				57	55	ガラス小玉1 土製円板1		141	弥生～古墳	後期新相～前期

遺構名	形態	付属施設				重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
	規模 m	床面	炉・カマド	柱穴	その他	先	後		実測数	破片重量				時代	細別
SB024	隅丸長方形 5.9×4.2	貼床	炉	4			SB028 SZ002		10	14.75	管玉 1 ガラス小玉 1		153	弥生	後期
SB025	方形 5.0	なし	なし	なし						5.55	管玉 ガラス小玉	ヤリガンナ	140	古墳	前期
SB026	不明	なし	なし	なし						1.25				弥生	後期
SB027	不明	なし	なし	なし				竪穴住居の可能性低い		1.5				古墳	前期
SB028	不明	貼床	検出されず	検出されず		SB024				0.4				弥生	後期
SB029	不明	不明	不明	不明				調査区壁面確認遺構		0.1				弥生	後期
SB030	隅丸長方形 (4.6×6.8)	脆弱	検出されず	1					33	74.9	翡翠製勾玉 1 土製円板 1 不明土製品 1	棒状品	131	弥生 ～ 古墳	後期 新相 ～ 前期
SB031	方形か	貼床	カマド	1					2	4.25			196	奈良	
SB032	隅丸長方形 (3.5×3.9)	貼床	炉	2		SB047		焼土・炭化材検出	27	51.75			145	弥生	後期
SB033	方形 4.8×4.9	貼床	カマド	4					7	27.75	ガラス小玉 1		192	奈良	
SB034	方形 4.0×3.6	脆弱	カマド (焼土)	5		SB036			2	4.65			194	奈良	
SB035	方形	脆弱	カマド (焼土)			SZ004				1.45				平安	
SB036	方形 4.2×4.2	硬化面	不明	4	壁溝		SB034		3	4.45			194	奈良	
SB037	長方形 6.26×5.30	貼床	カマド (石芯) 支脚痕	なし		SZ003			9	22.9	土製不明品	鉄製刀子 2	202	平安	
SB038	方形 4.5	貼床	なし	なし		SB015 SB020		SB015 および SB020 調査の際に確認されたため、不明点多い	8	7.95			156	奈良	
SB039	不明		カマド (焼土)							0.25				奈良 ～ 平安	
SB040	方形 3.30×3.16	貼床	カマド	4		SB053 SZ003			4	10.85	ガラス小玉 1		204	平安	
SB041	方形か	脆弱	なし	なし		SB046 SB047 SB050			7	16.45			127	古墳	前期
SB042	方形 5.2×(2.4)	貼床	なし	2			SE012 SK061		6	6.6			195	奈良	
SB043								SB045 と同一遺構		7					
SB044	隅丸方形 (3.3×2.1)	貼床	なし	1		SB045		SB045 上面に重複		8.4	軽石製品 1		121	古墳	前期
SB045	隅丸方形 4.06×4.50	貼床	なし	なし		SB051	SB044 直下	焼土・炭化材	30	12.95	石製品		121	弥生	後期
SB046	隅丸方形か (2.3×0.5)	脆弱	なし	なし			SZ003 SB041		5	0.8			127	弥生	後期
SB047	隅丸方形 4.82×3.4	貼床	炉	3		SB051		焼土・炭化材検出	9	2.55			149	弥生	後期
SB048	不明	脆弱	なし	なし			SB031			5.15				弥生	後期
SB049	不明	脆弱	なし	なし			SZ004			0.65				弥生	後期
SB050	隅丸方形	貼床	炉	1			SB047			20.7		銅鏃		弥生	後期
SB051	不明	貼床	なし	なし			SB045		10	12.9	軽石製品 1		121	弥生	後期
SB052	不明	不明	なし	なし						0.2				弥生	後期

遺構名	形態	付属施設				重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅 製品	報告 頁	時期	
	規模 m	床面	炉・ カマド	柱穴	その他	先	後		実測 数	破片 重量				時代	細別
SB053	不明	不明	なし	なし			SZ003 SB040	SB040 床面断割調査にて遺物の出土のみ確認。	8	5.8			205	弥生	後期
SB054	不明	不明	なし	なし				古墳・中期以前						不明	
SB055	不明	不明	なし	なし			SZ003		4	1.2			205	古墳	前期

遺構名	形態	付属施設				重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅 製品	報告 頁	時期	
	規模 m	床面	炉・ カマド	柱穴	その他	先	後		実測 数	破片 重量				時代	細別
SH001														平安か	
SK040	方形 0.70×0.60				SH 001 柱穴	SZ004				0.11					
SK041	方形 (0.46×0.44)				SH 001 柱穴	SZ004				0.04					
SK042	方形 0.76×0.66				SH 001 柱穴	SZ004				0.24					
SK043	方形 0.98×0.60				SH 001 柱穴	SZ004				0.35			206		
SK044	方形 0.80×0.58				SH 001 柱穴	SZ004				0.15					
SK045	隅丸方形 0.66×0.50				SH 001 柱穴	SZ004				0.06					
SK046	方形 0.92×0.60				SH 001 柱穴	SZ004				0.27					
SK047	方形 0.92×0.64				SH 001 柱穴	SZ004				0.07					
SK048	方形 0.88×0.61				SH 001 柱穴	SZ004				0.08					
SK049	方形 0.88×0.62				SH 001 柱穴	SZ004				0.02					
SK050	方形 0.98×0.68				SH 001 柱穴	SZ004				0.1					
SK051	方形 0.66				SH 001 柱穴	SZ004	SK050			0.01					
SK052	方形 0.72×0.62				SH 001 柱穴	SZ004				0.03					
SK054	方形 0.83×0.64				SH 001 柱穴	SZ004				0.05					
SK055	方形 0.76×0.54				SH 001 柱穴	SZ004				0.03					
SK056	方形 0.80×0.60				SH 001 柱穴	SZ004				0.05					
SK057	方形 0.78×0.60				SH 001 柱穴	SZ004				0.01					
SK058	方形 0.68				SH 001 柱穴	SZ004	SK057			0.01					
SK068	円形 0.66×0.63			柱穴 あり	SH 001 柱穴	SZ004				0.1					
SH002				10 箇所		SZ005								平安か	
SD001	最大幅 0.76					SZ001				0.55				奈良 ～ 平安	
SD002	最大幅 0.88					SZ001 SZ002				1				奈良 ～ 平安	
SD003	最大幅 0.62						SB008	東側で徐々に不明瞭になり、東端部は検出されなかった。		0.55				古墳	前期
SD004	最大幅 1.24					SB024 SB026				2.05				古墳	前期
SD005	最大幅 0.75	平坦			人骨 出土	SZ002		溝ではなく土坑 副葬品なし		0.25				奈良 ～ 平安	

遺構名	形態	付属施設				重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅 製品	報告 頁	時期	
	規模 m	床面	炉・ カマド	柱穴	その他	先	後		実測 数	破片 重量				時代	細別
SD006	最大幅 1.76	平坦					SZ 002 (墳丘下)	溝ではなく土坑		0.05				弥生 ～ 古墳	
SD007	最大幅 0.40	平坦						溝ではなく土坑		0.05				奈良 ～ 平安	
SE001	円形 0.94	未完掘			素掘枠 なし	SB006 SZ002				0.15				奈良 ～ 平安	
SE002	円形 1.04	未完掘			素掘枠 なし	SB015				1.7	軽石製凹石 1			平安	
SE003	円形 1.00	未完掘			素掘枠 なし	SB020				1.45	砥石 1			平安	
SE004	円形 0.92	未完掘			素掘枠 なし	SB011				0.35				奈良 ～ 平安	
SE006	円形 0.88	未完掘			素掘枠 なし					0.25				奈良 (平安)	
SE007	円形 1.06	未完掘			素掘枠 なし					0.95				奈良	
SE009	円形 1.06	未完掘			素掘枠 なし					0.4				奈良 ～ 平安	
SE010	円形 1.06	未完掘			素掘枠 なし					0.44				奈良か	
SE011	円形 1.23×1.04	未完掘			素掘枠 なし	SB034				2.26				奈良 (平安)	
SE012	円形 0.86	未完掘			素掘枠 なし	SB042				0.25				平安	
SK001	円形 0.84×0.64	平坦													
SK002	円形 0.88×0.84	平坦				SZ001			1				206	平安	
SK004	方形 (2.2×1.4)	平坦							2				206	平安	
SK005	方形 1.70×1.16	平坦				SB024 SZ002				0.1				弥生後期 ～ 古墳前期	
SK006	方形 1.24×0.94	平坦		柱穴状のピット					1				206	古墳	後期
SK007	円形 0.70	平坦				SB012 SB013 SB023								平安か	
SK009	楕円形 (1.8)×1.6	平坦												奈良 ～ 平安	
SK010	円形 0.62	平坦					SD005								
SK011	不整方形 2.04×1.80	平坦				(SB006)	SB005						151	弥生	後期
SK012	長楕円形 2.24×0.82	平坦				SB021 SB022 SZ002				0.13					
SK013	不整形	平坦				SZ002			5				206	平安	
SK014	不整形 6×1.20	平坦													
SK015	方形 1.08×0.78	平坦				SB030									
SK016	楕円形 0.90×0.58	平坦				SB030							206		
SK017	隅丸方形 (3.0)×2.26														
SK018	方形 1.40×.119	平坦		柱穴あり				周辺に同規模の土坑なし	1				206	奈良	
SK022	隅丸方形 1.60×(0.6)	平坦				SB033				0.43					

遺構名	形態	付属施設				重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
	規模 m	床面	炉・カマド	柱穴	その他	先	後		実測数	破片重量				時代	細別
SK024	円形 0.62×0.46					SZ005		SK024-028 はL字形に並び、遺構を形成する可能性が高い		0.13				不明	
SK025	円形 0.58×0.51					SZ005				0.9				不明	
SK026	円形 0.66×0.60					SZ005				0.4				不明	
SK027	円形 0.76×0.62					SZ005				0.12				不明	
SK028	円形 0.66×0.42					SZ005				0.06				不明	
SK029	円形 0.56					SB031		SK029-033・035 は直線的に並び、遺構を形成する可能性が高い		0.16					
SK030	円形 0.54×0.52									0.05					
SK031	円形 0.52									0.03					
SK032	円形 0.62×0.56									0.11					
SK033	円形 0.60×0.62									0.2					
SK035	円形 0.56×0.52									0.13				平安か	
SK037	楕円形 0.72×0.48									0.01					
SK038	方形 0.80×0.58	平坦		柱穴あり		SB049				0.01					
SK039	楕円形 0.58×0.42									0.1					
SK053	楕円形 0.96×0.85					SZ004				0.03					
SK059	方形 1.00×0.68									0.1					
SK060	隅丸方形 1.16×1.04					SB045									
SK061	円形 0.97×0.92	平坦				SB042				0.28					
SK063	円形 0.70×0.62					SB045				0.03					
SK065	円形 (0.8)×0.68					SB041				0.27					
SK069	円形 0.82×0.68					SB045				0.04					
SK070	円形 0.76×0.60					SB045				0.11					
SK071	不整方形 0.76×0.54					SZ004		SK071-073 は直線的に並び、遺構を形成する可能性が高い		0.02				奈良以降	
SK072	方形 0.74×0.70					SZ004				0.04				奈良以降	
SK073	方形 0.88×0.56					SZ004				0.03				奈良以降	
SZ001	円墳								37	52.35	打製石斧 1		164	古墳	中期
SZ002	円墳								18	49.01		鉄鏃 銅鏃	160	古墳	前期
SZ003	円墳								22	97.35	土製勾玉 1 石製勾玉 1 鉄石英管玉 1 管玉 1	銅釧 板状製品	172	古墳	中期
SZ004	円墳								21	25.2	土製勾玉	銅鏃 2	182	古墳	中期
SZ005	円形						SH002		1	4.63	土製勾玉		158	弥生	後期

表 12　XII 区検出遺構一覧表

隣接するほぼ同時期の古墳間において、周溝内土器配列の比較検討ができる希有な事例として一級の資料と評価できよう。古墳群は南西側に広がり、SZ004が北限の一端を示すと考えられる。また、本地点では該期居住関連遺構の検出はなく、墓域へと転換したことが伺われる。該期集落はⅧ区を中心とした地点で検出されており、北側に居住域、南側に墓域が展開した構造が捉えられる。これに対し、古墳時代前期には北側のⅩ区①地点を中心に方墳群が、千曲川側の南側に居住域が認められ、集落域と墓域の配置が逆転している。連続する時期にありながら、方形から円形への墳丘形態が変化する時期に集落域と墓域の位置が大きく変わっていて、時代の画期を示唆する事象として注意される。

弥生時代後期から古墳時代前期　吉田式期はSB051やSB046などが古墳墳丘下で確認されている。確認された遺構数は少ないが、吉田式と考えられる破片は少なからぬ遺構覆土に含まれており、該期遺構が重複による部分的な検出であることを合わせて考えると、本来はより多くの遺構が存在し、集落を形成していたと想定される。

箱清水式期は吉田式系の土器文様を残存する段階から、その様式崩壊段階まで遺構数の多寡はあるものの継続して人的営みが継続したと考えられる。遺構数が比較的多く、また良好な状況で検出されているのは、SB018・SB023・SB032など該期でも新しい段階である。多くの住居が北東－南西に主軸を持つ隅丸方形で、北東側に炉跡が認められる傾向が強い。これに対し、SB003やSB006など東西に主軸を持つ住居は時期的に先行する可能性があり、居住域は重なりながらも集落構造に変化が生じていた可能性が想起される。出土遺物は多岐に富み、SB018・SB023からは北関東系と考えられる土器小片の出土が確認された。さらに、SB018をはじめに古墳周溝によって破壊された住居跡には、鉄鏃やヤリガンナ等の鉄製品、銅鏃・銅釧等の青銅製品、ガラス玉、勾玉などが本来伴っていたと考えられ、各住居単位で金属製品や玉類を保有していたと考えられる。こうした点は南側に接するＡ区でも同様で、弥生時代後期終末から古墳時代前期前半代にかけて予想以上に小型の金属製品や玉類が集落内に普及していた可能性が高いと考えられる。また、SB018・SB022・SB045・SB047などの多くの竪穴住居では床面上で炭化材が検出されている。壁際付近で壁面に直交する方向に炭化材が主体的に認められ、焼土・炭を多量に伴う。また、いずれの住居でも柱が残されていた痕跡はなく、柱穴上を炭化材が覆う事例も認められ、上屋を撤去した後、壁材等を倒して焼成したと考えられる。時期的にも新しい段階の住居跡に多く認められる点は住居廃絶行為の時代相をみせるものとして、注目される。調査区北西端のSZ005はⅪ区SZ012とともに数少ない円形周溝墓の事例となる。出土遺物がほとんどないため、詳細な時期については不明であるが、該期に属する可能性が最も高い。古墳時代前期に墓域となるⅩ区南半・Ⅺ区に隣接する位置で、墓域としての土地利用が該期まで遡ることを示すと考えられる。

弥生時代後期以前　弥生時代中期・栗林式土器はSB003・SB018・SB023の覆土中より土器片の出土が見られる。調査区の中央から南側でのみ認められ、該期遺構の分布状況を示唆すると考えられる。ただし、出土した土器片はいずれも小破片で、原形が復元できる資料は認められず、遺構の検出もなかった。弥生時代前期は遠賀川系の壺が１点、SB001覆土ならびにSZ002周溝覆土より出土しているが、帰属する遺構は検出されなかった。弥生時代前期遺物は本地点においてこれが唯一例であり、遺跡形成の初源期を示すものとして注意される。

方形ピット群

Ⅹ・Ⅺ区同様に本区でも方形ピット群が検出されている。検出状況は他地区に比して悪く、部分的で検出されたにすぎないが、本来は調査区全面に展開していたと考えられる。

SZ002墳丘上から南側にかけて、列をなして検出された。南北・東西方向にそれぞれ列をなすとみられるが、本地点では南北方向の列が明瞭である。この列方向はⅩ区・Ⅺ区共通し、一連の遺構であることが想定される。

遺物の出土は下層遺構に重複する場合のみ認められ、本ピットに直接伴うとみられる遺物の出土はない。覆土

は黄褐色砂質土で、この点も他地区で検出されたものと同様である。本地点で最も新しい時代に該当する井戸跡の覆土も掘り込んでおり、中世以降の可能性が想定される。

畝状遺構

畝状遺構はSZ004ならびにSZ003周溝上より検出されている。SZ004では北側ならびに東側で周溝に直交して畝が開削されている。この周溝に直交して畝が開削される状況はX区①地点SZ006・SZ007でも同様に確認されており、周溝外側から周溝中央付近にかけて多くの畝が並列するあり方も共通する。SZ003では西側で周溝に平行して少数の畝状遺構が検出されたにすぎない。なお、SZ001・SZ002では畝状遺構の検出はなかった。

それぞれの畝状遺構から出土遺物はなく、時期の特定はできない。ただし、SZ003では平安時代と考えられるSB040を掘り込んでいることが確認され、これを上限とすることができる。また、方形ピット群には確実に掘り込まれており中世以後の新しい時代の所産とも考えがたい。古墳墳丘上への竪穴住居の分布が平安時代よりみられることから、この集落形成に伴って開削されたものと想定しておきたい。

この畝状遺構については、当初古墳墳丘の削平・地ならしが行われた痕跡と想定していたが、ことは単純ではない。SZ003の墳丘ならびに周溝上には4軒の平安時代住居跡（SB037～040）が分布し、畝状遺構が確認されないSZ001・SZ002も墳丘あるいは周溝を掘り込んで平安時代住居跡の分布がみられる。つまり、畝状遺構は竪穴住居分布域にはほとんどみられない。また、SZ004墳丘・周溝上には掘立柱建物が存在し、単に墳丘の高まりや埋没した周溝の凹みという地形の凹凸を開墾してならしたということのみではその形成の背景を充分に説明することができない。住居に近接した畑地という集落の空間構造を示す可能性を指摘しておきたい。

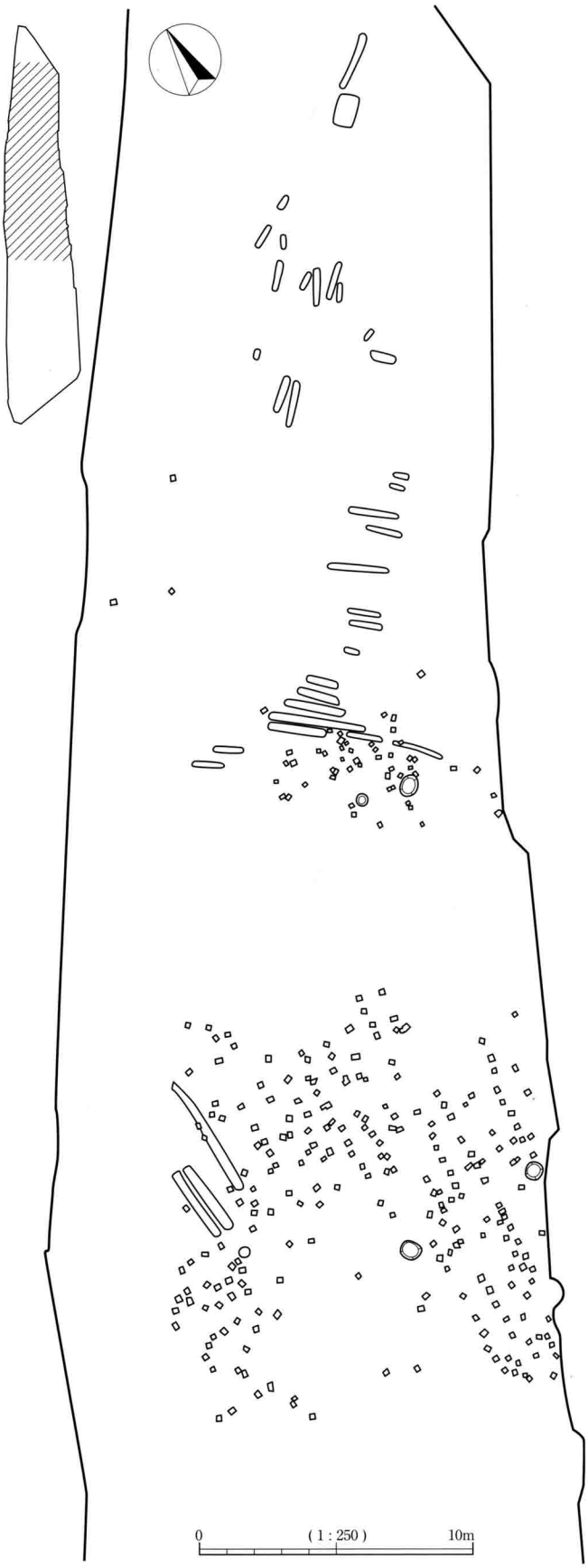


図131　方形ピット群・畝状遺構実測図（S=1/250）

2　検出された遺構と出土遺物

弥生時代前期の遺物（PL－XI　XIII　XII－1）

遠賀川系の壷が1点出土している。SB001覆土中を主にSZ002周溝覆土中からも出土しており、本来帰属する遺構の痕跡はまったく確認されなかった。

復元口径19.4cm、残存高13.0cmを測る。口縁部はごくわずかに残り、その形状を実測図に示したが、面を持つ可能性が考えられ、確定的ではない。口頸部外面はハケ調整後、ミガキ調整が施され、頸部には6条の沈線が巡る。内面はミガキで、肩部以下はナデ調整となる。胎土には砂粒が多量に混入し、色調は黄白色を呈する。胎土・色調ともに在地の土器とは異なり、伊勢湾周辺地域など外部からの搬入品であると考えられる。

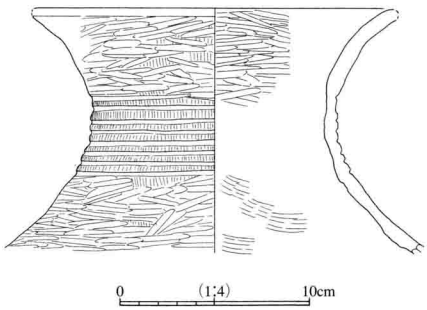


図132　弥生時代前期土器実測図（S＝1/4）

SB051・SB045・SB044（PL－14、PL－XI　XIII　XII－1・2）

SZ004墳丘範囲内で検出された竪穴住居である。3軒それぞれが重複関係を有し、SB051―SB045―SB44の順に構築されたと捉えられる。

SB051　SB045に北側を掘り込まれ、東壁のみが確認された。この東壁も南側に行くに従い不明瞭となり、南東隅部は確認できなかった。また、南壁ならびに西壁の精査も実施したが、検出・把握することはできなかった。おそらく南西隅部はSZ004周溝に達し、西壁はSB044ならびにSB035によって掘り込まれ失われていると考えられる。

床面は貼床である。貼床はSB045側でよく残り、南ならびに西側へ行くに従い、不明瞭となった。柱穴・炉などは検出されなかった。

遺物は覆土下層から床面直上にかけて土器・軽石製

図133　SB051・045・044実測図（S＝1/80）

品が出土している。壷類は頸部文様帯が篦描の直線文や横羽状文が認められ、図134－２には櫛描文が付加されている。甕は頸部文様帯が櫛描の簾状文のみで、胴部には篦あるいは櫛状工具による斜格子状の文様が施文される。台付甕は頸部に櫛描簾状文、体部上半ならびに口縁部に櫛描波状文が施文され、体部下半はハケ調整となる。軽石製品（図134－11）は円孔あるいは紐等での緊縛痕などは認められないが、加工痕が認められ、意図的に製作されたものとみられる。

以上の様相より、弥生時代後期・吉田式期に該当すると考えられる。

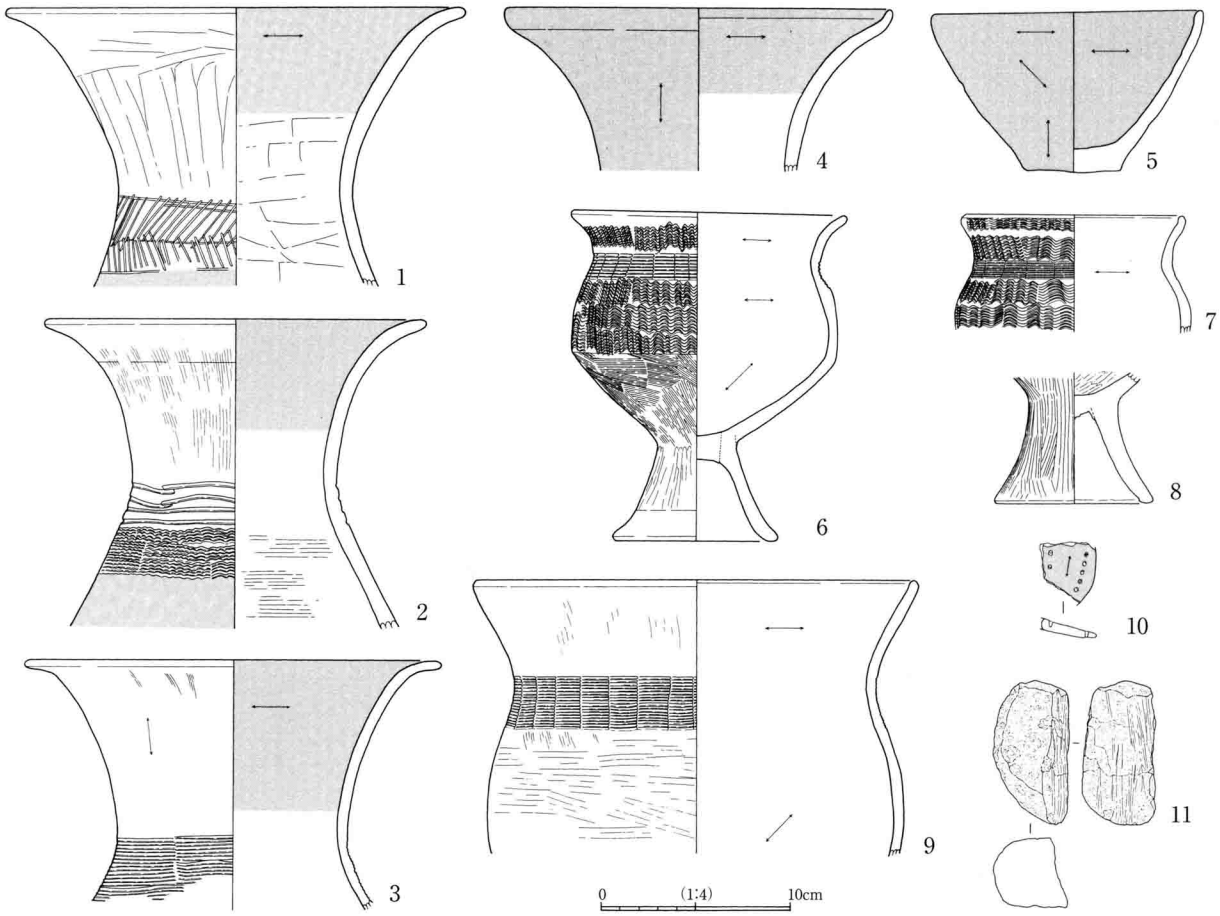


図134　SB051出土遺物実測図（S＝1/4）

SB044　東側でSB045と重複関係を重複関係を有し、北側が調査区外となる。SB045上面に重複すると判断されたが、重複部での床面等が不明瞭であったため南西側約1/4が把握されたにすぎない。唯一確認された南西隅部の形態より隅丸長方形を呈すると予想されるが、規模等についても明らかにしえない。

床面は全面で貼床が検出された。柱穴は１箇所確認されている。0.5×0.55mの楕円形掘方の東壁側に径0.2mの立柱痕が認められた。ただし、柱自体の痕跡は残存していなかった。また、SB045床面上で対になる柱穴の検出が期待されたが、掘削深度に違いがあったのであろうか、確認されなかった。このほか炉跡などは検出されず、北側調査区外に存在すると考えられる。

遺物は覆土中より土器片ならびに砥石片の出土がみられたが、図化・掲載できたものはない。土器片は箱清水式が主体を占めるが、古墳時代前期の土器片も確認される。少量認められる吉田式の破片はSB051との、箱清水式はSB045との関連で理解すると、重複状況からも古墳時代前期に該当する可能性が考えられる。

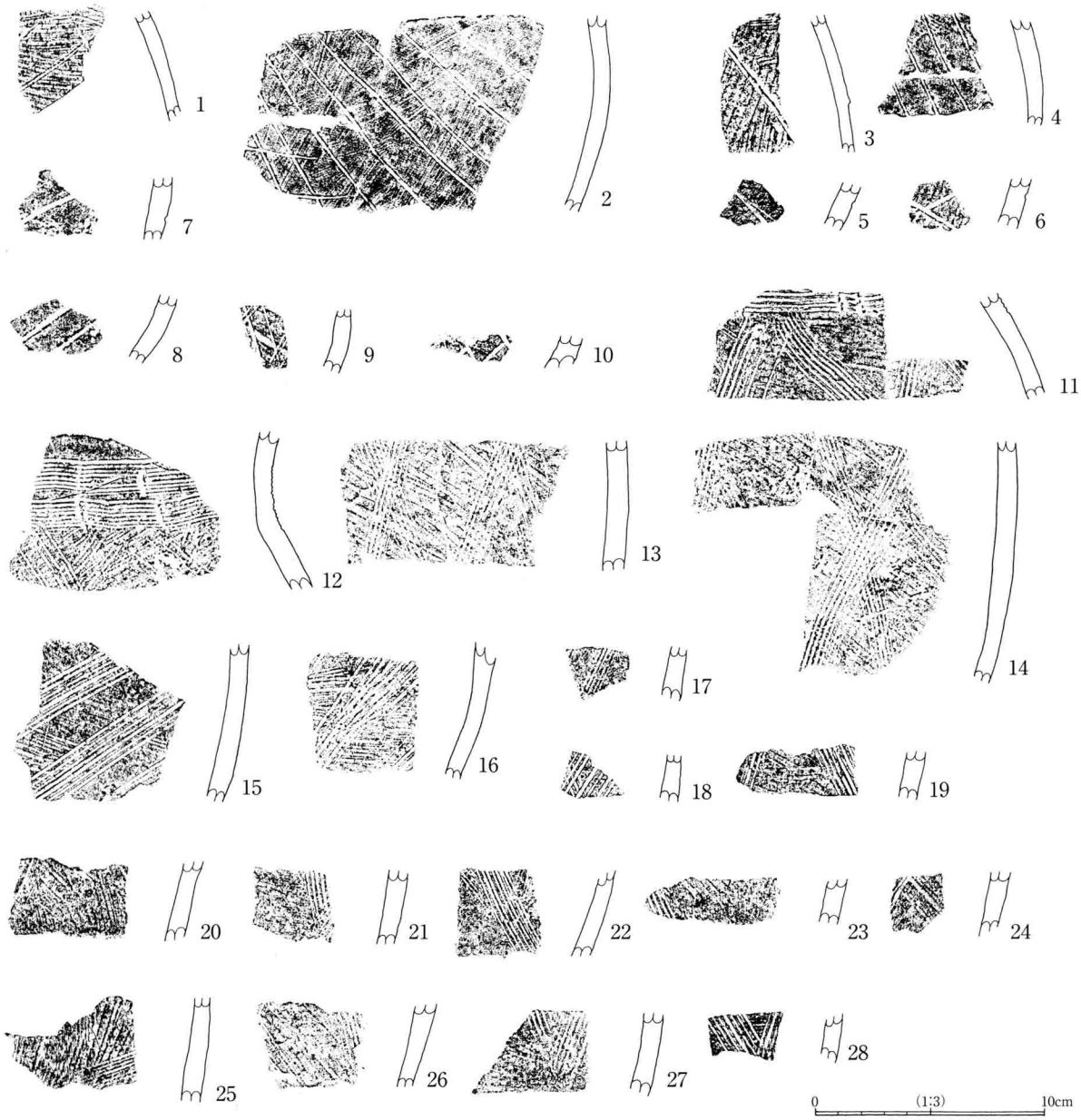


図135　SB051出土土器断面実測図（S＝1/3）

SB045　西側でSB044・南東側でSB051を掘り込んで構築されている竪穴住居である。北西隅部が調査区外となるが、ほぼ全体が検出され、4.5×4.0mを測る隅丸方形を呈する。なお、南壁中央付近で壁面が西側に向けて不自然に屈曲するが、床面ならびに炭化物の検出状況を考慮すると、SB044との重複部分に該当する可能性が高く、本来は東側からの直線的な形態であったと判断される。こう捉えるならば、SB051にSB044が重複する前後関係が把握でき、出土遺物等にみる想定順と矛盾せず理解することができる。

床面は全面で貼床が検出された。柱穴は検出されなかった。また、炉跡も検出されていない。なお、床面上より検出された多量の焼土・炭化物ならびに土器群を除去した後に柱穴ならびに炉跡の検出作業を行ったが、明瞭に把握することはできなかった。

床面上からは多量の焼土・炭化物ならびに土器群が出土している。焼土は東側を主に広範囲に広がっている。焼土の分布形状は不整形を呈し、人為的に移動された二次堆積の様相は観察されなかった。また、特に激しく燃えたと想定される箇所は見当たらず、中央部が盛り上がるように堆積している。炭層は中央部ならびに東壁際部

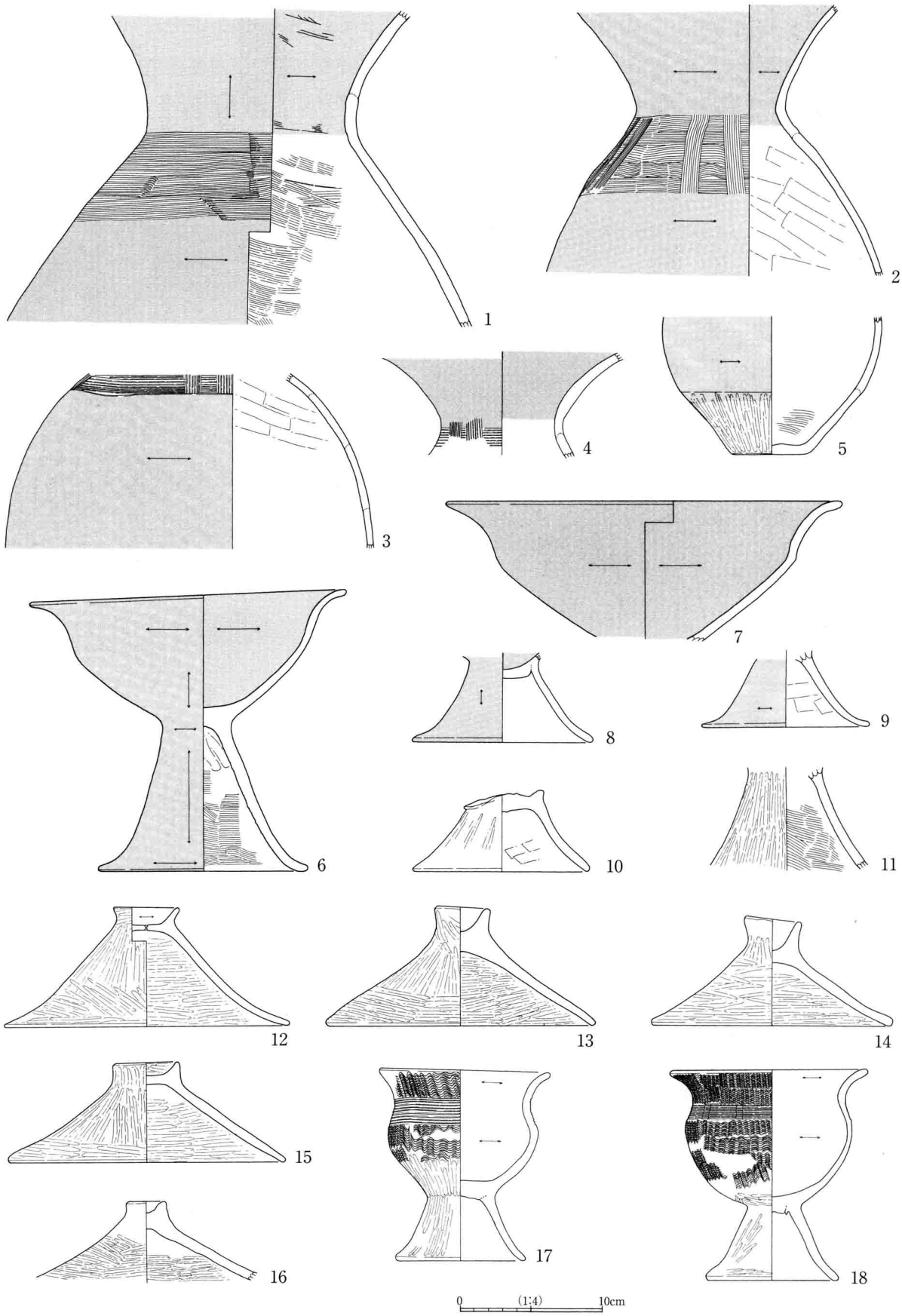


図136　SB045出土遺物実測図（１）（S＝1/4）

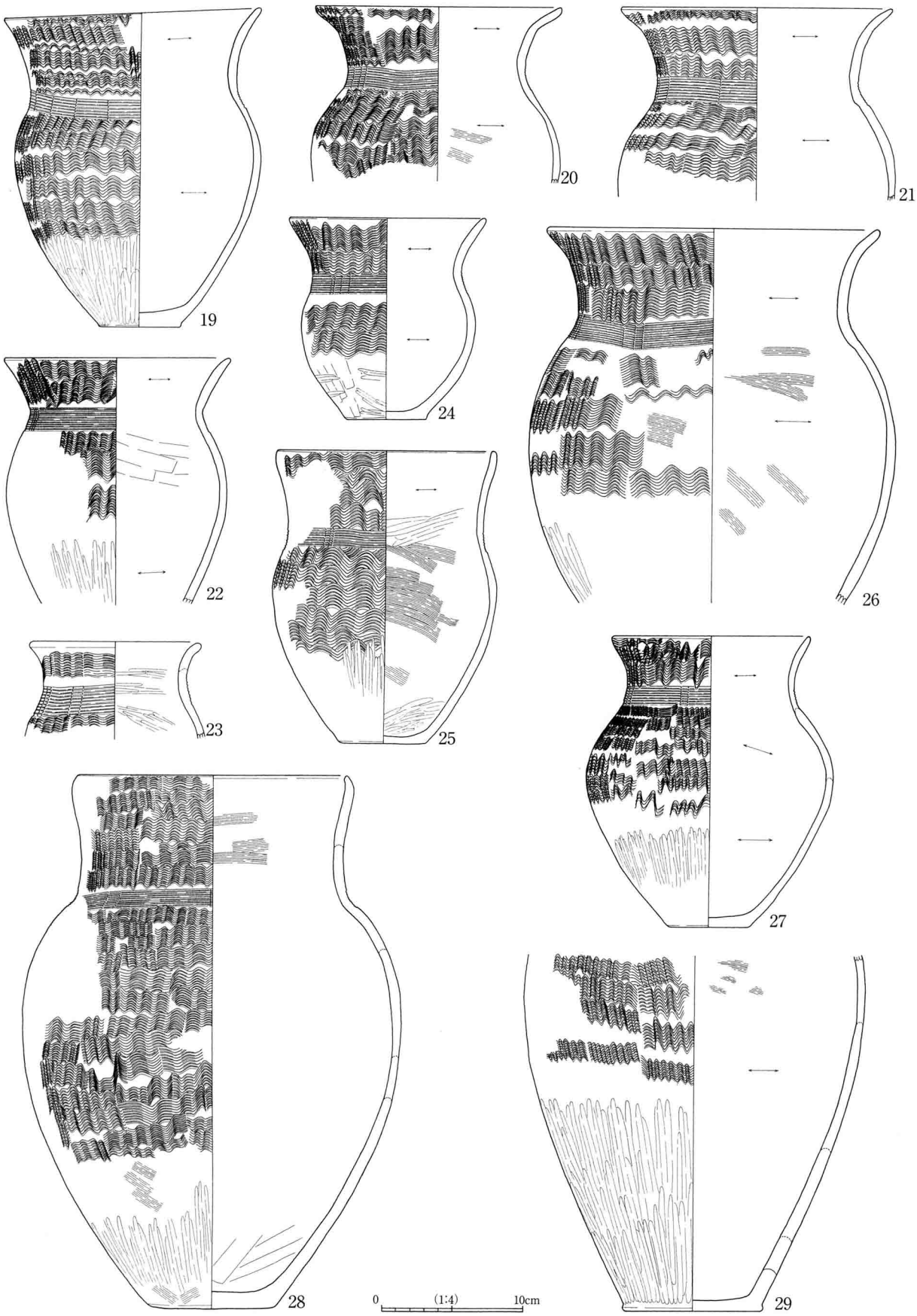


図137　SB045出土遺物実測図（２）（S＝1/4）

で焼土に接して認められた程度で、焼土や炭化物の検出状況に比して卓越しない。この点、同様な状況で検出された他住居の事例と異なる。炭化物は東側焼土分布域ならびに北西側に集中的に認められた。東側では北東方向の列とそれに直交する列が認められ、北東方向が密に検出されている。北西側でも同様の方向が確認できるが、北東方向の列に比してそれと直交する列の炭化材の幅が広い点が観察される。使用材の厚さの違いは確認できなかったが、北東方向の丸太材に対して、板材が使用された可能性も考慮される。本址では柱穴が確認されなかったため、この焼土・炭化物形成が上屋撤去以前であるか以後であるか明らかにしえないが、土器群がまったく焼土下から出土しない点や炭層が卓越しない点、焼土などの分布に偏りがある点等を重視すると、火災住居の可能性はほとんどなく、他住居で想定された壁材の焼成による可能性が考えられる。すると、先に想定した使用材の違いは固定用の杭状の丸太材と壁面を構成する板材という使い分けを想定することも可能であろう。また、炭層がほとんどみられなかったことからは、壁面に使用が当然予想される布等の有機物が同時に焼成されていないことを示していると考えられる。

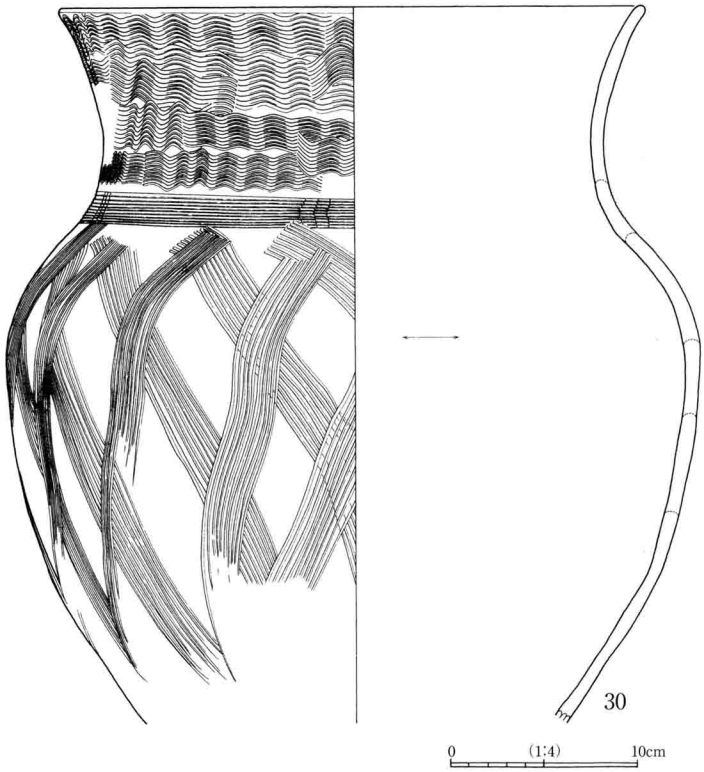


図137　SB045出土遺物実測図（3）（S=1/4）

土器群は南西側を中心に床面直上より多量に出土している。焼土・炭化物と明瞭な区分けが成されたかのように分布に偏りがみられることや少量ではあるが焼土上から出土する土器片がみられること等からは、焼成行為の後に土器群が置かれたことが確実視できる。出土した土器群には高杯杯部や脚部、壷上半部など残存率の高いものも認められたが完形個体は1点もなく、いずれも破片であった。接合状況は基本的に周辺の破片が接合する状況で、蓋や小形の台付甕、甕は復元率が高かったが、壷や高杯は逆に復元率が低い傾向が伺われる。土器の破砕に器種による違いがあったのであろうか。

出土遺物には土器があり、鉄製品・青銅製品・玉類等はみられなかった。土器には壷・高杯・蓋・甕・台付甕が認められる。壷は全体形が分かる形態に復元されたものはなく、頸部片が主に認められる。3のような球形に近い肩部形態を呈するものも含まれ、5は胴部下半の屈曲が非常に弱くなる。高杯は杯部の屈曲が直線的で大きく外反する。脚部は短脚化し、透かし孔がみられるものはない。蓋にはつまみ内部に円孔があくもの（12）とないもの（13～16）の2種が認められる。台付甕は小形品のみである。甕は口縁部が外反するものに加え、直立する形態（25・28）が加わる。胴部の球胴化がいずれの個体でも顕著で、頸部内面に明瞭な屈曲点を有する個体も多くみられる。なお、30は体部に櫛描文が認められ、吉田式に該当する。本住居出土土器群との型式差は大きく、SB051との関連で捉えるべきものと考えられる。

以上の様相より、箱清水式新相に該当し、弥生時代後期～古墳時代前期に該当すると考えられる。なお、貼床から竪穴住居と考えるが、柱穴・炉などの施設がみられないことからは一般住居とは異なる可能性も考慮される。

SB046（PL－14）

SZ003墳丘範囲内で検出された竪穴住居である。SZ003周溝により大半が失われ、西壁と南壁の一部が確認されたにすぎない。確認長は2.3×0.5mで、南隅部の形態からは隅丸（長）方形を呈すると考えられる。床面は貼床・硬化面等は確認されず、脆弱であった。ただし、壁際部のみの確認であることから、本来は床構造を伴った可能性が考えられる。柱穴・炉などの住居構造を示す施設は検出されなかった。

遺物はSZ003周溝側の覆土中層から下層にかけて土器が出土している。壷は受口状の口縁で、頸部文様帯は直線文で、直線文下に斜格子状の文様が付加されているものも確認される。

以上の様相より、弥生時代後期・吉田式期の新相に該当する可能性が考えられる。

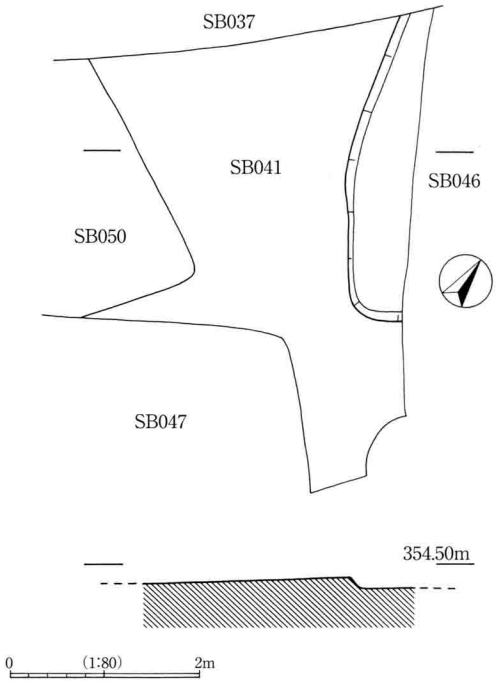


図138　SB041・046実測図（S＝1/80）

SB041（PL－XI　XIII　XII－1）

SB046・SB047・SB050上部に重複していることは確実であるが、これらの調査過程の中で把握されたため、プランなどは明らかにしえなかった。床面は脆弱で貼床・硬化面などは確認されなかった。柱穴は検出されていない。また、炉

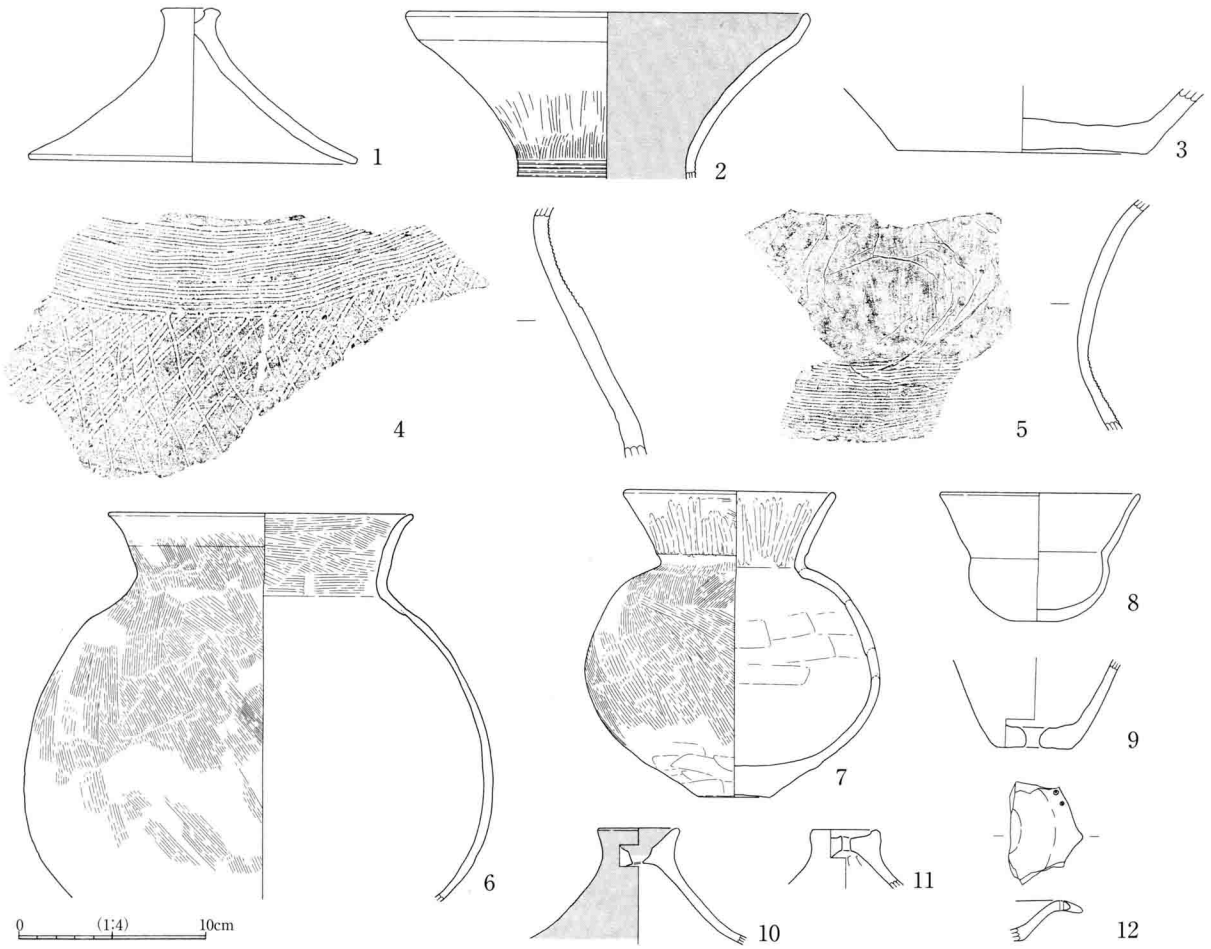


図139　SB041・046出土遺物実測図（S＝1/4）1～5；SB046　6～10；SB041

跡などの確認もない。

遺物は床面直上を中心とした覆土下層より土器が出土している。ただし、弥生時代後期の蓋や甑（図139－７～９）、古墳時代前期の坩形の小型丸底土器や壷・甕が含まれ、一括性や時期的安定性を欠く。住居跡としての要件も備えていないが、遺物の出土量は少なくなく、古墳時代前期の遺構として存在した可能性を考えておきたい。

SB003（PL－14、PL－XII－１・12）

SZ001墳丘下で検出された竪穴住居である。北側はSZ001周溝に掘り込まれ、西側は調査区外となる。

隅丸長方形を呈し、残存長は5.0×4.5mを測る。床面は全面で貼床が検出された。柱穴は４箇所確認された。西側の柱穴はともに調査区壁際での検出となるが、位置ならびに規模より柱穴として問題ないと考えられる。東壁際では柱穴軸線上でそれぞれピットが検出され、二穴一対で出入口施設に伴うと考えられる。なお、柱穴・出入口施設ともに確認深度は北側が深く南側は浅い。炉は検出されなかった。柱穴の配列から西側調査区外に存在すると考えられる。

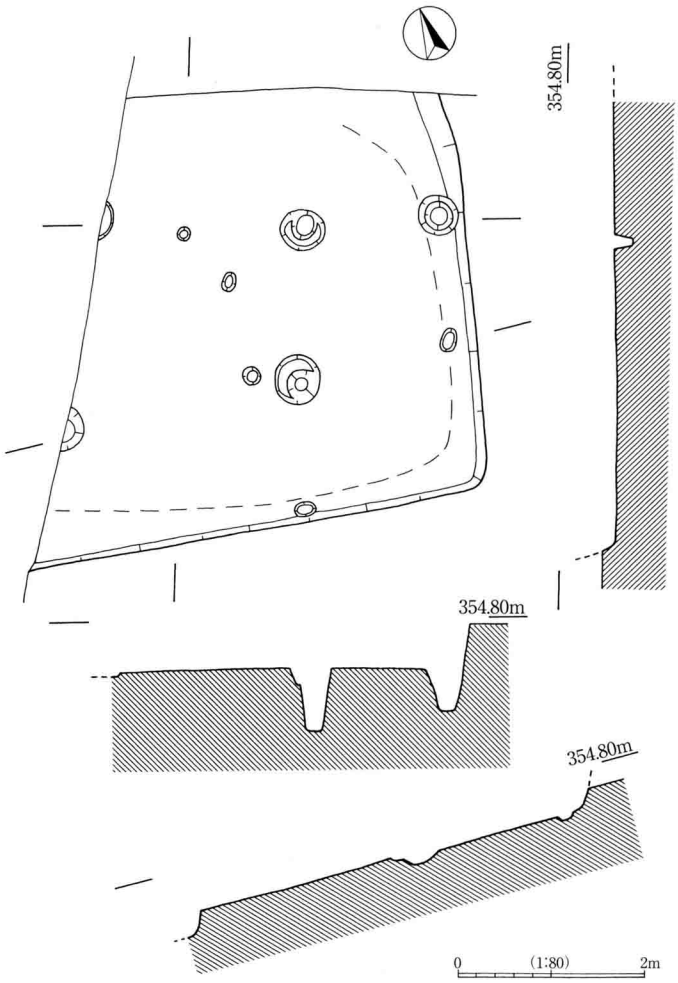


図140　SB003実測図（S＝1/80）

遺物は南半部では覆土中位より多量の土器片が出土している。東壁中央から南壁にかけて土器片が帯状に検出され、いずれも細片化して形態を留めるものはなかった。北側では南側と同一高で遺物の出土はほとんどなかったが、床面から直上にかけて土器が出土している。なお、南側の床面上からはほとんど土器は出土せず、南北で遺物出土高に違いが認められる。ただし、６の鉢や13の高杯脚部は南側の中位一括出土片と北側の床面上出土片が接合しており、北側と南側の土器群がまったく異なる段階で投棄されたとは考えがたい。遺構覆土は調査区西壁で堆積状況の観察を行ったが、分層が難しい単一土層と捉えられ、自然埋没を示すような堆積状況は観察できなかった。土器の接合状況を合わせて考えると、住居廃絶時に埋め戻しが行われた可能性が考えられる。

鉢は１・３・４・が覆土中位、２・５が床面出土で、６は両者が接合している。口縁部はいずれもつまみあげて弱い受口状を呈する。有孔鉢は７が床面、８が覆土中位出土で、鉢と同様な形態である。壷は14～16でいずれも覆土中位出土である。口縁部はつまみ上げによる弱い受口状を呈し、頸部櫛描文はT字文であり、付加文様はみられない。甕は17が覆土中位、18・30が床面出土である。31の外面はハケ調整後に鋭利な工具によって斜格子状に沈線が刻まれている。この斜格子状の沈線は破片資料中にも一定量みとめられ、多くの個体に施された文様とみられる、また、沈線と同時に羽状文も認められる。蓋は19・21が覆土中位、20が覆土下層、22が床面上出土である。台付甕は24・25が覆土中位、23・26が覆土下層である。甑は28が覆土下層、26・27のミニチュア高杯は床面直上出土である。

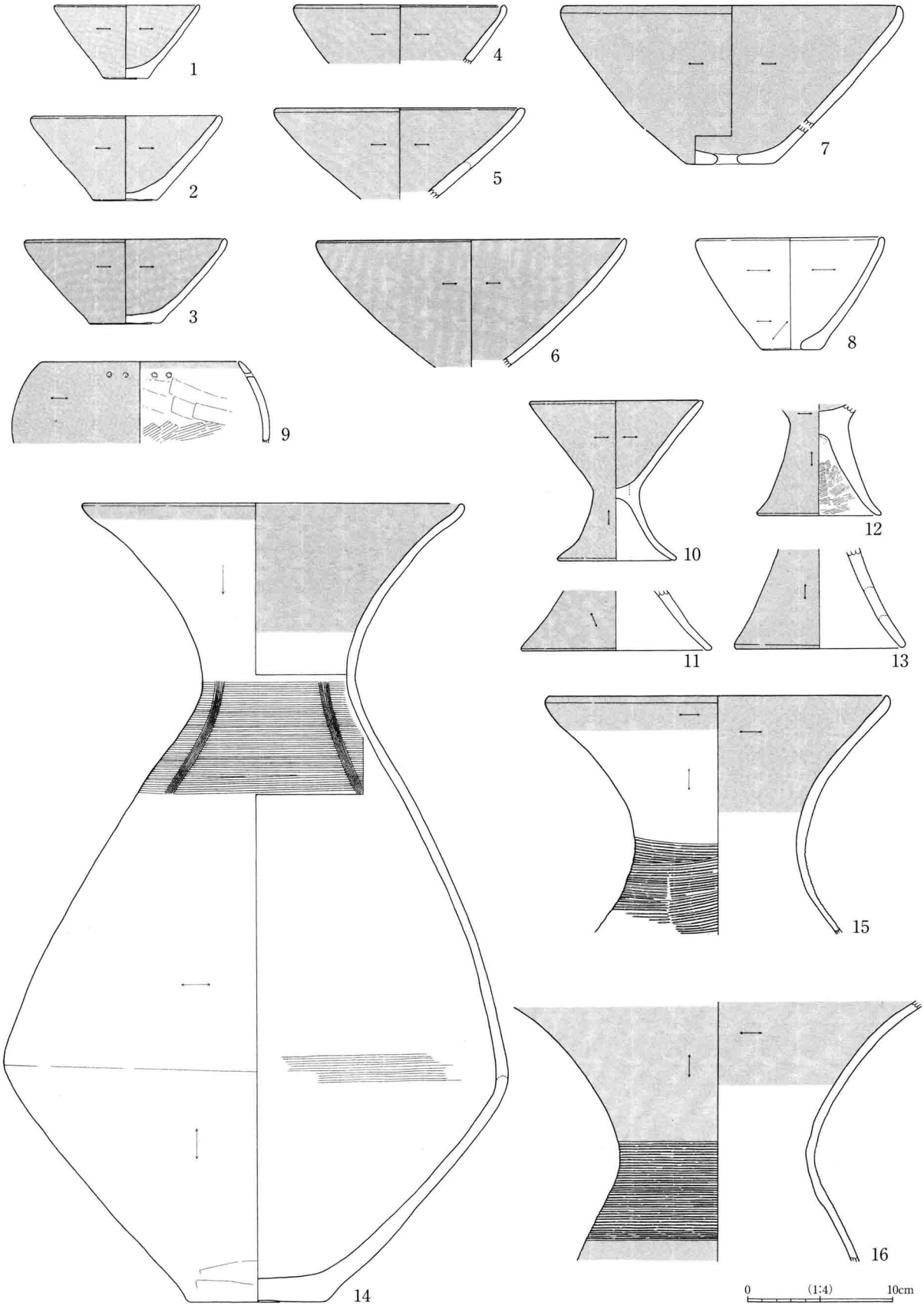


図141　SB003出土遺物実測図（１）（S＝1/4）

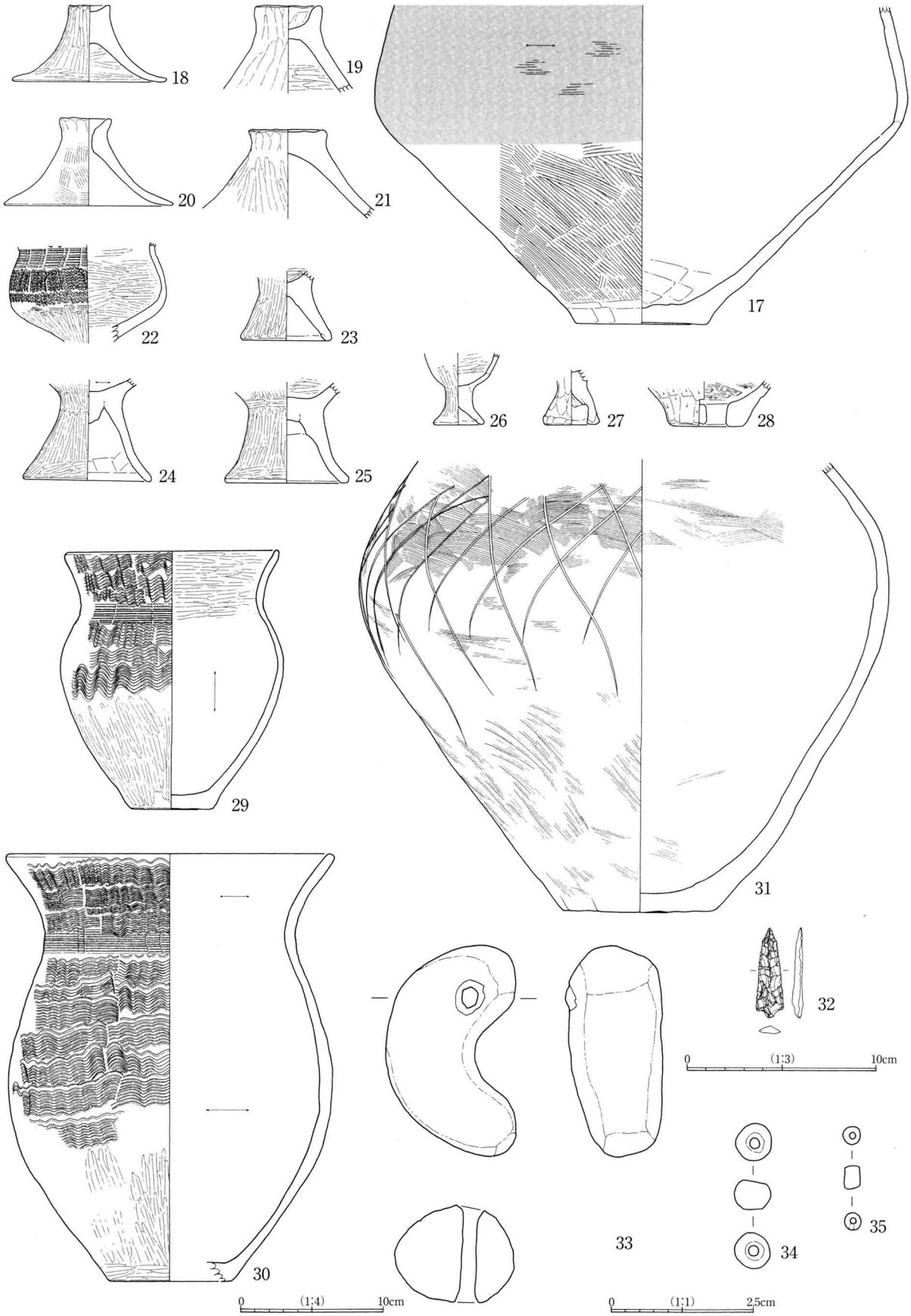


図142　SB003出土遺物実測図（２）（S＝1/4）

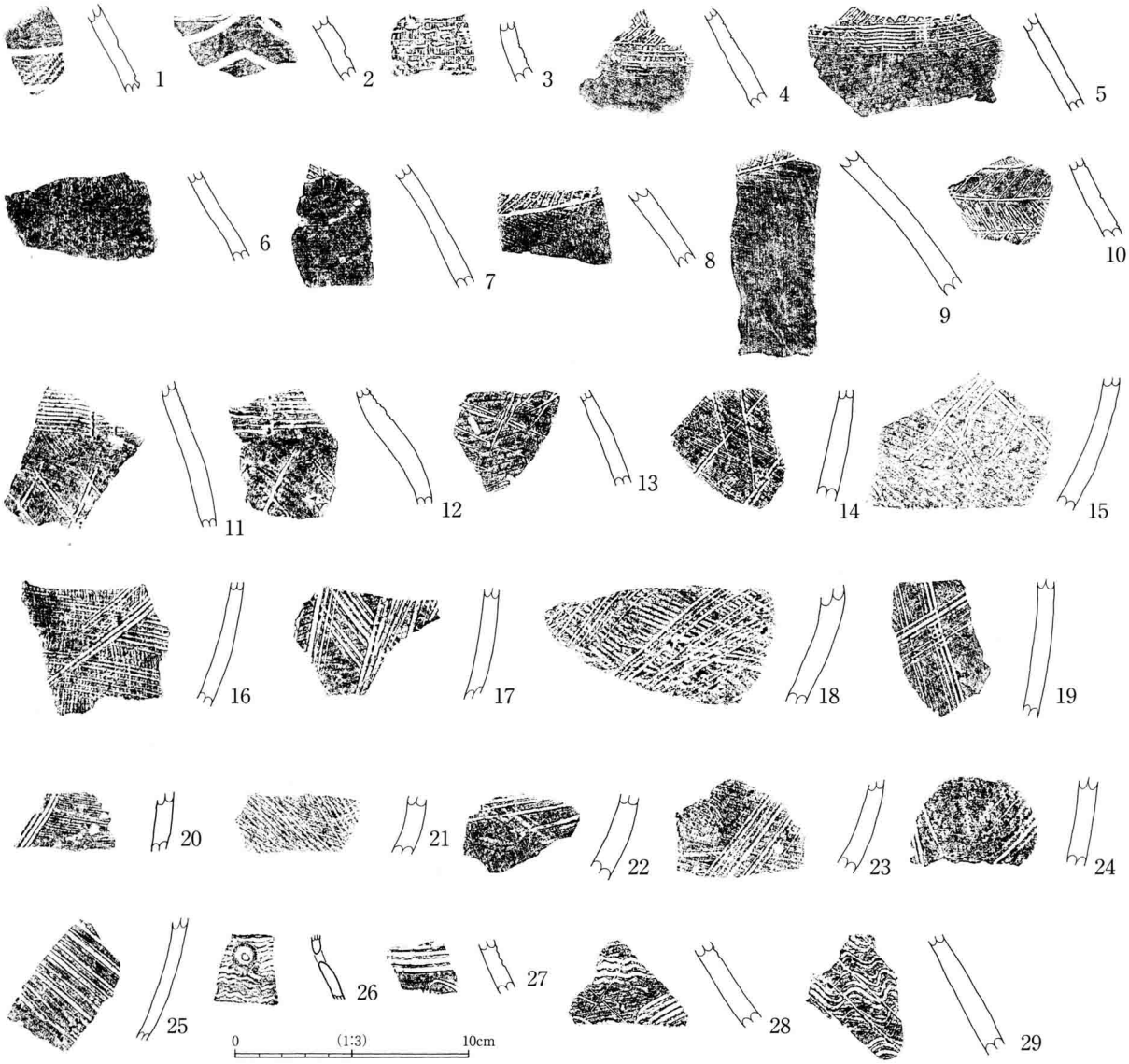


図143　SB003出土土器片断面実測図（S＝1/3）

玉類には土製勾玉（33）、ガラス製小玉（34・35）がある。土製勾玉は全長3.2cmを測る大型品である。ガラス製小玉は径0.3cmを測るスカイブルーのもの（34）と径0.65cmを測るコバルトブルー（35）の２点が出土している。石器では全長4.7cmを測る有茎の打製石鏃（32）が１点出土している。

土器の破片資料のうち、図143－１・２は栗林式土器片である。３からは頸部簾状文が鋭利な工具によって施文されているものや斜格子状の文様がみられる資料を提示したが、これらはいずれも吉田式に該当するとみられる。同様な吉田式土器片は比較的多数出土しており、また、図142－31のような胴部施文が施される資料も含まれることから、吉田式に該当する遺構の存在が想起された。このため、調査区壁際の排水溝を利用して床面下の状況確認を実施したが、本住居下に別遺構が存在する痕跡は認められなかった。ただし、吉田式と考えられるSB051では箱清水式の住居重複により破壊され、重複部外でも極めて不明瞭であった点を考慮すると、本住居周辺に吉田式期の遺構が存在していた可能性は充分想定することができると考えられる。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

SB030（PL－18・19、PL－XII－２・12・13）

調査区北西端部で検出された竪穴住居である。1/2程度の検出で、東側は調査区外となる。西側ではSZ005周

溝が上部に重複し、SZ005に先行して構築されている。確認長は6.8×4.6mを測り、長辺が7mを超える隅丸長方形を呈すると考えられる。

床面は脆弱で、貼床・硬化面などは検出されなかった。覆土を除去した段階で、基盤層である黄褐色粘質土層が確認され、これを床面と判断した。柱穴は北西側で1箇所検出されている。この柱穴は二段掘りで、下段部は西側でオーバーハングしていて、柱は直立せず住居内側に斜めに傾くと考えられる。南西側では方形の掘り込みが2箇所（P1・P2）検出されているが、どちらも掘り込みは浅く、柱穴とはならない。また、東側の調査区壁際では径1.8m程度を測る大型土坑（P4）が検出された。当初、後世の井戸跡の可能性を考慮したが、上層からの掘り込みは確認されず、床面より掘り込まれていることが確実であった。炉は検出されていない。また、炉に関わる炭層も検出されなかった。住居主軸方向における炉の位置的傾向からは北東側調査区外に存在する可能性が高いと考えられる。

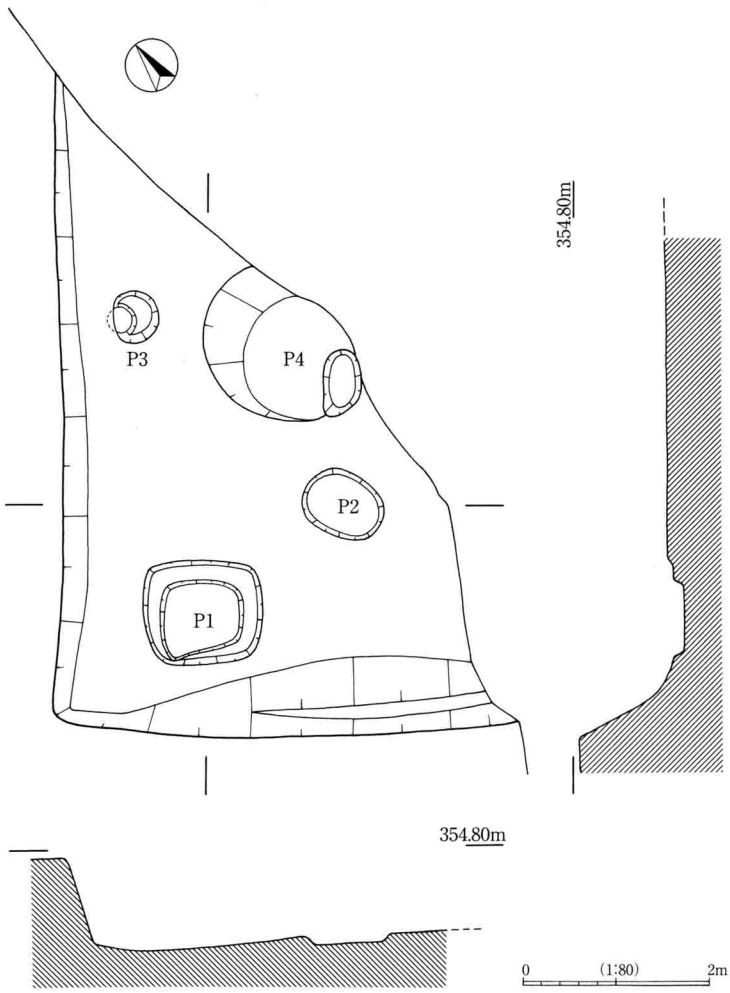


図144　SB030実測図（S=1/80）

遺物は土器・土製品・鉄製品・石製品が床面直上を中心に覆土下層より出土している。柱穴付近ならびに西側隅部付近、さらにはP1・P2の底部よりまとまって出土している。土器には壷・高杯・鉢・有孔鉢・甕・台付甕・蓋・甑がある。壷・高杯・鉢・有孔鉢という赤彩系土器群と甕・台付甕・甑という非赤彩系土器群が完全に分離し、文様帯も箱清水式として確立しているが、図145－6の壷のみ非赤彩である。この壷は頸部から胴上半が縦方向のミガキ、胴下半が横方向のミガキとなり、胴下半にみるミガキの方向は箱清水式に一般的なミガキの方向と異なる点は非赤彩と合わせて注意される。また、高杯脚部12には円形透かしが3方向に認められ、三角形透かしを主とする箱清水式にあって特異な存在である。土器群は出土状況に加えて型式的特徴からも一括性が高いと考えられ、箱清水式中葉の状況をよく示す資料と考えられる。石製品には翡翠製の勾玉が1点、床面直上より出土している。全長1.0cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmを測る小型の勾玉で、屈曲は弱く、頭部・尾部の区分も不明瞭である。穿孔は片側穿孔である。鉄製品は覆土中より不明の棒状品が1点出土している。2片に割れており、残存長は約9.0cmを測る。錆化が著しく未処理の現段階では不明な点が多いが、破断面で刃部は確認されない。土製品では中空成形で先端部が開口する袋状土製品が1点、P4覆土中より出土している。残存長8.3cm、最大幅5.1cm、先端部円孔径は4.6cmを測る。このほか、土製円盤が1点がある。

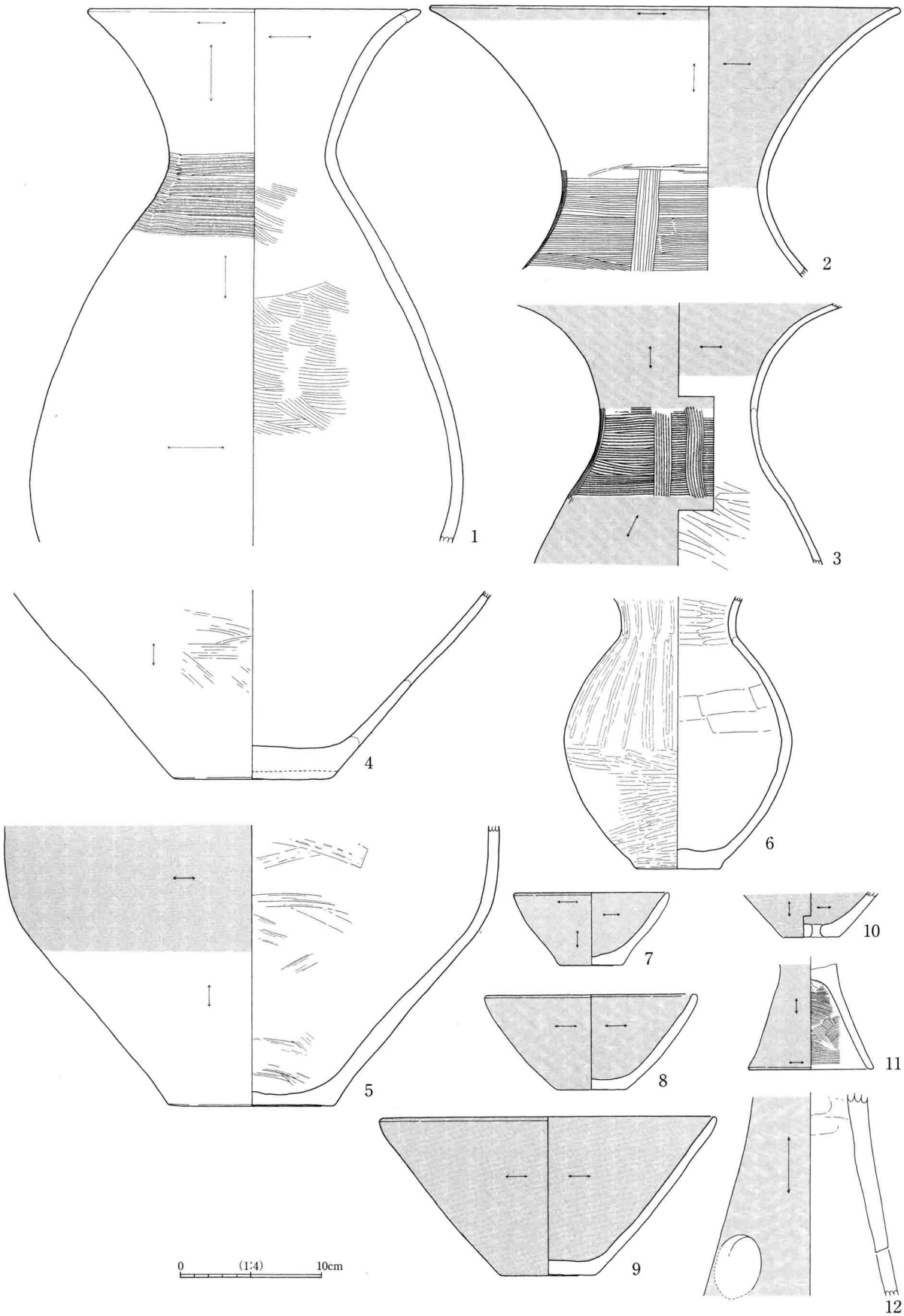


図145　SB030出土遺物実測図（１）（S＝1/4）

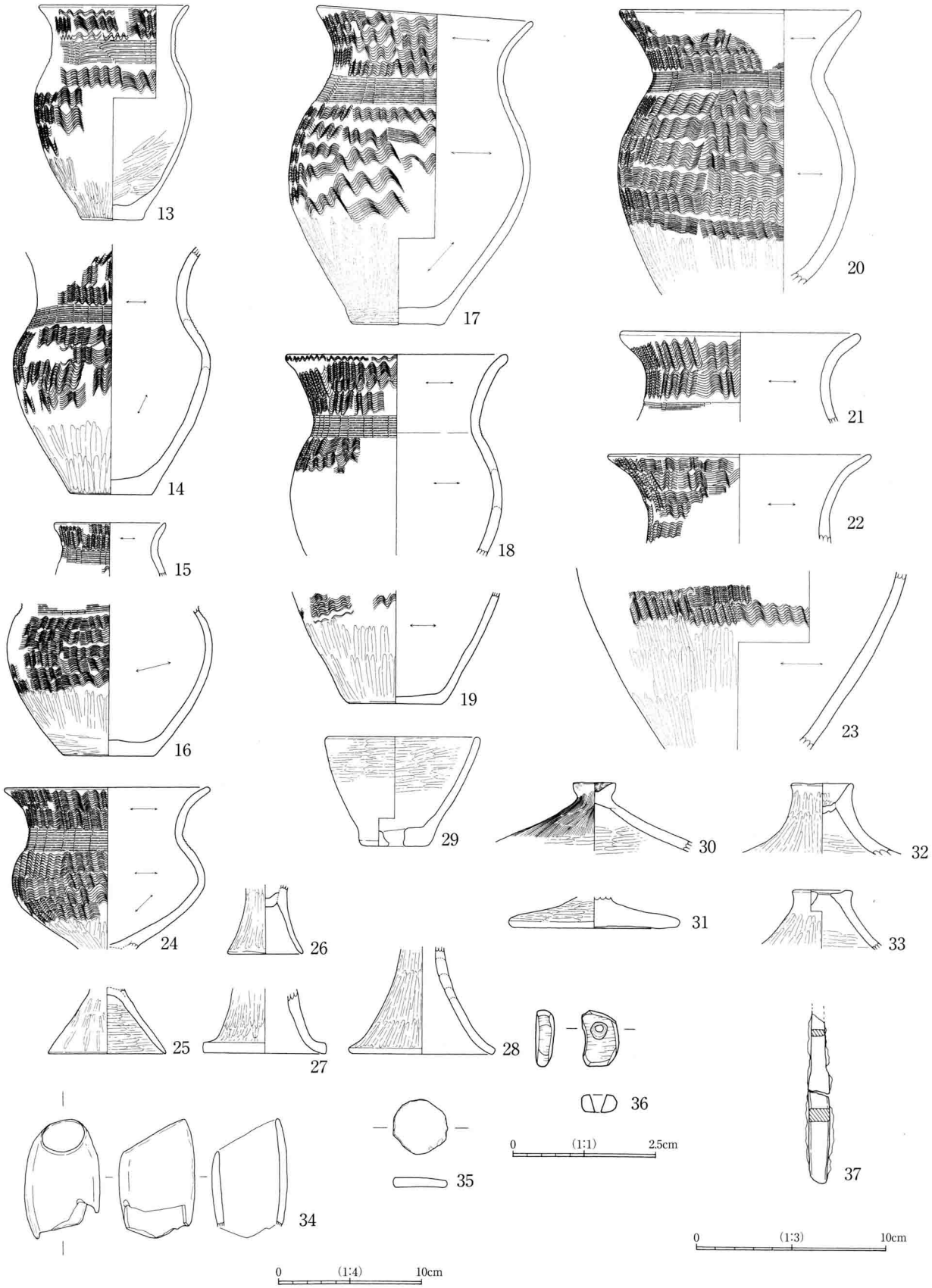


図146　SB030出土遺物実測図（２）（S＝1/4）

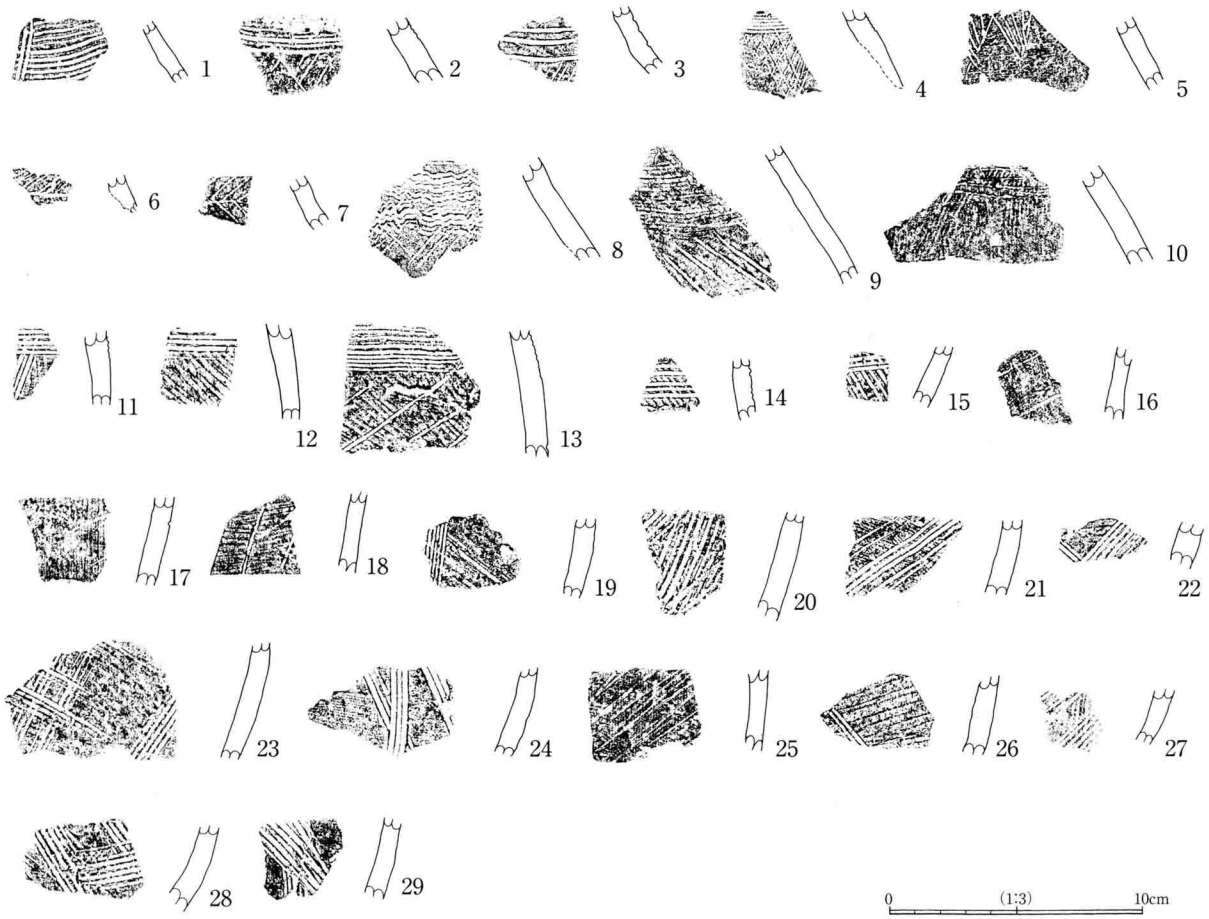


図147　SB030出土土器片断面実測図（S＝1/3）

破片資料は図147のように吉田式と考えられる斜格子状文を施した甕の胴部片ほかが一定量認められる。これらはいずれも覆土中からの出土である。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

SB018（PL－17、PL－XII－3・12・13）

SZ002-SZ003間の住居密集域で検出された竪穴住居である。8.4×6.0mを測る隅丸長方形を呈する。重複関係は西側でSB025が上部に重複するが、掘り込み深度は浅く、本住居跡への影響は少ない。また、SB025下よりSB026が確認され、本住居に先行するとみられる。

床面は貼床が確認された。ほぼ壁際部まで認められ、全面貼床となる。柱穴は北東壁側に2箇所、南西壁側に2箇所、中央南西側に2箇所の計6箇所検出された。住居中央でも細いピットが柱穴に軸を合わせて検出されており、これらが支柱痕になる可能性が考えられる。炉跡対面の西壁際部ではピットが1箇所検出されており、出入口施設に伴う可能性が考えられる。なお、二対一組になることを予測して精査したが、組合わさるもう1箇所は検出されなかった。炉は北東側の柱穴を結んだラインの若干外側で確認された。一辺0.3m程度の不整方形の範囲が浅い皿状に凹み、内部からよく焼けた焼土が検出されている。なお、この焼土周辺に炭の散布は認められなかった。

北東壁より北西壁にかけては床面を掘り込む浅い溝が検出されている。覆土中では確認されなかったが、床面上で検出された焼土・炭の分布が溝内に認められないことから、焼土・炭層形成直後に掘り込まれた可能性が考えられる。

南東壁南側では土坑状の落ち込みが検出された。三角形状の不整形を呈し、底部に密着あるいは浮き上がった状況で多量の土器群が出土している。また、土器群に接して鉄鏃１点の出土も認められた。南東壁側では掘り込みは貼床の途切れによって明瞭に把握されたが、南西壁側では床面から土坑底が連続し、掘り込みは把握されなかった。また、出土した土器片下には焼土・炭化材が確実に入りこんでおり、本土坑は住居廃絶時における焼成行為の前に掘り込まれていたが、土器群はその後に遺棄されたとみられる。

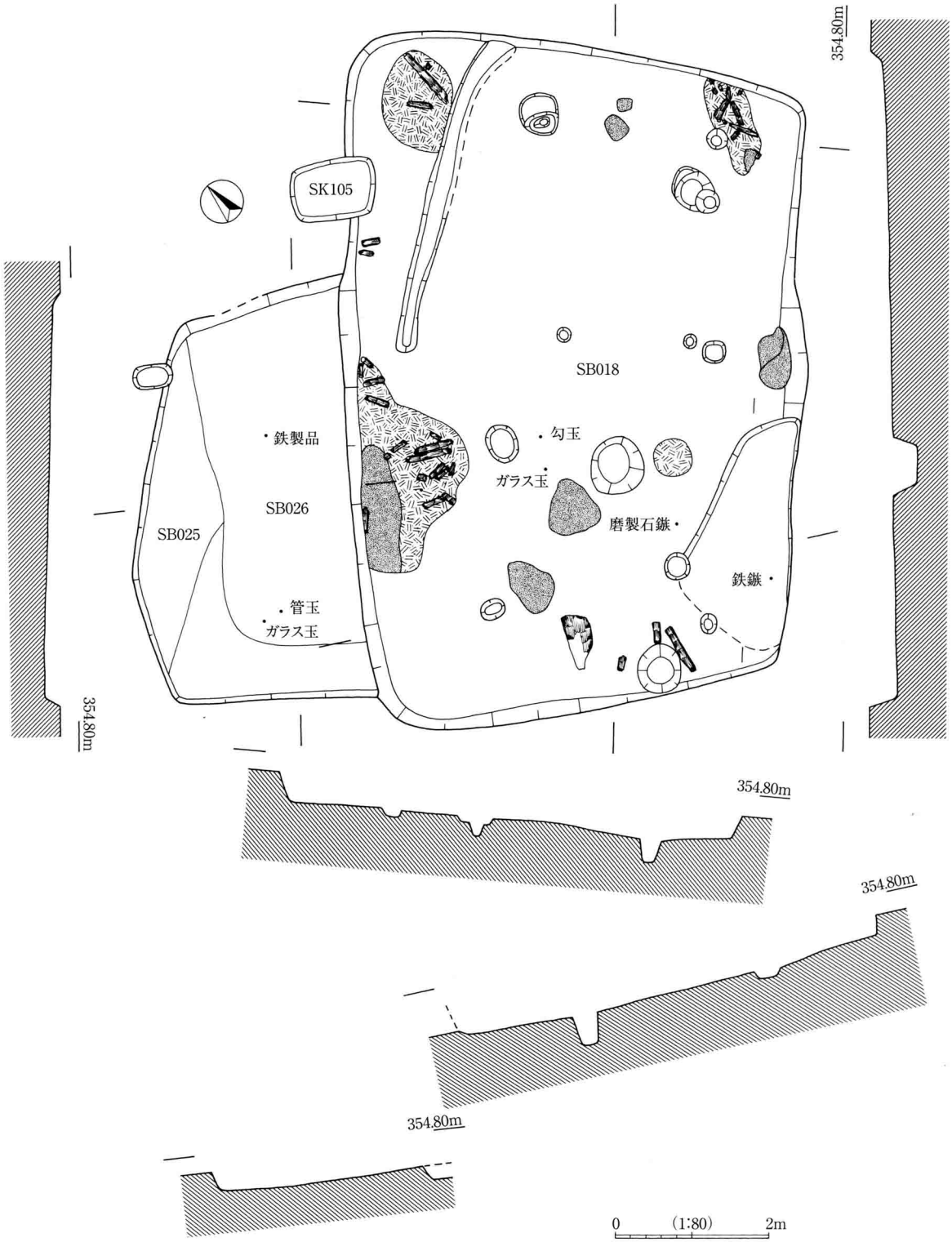


図148　SB018・SB025・SB026実測図（S-1/80）